

---

Pocket Monster Fantasia   **ケルベロスのウタ**

イヴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P o c k e t   M o n s t e r   F a n t a s i a                      ケルベロ  
スのウタ

### 【Nコード】

N 7 0 1 7 0

### 【作者名】

イヴ

### 【あらすじ】

2062年、ポケモン達の住む世界は終末を迎えようとしていた。2010年に突如として飛来して来た単細胞生物”バグ”により、世界は汚染されて住めない状況にまで陥られた。ポケモン達は絶滅の運命に抗う為、バグに対抗出来る唯一の武器”デバッグウェポン”を開発した。デバッグウェポンを扱う事を許可された政府下の組織”D - A D V E N T”に所属する”デバツカー”は、日々バグとの対決に全力を尽くしていた。そんなある日、D - A D V E N T

トワイライト支部の最弱として罵られたチーム”ケルベロス”の3人はある任務を発端に、終末を齎す敵との戦いに巻き込まれた……

## EP1：槍と弓と大斧（前書き）

この世界のポケモン達は、主人公達を含み4足歩行のポケモンの大半が2足歩行なので悪しからず。4足歩行のままの場合は、”4足歩行をした”等の描写を入れます

今作品は、残酷描写を極力避けたいと思います

## EP1：槍と弓と大斧

今から10年ほど前、争いが無く平和だったポケモン達の世界にある悲劇が起きた。宇宙から突如、謎の黒い胞子が雨のように降ってきた。胞子是一部を除いて世界中に降りかかり、地面や草木や水等ありとあらゆる物に付着して汚染し、胞子汚染はついにポケモン達にも牙を向いた。ポケモン達はこの胞子やそれに汚染された物を総称して”バグ”と呼ぶようになり、バグの汚染を免れた島国に逃れた。

しかし何時までも逃れられない、そう考えたポケモン達はバグ駆除組織”D-ADVENT”を結成、対バグ用武器”デバツグウェポン”を扱う駆除隊員”デバツカー”が生まれた。彼らは”デバツグウェポン”を使い、バグを駆除しながら、新たに汚染された物や、完璧な殲滅をするために有効な方法について、調べている。

こうしてポケモン達とバグの、狩るか狩られるかの戦いが始まった…

### カンドの森

「ヴグルルルルルルル…」

バグの汚染により嘗ての美しさを失った森では、胞子同士が集まって個体を得たバグがうろついていた。うろついていたと言うよりは、獲物を探しているのだらう。個体を得たバグを一言で言えば、”食いしん坊の捕食者”。バグは皆飢えてるから常日頃獲物を探し、喰らっている。獲物が無ければ、バグ同士で喰い合うなんてことも少

なくはない。バグもポケモン達同様、生き抜くために共食い覚悟で生きている。

「おいおい。あんだだけのバグ、俺等だけでやれるか？」

森の木々に隠れている、それぞれ武器を携えた3匹のポケモンがいた。彼らが注目をしているバグは、黒い小さな狼型の、バグの中では一般的なバグだ。そのバグは集団で動く習性があるとはいえ、かなりの量がある。

バグの軍団にツッコんだのは、燃え盛る焰を模した大斧を携えたウインディだった。彼はその大斧を振り回すに相応しい体付きをしていた。

「“やれるか”ではなく、“やるしかない”だろ。どうせあれっぽっちじゃあ、また上官に文句言われるだろうがな」

そう言ったのは、鴉の翼を模した黒い弓を携えたグラエナだった。彼は白い棒を咥えているが、コレは決して煙草ではなく棒キャンデーだそうだ。

「また文句言われるんだろ？嫌だなあ、それで先輩チームに色々言われて、悪戯されるの」

「仕方ないだろ、俺達弱小チームなんだからよ」

「その言い方は止めろって言ったろ!!」

「2人共話してるとこ悪いけどさ…来たよ、お客様が」

ウインディとグラエナの口喧嘩が騒がしかったらしく、バグの群れが此方に向かってきた。

「あーあ、隠密に行きたかったんだが」

「何時もの事じゃん、まあ俺はこの方が好きだけど」

「じゃあ行きますか!!」

「おうよ、リーダー!!」

「ああ、リーダー」

「その呼び方、止めて欲しいけど」

リーダーと呼ばれた（本人は嫌がっているが）のは、青い稲妻を模した槍を2本携えた色違いの金色レントラーだった。彼の声と共にウインディとグラエナはバグの群れに突撃、彼もまた遅れて突撃した。

「討伐目的殲滅、任務完了。引き上げるぞ」

「待つて待つて、ちいっと疲れた」

「お前なあ、いくらスタミナあるからって突っ込み過ぎだろ？」

「だって俺パワータイプだし、接近戦は当たり前だろ？」

「あーやだやだ、これだから単細胞の熱血バカは…」

「誰が単細胞の熱血バカだと!？」

「何度でも言つてやるよこの単細胞の熱血バカ!！」

バグの殲滅が終わり、疲れて足を伸ばして座ってるウィンディと、腰に取り付けてある情報端末を見てたグラエナが、また口喧嘩をしていた。その様子を、レントラーは呆れた表情で見っていた。

「ハハッ、他のチームも帰還してるだろうし、僕達も引き上げようか」

「単細胞言つなこのムツツリスケベの二枚目キャラが!！」

「誰がムツツリスケベだ!？俺はムツツリでもスケベでもましてや両方でもないっつの!！」

「聞いてないし…」



レントラーはただ単に、何時までも口喧嘩をしてる2人を眺めてるしかなかったのだった。

僕の記憶が始まったのは、あの2人に会ってからだ。それまで僕には、何の記憶も無い。だからせめて彼等と共にいるこの時間を大切にしたい。今の僕には、それしか考えて無かった…

## EP1：槍と弓と大斧（後書き）

とりあえずぼちぼちと更新して行きます

## EP2：弱小チーム（前書き）

今作はやっぱり文力0です

## EP2：弱小チーム

### トワイライトエリア

ポケモン達が居住区として使用している島の内に、鮮やかな茜色の夕日の光に照らされている時間帯が多い島がある。その島には約5000匹の民間ポケモンが暮らしており、バグを殲滅するための武器”デバッグウェポン”を使用する”デバツカー”も、島民の4割はいる。

島の中央にある高台には、巨大な基地があつた。”D - ADVEN T トワイライト支部”、この島のデバツカー達の基地だ。

「今日の駆除率もダントツワースト1位か…、やる気あんのかお前ら？」

「……」

基地内の”支部長室”と貼られた部屋に、レントラー達3人がいた。3人の目の前で偉そうに椅子に腰掛けているヘルガーは、彼等に説教をしていた。

「何度も言ってるけどよ、バグ狩りは遊びじゃないんだよ。下手に行動して怪我したり喰われたりする奴らだっているんだぞ？ 幾らノービスランクだからって、ふざけるのも大概にしるよな？ ああ！？」

「すみませんでした支部長…」

「ハア…、まったく謝れば良いと思ってんだろ？お前らやる気無いなら辞めていいぞ？」

「べつ、別にやる気無い訳じゃ…」

「くだらない口喧嘩に夢中になって最弱クラスのバグに気付かれる奴の何処が真面目なんだよ？お前らのチーム名に泥をぶちまける事はつかしてるじゃん」

「……」

3人はただ目の前にいる”上司”に叱られるだけしかなかった。暫くして支部長が溜め息を付き、3人に忠告した。

「とにかくお前らの除隊は勘弁してやるが、明日の任務で馬鹿な真似したら解散、チーム”ケルベロス”は解散してもらうからな。」

「かつ、解散！？そつ、そんなの嫌ですよ！！」

「お言葉ですが支部長、謹慎や除隊はともかく解散だけは…」

その忠告にグラエナとウィンディの2人は反論したが、支部長は座ったまま黙って目の前にある机を強く蹴った。これに3人は驚きのあまりの尻餅を付き、静まり返った。

「何処の野良犬なんだてめえらは！？ 実戦になるとド素人みたいな馬鹿するくせに、遠吠えだけは一丁前だな！！ たかが幼なじみ同士だからって、全く息合ってもないだろ！！」

「……！！！！」

「言つとくけど、てめえらの異論は今から一切認めねえからな！！ あゝあ！！？」

「ハッ、ハイ！！！！」

「つたくそれでも”地獄の番犬”の異名を持つケルベロスかよ！？ 顔に泥塗るような真似するならよそでやりな！！ 分かったらとつとケツ上げて出てけ！！」

支部長に悉く言われた3人は、うなだれながら自分達の宿舎へ向かって行った。

「まーたケルベロスか？」

「毎回毎回叱られて、本当に懲りないよな」

「あいつ等馬鹿だから仕方ないだろ」

「次しくじったら解散だつてさ」

『へえ、ざまあ』

『まあウチの支部の汚物がなくなるんだからいい気味だ』

『でもあんな奴ら俺達のチームに入れたくないな』

「…チツ!!」

「落ち着け、此処で暴れたら直ぐにでも解散になるぞ」

「…チツ!!」

「……」

道中の先輩チームからの誹謗中傷に、苛立ちを隠せなかったが、ぐつと堪えていた。

ノービスランク宿舍

「…クソオオオオオオオ!!」

苛立ちの我慢が爆発したウインディは、部屋のゴミ箱を蹴り飛ばした。ゴミ箱の蹴られた部分はかなりへこんだ。

「どいつもこいつも馬鹿にしゃがって!!俺達なんかいない方がま

しだつて言つのかよ!？」

「暴れたつて仕方ないんだゲンタ。とにかく明日何とかしなければ、俺達はもう終わりだ。」

「お前は腹立たないのかよナガレ!? あんな奴らに馬鹿にされてよ!！」

「俺だつて腹立つてる、怒りが煮えたぎつてる。でもだからってどうしようも無いだろ。」

「……ゴメン」

「……?」

ナガレと呼ばれたグラエナは怒りを抑え、ゲンタと呼ばれたウインディを宥めるしかなかった。

その様子を黙つて眺めていたレントラーは、泣きながら2人に謝りながら話した。

「ゴメンね…、ナガレ、ゲンタ…、僕がすっかりしてなくて…」

「セイギ、お前のせいじゃないつて!! 俺とナガレが馬鹿やったからだつて!!」

「でも僕にだつて責任はある!! もし僕達が離れ離れになったら、僕は耐えられなくて死ぬ。こんな危機が来るなんて、全部僕のせい



なんだ…」

「お前「ふざけるな!!」」

自分を責め続けるセイギと呼ばれたレントラーに、ゲンタは掴みかかろうとしたが、ナガレが先にセイギを殴った。突然の出来事に、セイギもゲンタも驚いた。

「10年前のあの日約束したよな、”どんなに辛い事があっても痛み分けた”って、言い出しっぺのお前が破ってどうするんだよ!!」

「…」

「だからよ…、1人で抱え込むな。俺達は何時とも一緒だ、例え血の繋がらない赤の他人でもな。俺達のチームは”ケルベロス”だろ？頭が3つある大きな番犬、俺達もそうなるっ」

ナガレはそう言うと、セイギに右手を差し出した。セイギは手を掴み、立ち上がった。

「…ゴメン」

「…ああ」

「ナガレ、”痛み分け”ってこういう事か!？」

ゲンタはそう言うと、ナガレを殴った。

「てめえな…」

「待ってナガレ、この場合は…！」

ゲンタに殴りかかろうとするナガレを止め、セイギはそう言うと、ゲンタを殴った。

「いってえな…！」

「お前のよりはましだ…！」

「ハハハハハハハハ…！」

その夜、3人は夜が明けるまで殴り合った。

カンドの森 入り口

「あー、痛っ」

「加減を知らないお前に言われたくない」

「殴り合った痕がこんなに痛いとは…」

翌朝、カンドの森にセイギ達がいた。彼等は結構殴り合ったようで、顔や体は腫れていた。

「痛いのはさておき、今回の対象は？」

「ん？昨日と同じ”ガブリ”の殲滅だと」

「まあランク低いから仕方ないか、でも今回は文句は言えないよ」

「…そうだな」

「さてと…」

そう言うとナガレは口に棒キャンディーをくわえ、ゲンタは保護グローブをしっかりとめ、セイギは情報端末の”殲滅開始”と表示された部分をタッチして槍を構えた。

「地獄の番犬”ケルベロス”、今日もはりきって行きますかー!!」

「おうよ、リーダーー!!」

「ああ、リーダーー!!」

「だからリーダーは止めてよ」

セイギ達はカンドの森へと入って行った。

## EP2：弱小チーム（後書き）

言い忘れていましたが、”10の星と世界”のセイギとは全く無関係です

### EP3：本気の3人（前書き）

今回から残酷タグを付けますが、残酷描写は極力避けたいと思います

### EP3：本気の3人

カンドの森

「おらっ！！」

「ギギ！？」

「遅いつ！！」

「グガ！？」

「はあっ！！」

「ギャ！？」

セイギ達は”カブリ”と呼んだ、昨日殲滅したバグをまた殲滅していた。いくらバグを殲滅しても、その区域にバグが残っていればまた新しいバグが生まれる。その区域を完全浄化しなければバグを完全に殲滅できないが、現時点の技術では完全浄化の方法は未だに無い。

セイギもナガレもゲンタも、昨日と同じく自分達の武器を振るってガブリの軍団を潰していった。しかし昨日までのおふざけはなく、今日の任務で何とかしなければ自分達に明日は無い、自分達の明日を守る為に3人は真面目に任務をこなしている。

「よし、この辺りのガブリは殲滅し終えた。次に行こう!!」

「「ああ!!」」

セイギ達チーム”ケルベロス”は現付近の殲滅を終え、森の奥へと入って行った。その際ゲンタは喉に痰が詰まっていたのか、痰を吐き出し、ガブリ戦の返り血が付いてない左手で口を拭いた。バグの血は唯一バグ感染の恐れがあるウイルスが無く、衛生上問題無いらしいものの、だからと言って体内に流す訳にはいかないようだ。

「この手の返り血何とかしないとな」

「衛生上問題無いんだから舐めれば良いだろ?」

「誰が舐めるもんか」

「とにかく行くよ」

カンドの森 林間付近

この辺りになるとガブリだけでなく、毒や麻痺などの鱗粉を発生する一つ目の浮遊型バグ”アイロード”が現れてくる。こうなると武器だけでは倒しづらく、

「みんな離れて!!」放電”!!」

「ギギギッ!?!」



自分達の”技”も利用して戦闘を有利にする事を勧められてる。当然ボケモンでも何でもないバクに”技”では大したダメージを与えられないが、”時間稼ぎ”として用いられる。

「ビイイイ！！」

「！？」

「セイギ屈め！！”火炎車”！！」

アイロードに気を取られすぎてガブリを気にしてなかったセイギにガブリが襲いかかったが、ゲンタの声と共に彼は炎を纏い身を丸め、ガブリに突進した。そしてゲンタは体勢を立て直し、大斧をガブリに振り下ろした。

「大丈夫かセイギ？」

「あつ、ありがとう・・・」

「な～に、お互い様だって」

「そんな事今の状況を何とかしてから言え」

ナガレは2人を後目に、ガブリとアイロードの群に矢を射った。そ

れも群の上空に何本でもある。つまり、

「グギャギャ!?!」

「ビイイ!?!」

矢の雨が来るのは当たり前だ。幸運に矢が当たらなかった群の残りも

「”不意打ち”!?!」

「ビギツ!?!」

ナガレの不意打ちによって倒された。こうして多くのバグは、たつた3人によって風潰しにされていたのだった。

カンドの森 林間地点

「今現在の発見バグは”ガブリ””アイロード”の2類のみ  
と」

「あゝ、疲れた」

「…蠶焦げてた」

「あつ、わりい。確実に俺だ」

「まあ良いけど」

「　　現在”カンドの森”の林間地点、これからまた奥地に入る予定っ」と

森の林間地点ではデバツカーの為に用意されたキャンプがあり、入口同様所属支部との通信が出来る。また特殊なエリアロックがかかっている為、バグのみが入る事は出来ないので、身を休める事も出来る。もっともこの森だけではなく、様々な区域にもこういうキャンプエリアがある。

ナガレは支部と途中報告をしており、ゲンタとセイギに関してはその場に腰を下ろして休んでいた。

「そっぴやさ、この森のキャンプエリアなんて初めて入ったよな」

「何時も入口付近で終わってるんだから仕方ないだろ。それに此処だけじゃなく、他の区域なんか足すら踏み入れて無いし」

「よくよく考えたら、僕達が真面目に任務をしてるのって、初めてじゃないかな？」

「「ああ、確かに」」

「昨日支部長にこっぴどく叱られなかったらさ、きつと僕達真面目にやらなかっただろうね」

「…そうだな」

「ああ…」

「支部長を裏切らない為にも、そろそろ行こうか」

セイギはそう話すと立ち上がり、置いてあった2本の槍を持って奥地に向かって歩き始めた。ナガレとゲンタもそれぞれ武器を持ち、セイギにつられて歩いて行った。

暫くして

「ん？あれはポケモン？」

セイギは森の中で倒れているピカチュウを見た。尻尾の形状が普通である事から、であろう。

「武器もライセンスもないから一般人だな」

「気を失ってるみたいだし、保護しようか」

セイギはそのピカチュウに近づき、お姫様抱っこする形で持ち上げた。その途端、ナガレはある嫌気を感じた。そして、

「セイギ！！今すぐそいつから離れる！！」

「えっ？」

「ピカアアアアアアアア！！」

ナガレの叫び声と共にそのピカチュウがセイギに襲いかかり、彼の右手に噛み付いた。セイギは驚きと痛みのため、その場に倒れた。

「このっ、離れる！！」

「ガピッ！？」

ゲンタはそのピカチュウをセイギから引き剥がし、近くにあった木に投げつけた。ピカチュウは背中を打ったにも関わらず、四つん這いの体勢で起き上がり、3人に威嚇し始めた。よく見るとピカチュウの腹部は、青色の小さなコアを中心に木の根っ子のような筋が浮かび上がっていたのだった。

「あれは…、”バグポケモン”か！？」

「セイギ待ってろ、今消毒するからな！！」

「うっ、うん…」

「ピガッ！！」

「おい待て！！忘れ物だ！！」

ナガレがセイギの右手の傷を消毒している内に、3人に背を向けてそのままの体勢で森の奥へと向かうピカチュウに、ゲンタは赤色のペイントボールを投げた。ボールはピカチュウの背中に命中し、背中から赤インクが流れ出した。

「立てるか？」

「うん…」

「まさかよりによつて”バグポケモン”まで現れるとは…」

「とにかく追うよ！！」

セイギ達は流れ落ちて滲みになったインクを頼りに、”バグポケモン”と化したピカチュウを追う事になった。

## EP 4：バグポケモン

カンドの森 奥地付近

「邪魔するなあー！」

「ウオオオオオー！」

「でやああああー！」

「グギイイイー！？」

セイギ達チーム”ケルベロス”は、バグポケモン化したピカチュウを追っている最中に現れたガブリ達を殲滅していた。その間にピカチュウはどんどん奥地へ逃げていったが、事前にゲンタが当てたペイントボールでマーキングしてある為、例え見失っても彼の跡は分かる。

余談だが、このペイントボールは”D - A D V E N T”製の対象追撃用で、常時インクが流れる仕組みになっている。ただ水性インクなので、雨天時や水属性には適応されない。現在油性インク型のペイントボールを開発中だとか。

「クソッ、厄介すぎるー！」

「どうする……？いくらマーキングしてるからって、このままだと俺達の方が保たないぞ！？」

「仕方ない、防眼メガネして!!」

セイギはそう言うと、一個の手榴弾を取り出した。手榴弾のピンを引き抜き、少し離れた地面に放り投げ、直ぐに3人は真っ黒なレンズのメガネをかけた。すると手榴弾は、眩い光を發した。發光弾だ。

「グギユツ!？」

「おゝ、相変わらず眩しいな」

「マグネシウム自重してないからね」

「んな事言ってる場合か!？急いで追っぞ!!」

セイギとゲンタは發光弾に色々言ってたが、ナガレが2人をツツコミ、發光で目をやられたガブリを矢で射って撒いた。

カンドの森 閑堵カンドの樹【奥地】

「見つけた…」

カンドの森の一番奥にある大神樹”閑堵カンド”に、あのピカチュウがいた。ただ、コアの周りにある筋が先程より広範囲に浮き出していた。



「 ”バグ化” が進行している…、進行率は！？」

「…20%。今なら僕達<sup>デバック</sup>だけ（・・・）でも修復できる」

「なら手早く修復<sup>デバック</sup>するぞ！！」

バグポケモンとは名称通り、バグ感染したポケモンの事を指す。本来の意志も失い、一般のバグみたいに何もかも喰らい続けるようになる。感染したポケモンは、体の何処かに感染の印としてコアが発生し、そこから徐々に筋が浮き出てくる。もしその筋が体全体を覆った場合、そのポケモンは完全なバグになってしまい、二度と元に戻れなくなる。そうなる前にバグポケモンを修復しなければならぬ。修復をする為に必要なのが、セイギ達デバッカーが所有する ”デバッグウェポン” で、それをバグコアに突き立てる事でコアが消滅<sup>デバック</sup>し、修復される。

とは言え、修復にもデバッカーのランクが関わる。現在のようにコアが青（1%～25%）なら、ノービスランクのセイギ達にも修復<sup>デバック</sup>の許可が下りている。

とにかく今やるべき事は、 ”バグ化を止める” 事、バグを一匹残らず殲滅し続ける事、それが ”デバッカー” の仕事である。

「ビイガ！！」

ピカチュウはセイギ達に気づき、 ”10万ボルト” を放って来た。

セイギ達はバックステップしてかわした。

「はあっ！！」

セイギは直ぐにピカチュウとの間合いを詰め、コアに槍を当てた。威力が弱かった為コアにヒビ1つ付かなかったが、今の一撃でピカチュウはよろけた。しかし、

「ぐっ……」

セイギは今の一撃でピカチュウの”静電気”効果を受けて麻痺になったらしく、その場から動きづらくなった。武器攻撃も物理技に分類される。特に導体製の槍を持つセイギに、静電気相手は分が悪い。

「でやあー！！」

「ビッ！？」

ゲンタはピカチュウの背後に回り、大斧の持ち手でピカチュウを殴った。ゲンタの大斧の持ち手は絶縁体なので、静電気の心配はない。

「セイギ、お前は後方支援に回った方が良い。ただでさえ一感染してるかも知れない（……………）んだからよ」

「うつ、うん。分かった」

ナガレが動けないセイギの肩を叩きながら、弓の弦に矢を掛け、前線にでているゲンタに当たらないようにピカチュウを狙っていた。因みに矢の先端は何時もの刃ではなく、本来の矢と飛距離が落ちない程度の軽い石が括り付けられていた。

「フツ!!」

「ギャツ!?!」

「痛で痛で痛で!!」

ナガレが射った矢はピカチュウに命中した。ただ、何本も放ったせいでゲンタにも少し命中した。

「あつ、わりい」

「てめえ何本も射るな!!」

「ビイガアアアア!!」

「ゲツ!?!グアツ!!」

ゲンタがナガレに激怒している内に、ピカチュウの”電光石火”がゲンタに命中した。ガードもろくにしてなかった為、ゲンタは吹っ飛ばされた。

「…痛つてえな！！”火炎車”！！」

「ビガッ！！」

「…ああ、また血が上ったか」

「今のは明らかにナガレが悪いかと。あつ、麻痺治ってた」

ナガレの発言からゲンタは頭に血が上ったらしく、大斧を地面に突き刺し、炎を纏い丸まった状態でピカチュウに突進した。ピカチュウも臆する事も無く”電光石火”で迎えた。

セイギは麻痺が治った事を手の動きで分かった。バグ汚染の影響なのか、今では毒・麻痺・火傷も睡眠・氷結同様に自然消滅するようになった。

「あつ、感染率が24%になってる」

「それ早く言え！！」

「痛つ！！だって、今まで麻痺だったんだもん」

「ゲンタ！！がむしゃらに戦ってないで動き止める！！」

「あゝ あ！？わーたよ！！オラア！！」

「ガビツ！？」

端末を見たセイギが重大発言をし、ナガレがセイギの後頭部にツツコミを入れた後、ピカチュウとの距離を離す為に後方空中回転してたゲンタに命令した。

ゲンタは突き刺さっていた大斧を逆手に持ち、“電光石火”で近づいてくるピカチュウの腹渠にぶつけた。ピカチュウは痛みのあまり仰向け体勢で悶絶、丁度緑になりかけているコアが見えるようになった。

「今だリーダー！！やったれ！！」

「だからリーダーは止めてよ！！あんまりしつくり来ないんだからさ、ハアッ！！」

リーダーと呼ばれたセイギは溜め息混じりにピカチュウに向かって走り、高く跳躍し、槍をコアに向けながら落下していった。

デバッグ キャリアアウト  
「修復・執行！！」

槍はコアに突き刺さった。コアは次第に跡形も無くなった程割れ、

ピカチュウも気を失った。感染率が低かった為、このピカチュウの命に別状は無い。

「…あれ？僕は一体…」

「この辺りはバグが生息している事を御存知でしたか？」

「あつ、はい…」

「事情はともあれ、バグ感染していられたので我々が貴方を修復致しました」  
デバッグ

「そつ、そうなんですか！？お騒がせですみませんでした！！」

「謝る事は無いって、今からトワイライト支部まで案内するから、指示に従ってくれ」

「はい！！」

気絶かは気がつき、セイギ達から事情を知ったピカチュウは頭を下げて謝った。

「しかしどうする？任務さぼったんだしょ…」

「きつと何とかなるって」

「そうだな。よし、帰還でもするか!!」

セイギ達はピカチュウを連れてトワイライト支部に帰還する筈だった。

「『『『ウワッ!?!』』』」

上空から、大剣と盾を装備した何処にでもいる騎士風の埴輪型バグが現れた。それも、セイギ達にとっては初めて見る大型のバグだからだ。

その様子を閑堵の樹から、1匹のポケモンが見ていた。黒コートを着ていた為に、種族は分からなかった。

「政府の犬が、俺達に楯突こうとでも言っつのなら、その実力見せてくれよ」

「これは……!?!」

「見たことが無い、新型バグか!?!」

「来るぞ!?!」

大型バグはセイギ達に襲いかかってきた。



## EP5：新型バグ（前書き）

今回残酷描写が少々ありますので

## EP5：新型バグ

カンドの森 閑堵<sup>カンド</sup>の樹

「グオオオオオオオ！」

「避ける！！！」

「うわつと！！！」

突然現れた埴輪の大型バグが剣を振り下ろし、セイギ達は横に緊急回避をした。剣は地面に刺さり、その跡がくつきりと残っていた。

「何だあのバグは！？見たことが無いバグだぞ！！！」

「それよりどうする！？大型バグなんて俺達だけで倒せるのか！？！」

『こちら支部長、お前ら帰還時刻過ぎてるのに何やってる！？！』

ナガレとゲンタが戸惑いの中話していると、セイギの持つ端末から通信が入った。受信相手は支部長からだった。

「こちら黒崎、すみません支部長、”新型”と思われる大型バグと遭遇して抗戦中です！！今映像を送ります！！！」

『“新型”バグ？…何だこのバグは！？分かった、とにかく応援を送るからそれまで耐えてろ！！いいか、誰一人死ぬなよ！！』

セイギは現状を報告、支部長に埴輪の大型バグの映像を送った。

” D - A D V E N T ” トワイライト支部 支部長室

「こんなバグ、今まで報告に無かったぞ？」

支部長はセイギから送られた埴輪の大型バグの映像に、目を疑わせていた。今までこのバグに関しては、何処の支部からも報告が無いからだ。とにかく今自分がするべき事は、応援を送る事。しかし”弱小チーム”と馬鹿にされているチーム”ケルベロス”を助けに行くチームなんて、あるわけがない。支部長はそう考えていたが、

「支部長。その応援、僕に行かせて下さい」

「お前はゴールドランクの…、まあいい。場所はカンドの森の閑堵の樹だ。早急に頼む」

「グオオオオオオオオ！！」

「ぐう！！」

埴輪の大型バグは、ゲンタに向かって剣で攻撃して来た。ゲンタは大斧を前方に構え、それで防いだ。

「不意打ち”!!”」

「それっ!!」

セイギとナガレは背後に回り、バグの背中をそれぞれ槍と弓で斬ろうとしたが、バグの姿は騎士である為鎧も纏っており、2人の斬撃は鎧に弾かれた。

「この鎧、本物だ」

「俺達の武器じゃ到底無理だ。ゲンタじゃないと…」

「ぐう…、せめて攻撃の手が緩まれば…」

そうこうしている間に埴輪の大型バグは上半身を捻らせた。これを見たセイギは、他の2人に指示をした。

「みんな離れて!!きつと”尻払い”だ!!」

セイギの予感ハ的中、上半身を竜巻のように回転させ、辺り一面を

風払った。3人は風払いがくる前に離れ、念のため武器を前方に構えてガードしていた。

「普通に戦っても勝ち目が無い、みんな僕の指示に従ってくれ!!」

「ああ、任せときな!!」

「了解!!」

埴輪の大型バグの上半身が回転している内に、セイギは2人に指示を出した。次第に勢いが弱まり、回転が止まると3人同時に走った。防眼メガネを装着してだ。

「それっ!!」

「グギッ!？」

セイギは発光弾を投げた。発光弾は眩い光を放ち、埴輪の大型バグは目をやられた。これにより新型バグでも、発光弾は有効だという事が分かった。

「オラオラオラ!!」

埴輪の大型バグが怯んでいる内に、ゲンタは肉眼では捉えきれない

速さかつ素手で、バグの盾に攻撃を与えていた。恐らく”神速”を使ってるのだろう。どんなに堅固な盾でも、短時間で強い攻撃を受けたら、壊れるのは当たり前だ。そしてその破片を、鎧に投げつけた。破片は鎧を貫き通し、血が吹き出る位の小さな亀裂が出来た。

「ナガレ、バトンタッチだ!!」

「そうさせて貰うぜ、ゲンタ!!」

ナガレはその亀裂に照準を合わせ、矢を構えた。埴輪の大型バグの怯みが治り、持っていた剣をナガレ目掛けて振り下ろした。ナガレはガードも回避も出来ず、真っ二つになったが

「残念でしたっ!!」

「グガッ!?!」

斬られた筈のナガレが、埴輪の大型バグの顔まで跳躍し、右足で埴輪の大型バグを蹴り倒した。落ちてる際に鎧の亀裂に矢を放ち、刺さるのが確認出来ると一回転して着地した。因みに真っ二つに斬られたナガレは、黒くなって消滅していた。きっと”陰分身”を使っただろう。

「セイギ、後は任せた!!」

「一発決める!!」

「OK!!」

セイギは倒れている埴輪の大型バグに近付き、右手に電気を貯め、亀裂に向かって一気に放出した。

「”ワイルド・ボルト”!!」

「ギギギッ!!!?」

亀裂は今までの攻撃に耐えきれず、鎧は砕け散って土に還った。同時にバグの血がセイギに向かって滝のように流れ落ち、やがて埴輪の大型バグは動かなくなった。それと同時にバグの体が崩れ落ち、埴輪の大型バグは地面に還った。

「やったな、セイギ」

「しかし、あんな無謀なやり方どうやって思いついた？」

「単に思いついただけだよ。ダムが決壊が小さな亀裂から始まるように、小さな傷を中心に攻撃すればいずれ破壊できる。そう思ったんだ」

「ははっ、俺にはそういう思い付き無理だ。セイギには適わないな」

「だから俺達はセイギをリーダーにしたんだろ？」

埴輪の大型バグとの抗戦を終え、セイギ達は一休みしていた。その様子を、木陰の後ろで1人のポケモンが見ていた。

「ノービスランクなのに、あの新型バグを倒すとは…。興味が湧いてきた。これから期待してますよ…」

そのポケモンはそう小さく呟くと、自分の身長の数倍もあるロングブレードを片手で担いで、その場を去った。

「大型の中では最弱とはいえ”オールドソイル”がやられるとは、面白くなりそうだな」

閑堵の樹の上で眺めていたポケモンも、そう呟くと静かに去って行った。

木陰に隠れていたピカチュウはセイギ達に近付いた。

「凄いです！！あんなに大きいバグを倒すなんて！！」

「いやいや、こっちだってヤバかった。御礼ならセイギに言ってくれ」



「ありがとうございます、セイギさん!!」

「ハハッ、それじゃあ帰りますか!!」

セイギ達はカンドの森を後にし、トワイライト支部に帰還した。

## EP 6：感激と布告と絶望の味

D・ADVENT トワイライト支部 支部長室

「御苦労だった。それで今日のお前らの駆除率は…」

「「「（こいつ、こいつ）」「」」

「今日もワースト1位だ」

「「「……ハア」「」」

セイギ達は支部長から告げられた結果に、酷く落ち込んだ。その後肩を叩き合い、別れの言葉（？）を言い合っていた。

「今まで世話になった…」

「達者でな……」

「どんなに離れても一緒だから……」

「待て待て、話はまだ終わってない。早速落胆するんじゃない」

「「「はい？」「」」

支部長は立ち上がり、疑問詞が浮き出ている3人に向かって、救い

の手を差し伸べるように言った。

「お前らは任務中にバグ化したポケモンに遭遇、任務放棄して修復デバッグの方を優先した。我々の最優先事項は”バグ化したポケモンを修復デバッグする”事、よく最優先してくれた。

更にお前らが遭遇した大型バグ、あれはお前らの報告通り新型バグだ。今までどの支部からも、あのバグの報告は無かった。あのバグの名称は”オールドソイル”、何処かの埴輪がバグ感染した姿だと認識した。まだ大型バグの討伐訓練も受けてない、更に応援無しでよく討伐出来た。上出来だ。

もし今日の任務中の出来事が何時も通りだったら、完璧にお前らを処罰した。だって駆除率もワースト1位で、帰還時刻も過ぎてるんだからな」

「…ってことは？」

「ああ…」

支部長は3人に近付き、笑顔で3人の肩を優しく叩いて言った。

「チーム”ケルベロス”は、解散命令を取り消しとする！！」

「…イヨツシャアアア！！」

支部長の発言に3人は酷く喜びあった。支部長はその様子を見ながら椅子に座り、険しい剣幕をして机を強く蹴った。3人は驚きのあまり、また尻餅を付いた。

「つけあがつてんじゃねえ！！今回は非常事態とお前らの行動を評価して取り消しにしたんだ！！調子に乗って明日からの任務でヘマなんかしてみろ、即効かつ問答無用で解散命令出すからな！！」

「……はっ、はい！！」「」

「分かったらとつとケツ上げて出てけ！！」

「……はい！！」「」

支部長の勢いに怯えた3人は立ち上がり、急いで支部長室を出て行った。自分1人しかいなかった支部長室で、支部長は溜め息を吐いて机を戻した。その時、突然セイギが入って来た。

「支部長……僕達のやる気を上げる為に押してくれて、ありがとうございます！！」

「……私に構っている暇があるなら、仲間と解散取り消しになったことでも祝つてろ」

「失礼しました！！」

セイギはそう言うと、支部長室を後にして先に行ったナガレ達を追いかけた。支部長は再び溜め息を吐き、独り言を呟いた。

「昨日までケツの青かった野良犬が、随分と頼もしくなったもんだな」

『おい聞いたか！？ケルベロスの解散取り消しだってよ！！』

『はあっ！？何でだよ！？』

『バグポケモンの修復デバッグだけだろ！？』

『それだけじゃなく、新型バグを発見し、応援無しにあいつらだけで討伐したんだよ』

『何だよそれ！？』

『あんな奴ら解散になっちばえば良いのによ！！』

『だーもう！！すっげえムカつく！！』

『気に食わねえ！！』

「…チツ！！」

「我慢しろ、此处で暴れたら元も子もないぞ」

「…あのっ」

「セツ、セイギ!？」

宿舎に戻る道で、早速ケルベロスの解散取り消しが話題になっていた。取り消しに不満を持った先輩チームが、ケルベロスに対して暴言を吐いた。ゲンタは舌打ちするほど怒りが溜まっており、今にも爆発しそうだったがナガレに宥められた。しかしセイギに関しては、先輩チームに声をかけたのだった。

「・・・僕達、先輩達に負けませんから。何時か先輩達を超えるよ  
うな、素晴らしいチームにします」

『・・・・・・・・?』

「・・・それでは」

セイギの思わぬ”宣戦布告”と頭を下げて去っていくセイギに、先輩チーム一同はポカンと唖然した。そんな空気の中、生っ橋の箱を持って八橋を摘んでいる1匹の草ポケモンが、宿舎に戻る3人の姿を見て、

「…ふう、やっぱり彼らは面白い。当分退屈にならないかも」

そう呟くと、八つを摘みながら自分の宿舎へ帰って行った。

「それと美味しいなこれ、何処で買ったか後で聞こう」

デバツカー 宿舎トワイライト支部 食堂

「ちよつ、お前肉食い過ぎだろ!!」

「早い者勝ちだボケエ!! すき焼きは戦争なんだ!!」

「…それすき焼き煮でしょ?」

「「空気読め!!」」

ナガレとゲンタは、大皿に盛られたすき焼き煮の肉を取り合っていた。

すき焼き煮と言っても、この御時世にすき焼きなんて豪華な食事は年に一度位で、実際セイギ達が食べているすき焼き煮は何だと言うと、カリカリのポロポロの固形型ドライフードである。この時代の食物は米と麦と卵と野菜とトウモロコシを除いて、全てがこのドライフードなのだ。つまりナガレとゲンタは、肉の味と食感がするどらいふードを取り合っているのである。余談だが、初めて食べた人曰わく”何が悲しくてあんな豆みたいな物を食わなきゃならんだ? (泣)”である。

ただ水と果物とデザートは余裕があるのか、この御時世でも飲食可能である。

「でもよ、いい加減このドライフードを何とかしてほしいよ」

「この御時世だ、食えるだけ有り難いと思え」

「あーあ、早く平和な時代が来ないかなつと」

「折角の解散取り消し記念に高いドライすき焼き煮を頼んだのに、もつと喜び合つて食べようよ……!!」

セイギはナガレとゲンタの話し合いを、呆れたような顔をして眺めていた。そして白滝味のドライフードを取ろうと、箸を伸ばした瞬間、自分の目に見えた右手に絶望した。

「……御馳走様」

「セイギ……？」

「どうした？」

急いで箸を置き、気付いたナガレとゲンタの問いかけにも応じず、セイギはただ”御馳走様”と言って食堂を後にした。

共同洗面所



セイギは水で流しながら右手を洗った。しかし幾ら洗っても、右手に着いてある汚れは落ちなかった。セイギは大粒の涙を流しながら右手を洗い続け、次第に崩れ落ちるように座った。右手の落ちない汚れに絶望しながら、セイギは静かに泣いた。

「まさか、まさか…」

何でも話し合える2人とこれから居られて嬉しかった。でも、今僕の身に起こっている恐怖だけは、2人にも言えなかった。こんな事を言ったら、彼等にどれだけ迷惑をかけてしまうのかと思うと言える訳が無い。この事は僕だけの秘密にしようと、心の中で誓った。

1 s t   D e b a c k   三つ頭の犬   E N D

## EP 6：感激と布告と絶望の味（後書き）

八 橋に関しては執筆当時、修学旅行で関西に行ってたので…

次回はキャラ設定でも

## 設定集？（前書き）

因みに

Ⅱ 小型バグ

と表記しています。

ちょっと分かりにくいかもしれませんが

## 設定集？

### 『キャラ設定』

名前：セイギ（本名：黒崎セイギ）

種族：レントラー（色違いとバグ）

性別：

性格：仲間思い

所属：デバツカー

ランク：シルバー

武器：長槍×2

技：放電

ワイルドボルト

辻斬り

電磁波

2045年生誕。生誕日は不明

2060年4月15日”D-ADVENT”入隊。橘ナガレ、佐野

ゲンタと共にチーム”ケルベロス”を結成

2062年8月15日任務中にバグ化したピカチュウに噛まれバグ感染

名前：ナガレ（本名：橘ナガレ）

種族：グラエナ

性別：

性格：冷静沈着

所属：デバツカー

ランク：シルバー

武器：弓と矢

技：不意打ち

陰分身

毒々

悪の波動

2045年3月20日生誕

2060年4月15日”D - ADVENT”入隊。黒崎セイギ、佐

野ゲンタと共にチーム”ケルベロス”を結成

名前：ゲンタ（本名：佐野ゲンタ）

種族：ウインディ

性別：

性格：頭に血が上りやすい

所属：デバツカー

ランク：シルバー

武器：大斧

技：火炎車

神速

穴を掘る

フレアドライブ

2044年6月9日生誕

2060年4月15日”D - ADVENT”入隊。黒崎セイギ、橘

ナガレと共にチーム”ケルベロス”を結成

名前：支部長（本名：神崎、下の名前不明）

種族：ヘルガー

性別：

性格：威厳ありすぎ

所属：デバツカー トワイライト支部支部長

ランク（最終段階）：レジェンド

武器：不明

技：フエイント

イカサマ

カウンター

???

2020年8月30日生誕

2025年9月1日陸軍入隊

2035年3月5日”D - ADVENT”入隊

2060年3月5日現役引退。引退15日後、トワイライト支部の支部長に就任

#### 『区域説明』

・カンドの森

かつては草・虫ポケモンの居住区域としてあつた森。四季の変化によつて美しい光景が見られたが、バグの影響で変化がバラバラになつてしまった。奥にある”閑堵の樹”は、昔森の神が祀つてある祠に一本の木が絡まり、それが今の神樹になつたという説がある

#### 『バグ設定』

・ガブリ

最も一般的なバグ。噛みつきや突進、引つ掻き攻撃を得意とする。  
亜種情報あり

・アイロード

1つ目の浮遊バグ。突進の他に、毒鱗粉を振り撒く。視力が強く、離れている敵も察知出来る。亜種情報あり

#### ・オールドソイル

チームケルベロスが発見した新型バグ。何処かの埴輪がバグ感染したものと認識されている。剣による攻撃をしたり、盾で相手の攻撃を防いだりと、剣闘士のような戦い方をする。亜種情報は今現在無し

## EP7：信じられる物

解散の危機から退いた後の数日間、チーム”ケルベロス”は任務を真面目に取り組んでいた。退いたとは言え、また冗談にならないヘマをしたら即解散になるからだ。口喧嘩が多いナガレとゲンタの2人も

「痛っ!？」

「あっ、わりい」

「つたく、気をつけろよ」

ここ数日間は、今の会話だけで済ましているのだ。例え、ゲンタの大斧の背の部分がナガレの後頭部に当たっても、ナガレの放った矢がゲンタの尻に刺さってもだ。

しかしセイギはここ数日間、落ち込んでいて任務に集中出来なかった。それもそのはず、先日の任務にてセイギはバグ感染してしまったから、元気にいられる訳がない。今は”噛まれた痕がみつともない”という理由で、右手に包帯を巻いてバグコアを隠している。とは言えバグコアはまだ小さく、感染率も1%にも満たないのか、色も黒である。現在セイギがバグ感染している事を知っている人物は、セイギ本人だけである。

「セイギ!!」



「うわつとー!」

今ではナガレやゲンタに注意される程、ぼうつとしているのである。

D - A D V E N T 内カフエ

「……」

「セイギ、セイギ？」

「…ん？ああ…、どうしたの？」

「どうしたのじゃない、お前の方が最近どうしたんだよ？任務中も今もずっとその調子じゃねえか」

「…何でもないよ」

「何でもない、何か隠してるのか？」

「何でもないっただ何でもないって、僕が信じられないの？」

「そう言う訳じゃ…」

未だに（バグ感染の事で）ぼうつとしているセイギに、しびれを切らしたナガレとゲンタは、思い切ってセイギに尋ねた。しかしセイギは答えようとしなかった。

「（とにかく感染した事は秘密にしておこう。幾らナガレとゲンタでも、こんな事言ったら流石に迷惑になるよね）」

『さあこのカフェ名物、”ねじ込みプリン”の時間が始まりました！壁にねじ込まれたプリンを器用に食べてください！！』

セイギのシリアス展開をぶち破るかのように、カフェ内にアナウンスが流れた。

このカフェの常連客は、此処に近寄らない人から”イカレ野郎”と呼ばれる程、この”ねじ込みプリン”たる常識破りのイベントを好んでいるのだ。

「よしきた！！今日こそ沢山食ってやる！！」

「…ハアッ」

「ハハハ…」

ゲンタもその1人である。プリンがねじ込まれてある壁に、多くの人が集まってきた。

〈見苦しいからカット by:支部長〉

「全く、デザートを何だと思っているのでしょうかね、此処のカフェ

は」

「「…!？」」

セイギとナガレは1人のポケモンに目を向け、酷く驚いた。何故ならそのポケモンは種族がツター ज्याなので体が小さいのに、明らかにツター ज्याだけでは不可能に近い程の料理後の皿の量が尋常じゃなかった。しかもその皿の一枚一枚全部が綺麗になっているという、どこことなく綺麗好きを象徴していた。

「”ねじ込みプリン”なんて、そのままでも美味しいプリンを何で壁にねじ込ませるんでしょうね？全く持って理解出来ませんよ」

「はっ、はあ…」

「僕は普通に食べる方が好きですよ。アレンジせずに素のままがです」

「……」

「チ…ムだつてそう。チ…ムを組んで力を合わせるよりも、あえて単独の方が自分の力を発揮できる…、そうとは思いませんか？」

「えっ…？」

「いやっ…」

そのツタージヤは話しながらフォークに突き刺さっていた一口大に切つてあるケーキを口に運び、”御馳走様でした”と呟いて手を合わせ、椅子から飛び降りてセイギとナガレに問いかけた。2人はその質問に口を濁し、言葉が詰まった。その様子を見て、ツタージヤは鼻で笑った。

「まあ無理も無いですね。今は忘れて下さい。それと、楽しみにしていますから。あつ、お会計お願いします」

そう言うと、ツタージヤはカフェのカウンターレジに行き、会計を済まして去って行った。

「何だっ たんだろう、あの人…?」

「さあな」

「グエツ!! 押すなよ!!」

セイギとナガレがポカンとしている中、ゲンタは未だに壁にねじ込まれたプリンを食べていた。

ミッ  
ション  
カウンタ―

「クツソー!!! 全然食えなかった!!!」

「（とは言え、どうやって壁にねじ込まれたプリンを食べてるんだろ…?）」

「（あまり深く関わるな）」

「あつ、お待ちしていましたよ！！ケルベロスの皆さん！！」

ミッションカウンターには、首からネームプレートを下げたタブンネがいた。この時ゲンタは苛立っており、セイギは未だに”ねじ込みプリン”の食べ方が気になるようだ。

余談だが、そのタブンネの名前は”四条チハル”、性別は である。トワイライト支部の受付嬢かつミッションの受付を行っている。彼女もガトリング使いの元デバッカーであるが、あまりにも誤射が多いせいでライセンスを書き換えされ現状に至る。

「今回皆さんに課されている任務は、大量発生した”ガブリ”と、単独で発生した”ドング”の討伐になっています。近距離戦による攻撃が大変強力なので、特にゲンタさんは気をつけてくださいね」

「だよ、熱血バカ」

「嫌いムツツリスケベ」

「”ドング”は大型バグなので苦戦されると思います。そこで今回、ケルベロスの皆さんには”同行者”との行動になります。ただ今呼びますね。ツカサさん、ケルベロスの皆さんが来ましたよー！！」

チハルは放送でツカサという人物を呼んだ。暫くして、1人のポケモンがやって来た。そのポケモンとは

「やあ、お待ちしていましたよ」

「貴方は…!?!」

「さっきの…!?!」

「ん?知ってるのか?」

先程セイギとナガレに問いかけたツタージャだった。当然”ねじ込みプリン”に夢中になっていたゲンタは、そのツタージャを知らない。

「僕の名前はツカサ、三原ツカサと申します。今回は宜しく御願います」

「三原ツカサって、俺達初めて聞いた名前ですけど・・・」

「ええ、インフイニティランクがかけ離れていますからね。ランクには6段階あって、下から順にノービス・カッパー・シルバー・ゴールド・レジェンド・とありまして、僕はゴールドに入ります。貴方達が知れるデバツカーのランクは、カッパーが限界です。それ以上のデバツカーを知るには、もっと頑張る事ですよ」

「「ハイ……」」

「それと今回の任務ですけど、貴方達が今まで駆除していた区域と違うので、心して下さい」

「分かりました。お互い、力を合わせて頑張りましょうね」

そのツタージャ、三原ツカサの自己紹介とランクに関しての講話をした。終わった後、ナガレは握手をする為に手を差し出した。しかしツカサは、その手を払いのけた。

「力を合わせる？お断りします。僕は僕でやるので、貴方達は貴方達で行って下さい」

「なっ……!？」

「どうしてですか!？」

「僕は貴方達に期待していますが、貴方達の実力に期待はしていません。今回は同行者として貴方達と共に行動しますが、僕はいないと思って下さい。誤射したって構いません。それでは」

「そんな…、そんな事出来る訳」

ツカサはそう言うと、3人に背を向けて歩いた。理解出来ないセイギは、ツカサを止めて詳しく聞こうとしたが、

「自分の実力とデザート的美味しさ!!」

「「「!?」」」

意味の分からないツカサの叫び声に、セイギの足は止まった。ツカサは3人がいる方向に振り向き、

「生憎僕はこれだけしか信用できない者ですので」

「……」

「出撃ゲートの前で待っています。準備が出来たら来て下さい」

そう言つと出撃ゲートの方へ行つた。

「……」

「何なんだよアイツ、感じ悪っ」

「好きになれないな」

「あのっ、ツカサさんを悪く言わないで下さい」

「どうしてですか？」



ナガレとゲンタが、ツカサの事を悪く言っていると、チハルが3人に話しかけた。セイギはチハルに問いかけ、彼女は答えた。

「ツカサさん、”サンスター”と言うチームに所属しているんですけど、バンさんもウラさんも結果主義で、今では2人だけで競い合うようにツカサさんを置いて任務にいびりたりなんです。だからツカサさんは何時も1人で任務をこなさなきゃいけなくて、今では”サンスター”の正規メンバーから離れて契約メンバーになっているんです。今では”仲間なんて信用ならないし必要無い”と仰られています。本当は仲間と共に任務をこなしたいんです。お気持ち、分かってあげて下さい」

「そうなんですか…」

「だからって、あんな言い方…」

チハルの話により、ツカサの協力嫌いが分かった3人は暫く悩んだ後、ツカサと共に任務に出撃した。

## EP 8：拘り

### バングルの街

「此処って…、ついこないだまで居住区だった所じゃないですか？」

殲滅開始前、ナガレがツカサに尋ねた。ナガレの言う通り、この”バングルの街”は数ヶ月前まで居住区だった大都市である。（此処から先は設定集？に記載）

因みにセイギ達が今いる所は、街の出入り口に使用されていた橋の出入りゲートで、今ではバグ汚染により逆断層してしまい、高台になってしまったが。

「そうです。今やバグが蔓延るようになってまして、嘗ての面影は無くなりましたけど」

「今回は此処でバグを殲滅するわけだな」

「そうです。開始時間になりましたのでセイギさん、初めて下さい」

「分かりました」

ツカサの言葉と同時に、セイギは情報端末の”殲滅開始”をタッチした。同時にナガレとゲンタも、自分達の準備をした。

「あつナガレさん、それ1本下さい」

「えっ？はっ、はあ……。どうぞ」

ナガレの棒キャンディーが舐めたかったのか、ツカサはナガレに頼んだ。ナガレは啞然しながらも、僕キャンディー1本ツカサに渡した。それをくわえ、ツカサはセイギ達に言った。

「僕が言える事はただ1つ、”とにかく死ぬな”……です」

「……はあ」

「それでは」

「「「！！！！？」」「」」

そしてツカサは単独で飛び降りた。高台はそんなに高くないものの、誰もが”飛び降りたら死ぬだろ”と思った。何故ならツカサは、自分の身長の倍以上あるロングブレードを、しかも片手で担いでいたからだ。ツカサだからまだしも、普通のツタージャだったらロングブレードの重みで圧死していただろう。圧死じゃなくても、骨1本は確実に折れる。それ以上に、ツタージャではそのロングブレードは持てやしない。

3人の驚きを余所に、ツカサは空中2回転した後綺麗に着地して、街の中心部へ走って行った。

「…なあ、ツカサさんって怪物か？」

「…目の錯覚だろ？」

「ともかく凄い…」

それぞれの感想を述べ、3人は高台を降りた。

「グガウ！！」

「効くかつ！！」

「それっ！！」

「オラァ！！」

「グギッ！？」

セイギ達はガブリの群れを、なるべく1匹残らず殲滅しようとしていた。流石に大都市であるこの街を、隅々まで探索しているとあっという間に帰還時間になるので、バグを残さずに任務達成は難しい。

今回の任務に”大量発生したガブリの殲滅”があるので、ワザと隅々まで探索するのも構わない。しかしそれに加えて”ドラグの探索

兼討伐”が含まれている。大型バグ相手なら、なるべく時間を残しておきたい所なのだ。

つまり今の状況で彼等の心境を言うと、”迅速に大量に殲滅”。元々バグは定期的に殲滅しなければならないので、取りこぼしがあっても同じなのだ。しかしセイギ達ケルベロスのモットーは、”一般人の命を優先してバグを残らず殲滅”なので、もはやどうしようも無くなっている。

「大量発生っただけあって、数がありすぎて厄介だな!!」

「”放電”っ!!」

セイギは辺り一面に電撃を放った。それにより周囲のガブリは次々に炭へと化してゆく。しかし、ガブリは次々に増えていく。いくら大量発生とは言え、発生し過ぎだとツツコミを入れたナガレだった。

「て言うかナガレ、ゲンタは!?!さっきから見当たらないけど!?!」

先程からゲンタがいない事に気がついたセイギは、ナガレに尋ねた。ナガレは鼻で笑い、余裕そうに言った。

「安心しろ、後3秒で出て来る。3・2・1……」

そう言った途端、セイギの直ぐ近くの地面が隆起し、何かが地面の下から貫き出て来た。その何かとは、炎を纏ったゲンタだった。

「地中から参上！！そして”火炎車”！！」

「グギヤギヤ！？」

ゲンタは炎を纏ったまま頭から落下、受け身をとる形でそのまま火炎車を。炎の球と化したゲンタは、そのまま地面を転がってガブリに体当たり。ボウリングの容量でガブリは火傷を負いながら弾き飛ばされた。

「あだつ！？」

「大丈夫ゲンタ！？」

「…ったく」

しかしゲンタ自身も止まる事が出来ず、結局転がった先にあった建物の壁に激突した事によって止まった。セイギは急いで駆け寄り、ナガレは溜め息混じりに寄ってきた。

「痛つてえ…」

「待ってて、今回復薬分けてあげるから」

「穴を掘る」からの連携技にしては上出来だけどよ、あと前々から思ってたんだがよ、”火炎車”ってああいう感じだったっけ？」

「分かってないなナガレ、炎を纏って回転しながら突進するんだから”火炎車”なんだろう？ただ炎を纏うだけじゃ”ニトロチャージ”や”フレアドライブ”と同じだ」

「お前のその”火炎車”に対する拘り、俺的にどうかと思うが」

「あゝあ。結構練習したんだけど、こりゃあやり直しだな」

「この辺りのガブリは殲滅し終えたし、ツカサさんも気になるから行こう」

「ああ!!」

「ほらゲンタ、お前の斧。相変わらず重いな」

ゲンタの”火炎車”に対する拘りを横に流し、セイギはゲンタを起こす為に左手を差し伸べた。ゲンタはセイギの左手を支えに立ち上がった。更にナガレに預かしていた自分の大斧を受け取り、3人は街の奥へと進んで行った。

## バンゲルの街 中央広場付近

中央広場に繋がる道の1つに、無数のバグの死体が転がっていた。死体のどれもがみな、血が異常な程流れ出ている。恐らく大量出血

による貧血であろう。

その数々の死体の中で、ツカサはロングブレードを片手で担いで立っていた。何の言葉も発しず、ただ視界に入っている半壊したビルを眺めていた…

「バグによる終末感染…か」

ツカサはそう言うと、その場を後にした。



## EP 8：拘り（後書き）

とりあえず今回は、ゲンタが”火炎車”に対する拘りがあるただけ  
覚えて頂ければ幸いです。

ナガレとしてはどうでも良いみたいですが（笑）

## EP9：死に背く白刀

バングルの街 中央広場【キャンプエリア】

「お疲れ様です」

「ツカサさん…、此処に来る途中のバグの屍って…」

「ああ、あれですか。僕が殺りました」

「（やつぱり…）」

「（あの剣でだろ…）」

「（ツカサさんって、一体何なんだろうな？）」

街の中央広場はカンドの森の林間地点同様、デバツカー達の休憩に用いられている。既にツカサが到着しており、彼はロングブレードを水平面から30°傾けて地面に刺し、柄の部分に座っていた。セイギ達ケルベロスは、先程の光景と今の光景に、絶句と疑問詞という言葉が頭に浮かんでいた。

余談だがツカサの持つロングブレードは、純白の天使の翼を模した形をしており、柄は十字架で出来てるといふ、何処となく聖剣を表している形である。しかし、普通だったらバグの血や体液で汚れる筈なのに、何故か刀身は汚れ1つ無い純白のままだった。

「此処までに疑問に思っている事あります？」

「…やっぱり、道中のバグが多かった事…ですかね？」

「その疑問に関しては長いので帰還後にお話します。他には？」

「ツカサさん、その剣重くないんですか？」

「ああ、全然」

「（全然ってあなた…、化け物ですか？）」

「他には？」

「いや、特に」

ツカサはセイギ達の質問に（半ばいい加減に）答えた。中でも一番ビックリしたのは、あのロングブレードを全く重く感じていない事である。ただ彼等にとって一番気になる疑問を後回しにしているツカサに、若干イライラしている様子である（特にゲンタ）。

「さて進みましょう…と、その前に…」

「どうかしました？」

ツカサは拳動不審並にロングブレードから降りて柄を持ち、辺りを見回した。それに気になったセイギは、ツカサに尋ねた。

「お出ましですよ」

「まさかドラゴン？」

「バグポケモンです」

ツカサの目の前には、サイホーンとその進化系であるサイドン、ドサイドンがいた。サイホーンの背中に青色の、サイドンの腹部に緑色の、ドサイドンの左肩に黄色の、それぞれコアがあった。バグポケモンだ。因みにサイホーンに関しては、今の時代には珍しい四足歩行だった。

「こんな時に…」

「厄介だな…」

「しかも感染率26%超えてるじゃん、俺達じゃ許可降りてないから修復不可だ」

「ああ、大したことない連中ですね」

「『大したこと無い！？』」

突然のバグポケモンで、しかもサイホーン以外は感染率が26%以上を超えている為に修復の許可が降りてない為、セイギ達は焦った。

だが一番焦ったのは、ツカサの思わぬ発言だった。

「とはいえ僕でも流石に3体相手は辛いです。丁度青コアもあるの  
で、セイギさん達でも修復<sup>デバッグ</sup>出来ます。前にバグポケモンを修復<sup>デバッグ</sup>しま  
したよね？」

「はっ、はい」

「じゃあ手っ取り早い、僕はサイドンとドサイドンの方を修復<sup>デバッグ</sup>しま  
す。セイギさん達はサイホーンの方をお願いします」

「えっ、大丈夫なんですか!？」

「大丈夫です」

ツカサはそう言ってロングブレードを水平に持ち、此方側に近付い  
てくるドサイドン達に自ら近付いて行った。それは、死を急ぐかの  
ような無謀にも突っ込む姿だった。

「教えてあげますよ、仲間なんかいなくても1人で戦える事をね！  
」

セイギ達には分からなかったが、その言葉を言い終わったツカサの  
表情はまるで、殺人を楽しむかのような殺人鬼の表情に豹変してい  
た。そして、

「ハアッ！！」

「ゴガッ！？」

ツカサのロングブレードはドサイドンの腹部を斬った。その斬撃は、ドサイドンのプロテクターや硬い皮膚をも断ち切る程の物で、斬られた部分から血が流れ落ちた。

「ちよつ、ツカサさん！？いくら修復するからって、流石に一般人を傷付けるのは：ウオツと！！」

「ガアッ！！」

思わぬ出来事にナガレはツカサに意見したが、同時に突っ込んできたサイホーンに意見を妨害された。

「どの道感染率が高いバグポケモンを無傷で修復するのは不可能です。皮膚を斬ったり腕を折ってしまうのは仕方のない事ですので！！」

表情は180°豹変しているが口調は全く変わっていないツカサは、サイドンとドサイドンの強力な攻撃をロングブレード1本で楽々と防いでいた。そして、

「草結び”!!”」

「グゴツ!?”」

「ギギツ!?”」

ツカサはサイドンとドサイドンの足を草で結び、それを思い切り引っ張った。体重が重い程被ダメージが大きくなるこの技に、サイドンとドサイドンはなす統べなく倒れる。

「グゴオ!!”」

「ツカサさん!!”」

「ゲンタ!! ツカサさんのサポートを!!”」

「ああ!!”」

ドサイドンも負けじと岩石砲をツカサに向けて放った。幾ら相性が今一つでも、能力値の低いツタージャでは一撃死だって有り得る。ナガレはそう考え、ゲンタに彼のサポートを頼んだ。しかし、

「言いましたよね、”仲間なんかいなくても修復<sup>デバッグ</sup>できる”ってね!!”」

「うおっ！？危ねっ！！」

ツカサはロングブレードを縦に振るい、岩石を斬った。岩石はツカサに触れる手前で綺麗に真っ二つになり、その間にいたツカサを通り越して直進していった。その際サポートに入ろうとしたゲンタに、真っ二つに斬れた岩石の1つが飛んできた。ゲンタはその岩石を素手で碎いた。

「僕の事はいいのでゲンタさんはサイホーンの方をお願いしますよ」

「はいはい分かりましたよ、先輩」

ゲンタは渋々サイホーンの方に戻って行った。この隙にサイドンドサイドンはようやく立ち上がり、2人は角を突き出して突進してきた。しかしツカサは表情を変えず、逆に自分から突っ込んで行った。

そしてサイドンドサイドンも、自分達の角をツカサ目掛けて振り下ろしたが、そこにツカサはいなかった。何故ならツカサは、角が降りかかる前に棒高跳びの要領で跳躍したからだ。そして、

「“グラスミキサー”！！」

「ガガガガッ！？」

「グゴゴゴッ！？」



2人の真上で錐揉<sup>きりも</sup>み回転し、竜巻を起こした。竜巻は2人を巻き込み、先程の斬撃もあってかドサイドンは一時的に気絶した。サイドンは怯<sup>おそ</sup>んでしまい、動けなかった。

地面に着地したツカサはゆっくりとドサイドンの左肩に近付き、そこに出来たコア目掛けてロングブレードを突き立てた。

デバッグ キャリーアウト  
「修復・執行」

コアは粉々に破壊され、ドサイドンは元に戻った。その後直ぐにサイドンのコアにもロングブレードを突き立て、元に戻ったサイドンはその場に倒れ込んだ。

「なあ、ツカサさんって本当に化け物か？」

「知るべき事と知らない方が良い事がある。ここは後者だろ？」

「ナガレ、ゲンター!!」

「グガア!!」

「よつと!!」

「でやつ!!」

ツカサの戦い振りに呆然としていたナガレとゲンタに向かって、サイホーンが放った”岩雪崩”が降りかかってきた。セイギの声かけによりナガレは前方にステップしてかわし、ゲンタは大斧を横に振るって碎いた。

「っと、お喋りはここまでにしとくか」

「感染率は20%、急いだ方が良い!!」

「よし、一気に行くぞ!!」

「ゴギヤアアアアア!!」

サイホーンはセイギ達に突っ込んできた。

## EP10：異常事態

「ゴギヤアアアアア!!」

「くっ!!」

サイホーンの突進はセイギに向かって来た。セイギは長槍2本を前に突き出して防ぎ、押されないように両足で踏ん張った。サイホンも負けじと力を加え、少しずつセイギを押して行った。セイギの表情は苦しそうだった。非力な自分では、サイホンみたいなパワータイプ相手に分が悪過ぎるからだ。

「ゲンタ!!」

「ああ!!どりゃあ!!」

「ゴギヤツ!?!」

セイギの合図と共に、サイホーンの真下の地面からゲンタが現れ、アッパーカットの要領でサイホーンの腹部を殴り、サイホーンをひっくり返した。

「そらよつと!!」

その後ナガレも穴から飛び出し、空中で一回転した後サイホーンの腹部に踵落としを喰らわせた。アッパーカットと踵落とし、この2つの攻撃は余程強力なのか、サイホーンは痛みでもがき苦しみ始めた。

「仰向けのままで痛がられてもなあ、攻撃出来ないっの」

「コアは背中なのに、ゲンタがもう一度”穴を掘る”を使ってくれれば…」

「悪い、今PP底ついてるから無理」

バグ相手に有効なのは”技”ではなく”デバッグウェポン”であり、そのため”技”を使う機会が少ないデバッカーに関しては、PPを統一化しているのだ。PPは”技”を使うと当然減る、しかし武器や素手で攻撃すれば次第に回復するので、PPの心配は無い。当然だが大技や自己回復技はPPを大量に喰い、自己防衛技や補助技はPPの消費量が少ない。

「どうする？」

「どうするって、そりゃあ…」

「何時も通り3人で力を合わせる、でしょ？」

「「ああ！！」」

やがてサイホーンも起き上がり、3人に向かって突進してきた。その様子を見ていた3人は、それぞれの武器を構え直し、同じくサイホーンに向かって走り始めた。

「セイヤア！！」

「グギツ！？」

セイギとナガレは横方向に緊急回避をして、サイホーンの突撃とゲンタの横振りをかわした。その一撃は、サイホーンの角を破壊する程の力だった。角を壊されたサイホーンが怯んでいる内に、

「”毒々”！！」

ナガレはサイホーンの足元に紫色の水溜まりを発生させた。水溜まりに触れたサイホーンは、顔色が先程より悪くなった。状態異常”毒”の上位種”毒々”だ。とは言え、毒々でもその内自然回復する。

「”辻斬り”！！」

セイギは長槍でサイホーンの皮膚に傷を付けた。辻斬りと言えば急所に当たりやすい技であるが、運悪く急所には至らなかった。だが彼等にとっては、此処までで十分なのだ。

「そりゃあ!!」

「グゴツ!？」

サイホーンの下顎に向かって大斧を突き出したゲンタは、そのままサイホーンを持ち上げた。言っておきますがこの荒技(?)は、年中無休で体を動かしているパワータイプだから出来る技なので悪しからず。下手に真似すると腕の骨が折れると思うので。

それはさて置き、今のでサイホーンの体はひっくり返ろうとしていた。当然、背中のコアを狙うチャンスでもあるが、下手に動いたら潰されるというリスクもある。しかも今のサイホーンは毒々状態、体勢を整え直す状況ではなく、結果的に背中から倒れる。しかし、リスクを省みない馬鹿がいた。

「そらよ!!」

「やあ!!」

ナガレは地上で矢を、セイギは跳躍して長槍を、それぞれコアに向かって放った。サイホーンの皮膚の硬さを利用したのか、コアはヒビが入っただけで壊れる事は無かった。しかし、サイホーンは倒れた衝撃でのびたようだ。

「おいおい、完全にのびてるぞ?」

「じゃあねえ、起こすか。フギギギイ!!」

「じゃあ、デバッグ キャリアアウト修復・執行つと...」

ゲンタはサイホーンを力任せに寝返らせ、セイギはコアに長槍を突き立てた。

「...実力行使か。やっぱり彼等は面白いや。あの馬鹿共とは大違いだ」

その様子を、気絶しているドサイドンの上に乗って見ていたツカサは、呆れたように呟いた。

「いやゝ、疲れた疲れたつと」

「つたく、また襲撃かよ」

「まあ、仕方ないよ」

「彼等は医療班に任せて、僕達はドングの搜索に行きましょうか」

「ウヒヤア!？」

”D - A D V E N T 医療班”と書かれたワッペンを付けたポケモン達が、力を合わせてサイホーン達を担架に持ち上げているのを横目に、ゲンタは背伸びをしていた。医療班はその名の通り、怪我をしたポケモン達の医療を行うD - A D V E N T管轄の組織で、必要と有らば現地まで出張するという、お節介な救急隊みたいな連中である。ただ医療班の連中は仕事に誇りを持っており、馬鹿にはいけないようだ。

さておき、ツカサとしてはそろそろドングの搜索に進みたいようだ。ロングブレードを素振りしている。範囲の内にいたセイギは避けた。

「…ああ、また政府の犬共か。いい加減にしてほしい物だ」

その様子を廃ビルの屋上から、黒コートのポケモンが眺めていた。そのポケモンは、一枚のカードと電車の車掌が持っているようなグリップ(?)を取り出した。そのカードの端をグリップに入れて穴を空け、そのカードを運ばれているサイドンに向かって投げた。カードはサイドンの腹部に刺さった後、半円状に変わった。

「ゴギヤアアアアアアアアアアア！」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」



セイギ達は声のした方向に目を向けた。そこには、医療班のポケモン達を払いのけながら暴れているサイドンの姿があった。しかも腹部には、ツカサが壊したはずのコアがあった。

「どうして、コアは破壊したのに…」

「いや待て、コアの色が違う」

ナガレの言う通り、サイドンのコアの色は青色。さっきツカサが壊した時には緑色だったのが、青になっている。医療器具を使わないで感染率が下がるような事は無い。

「どうやら再感染したようですね。面倒くさい…」

「今のうちに叩くぞ!!」

戦闘体勢に入ったセイギ達であったが、サイドンは彼等を見捨て、この街の奥へと走って行った。

「待て!!」

「追うぞ!!」

「ああ!!」

セイギ達はサイドンが視界から消えないように、急いで後を付けた。最も、ツカサが早い段階で緑色のペイントボールを当てたので意味は無いが。

「さて、これからどう動くのかなっと、政府の犬さんよお…」

黒コートのポケモンは、被っていたフードを取った。そのポケモン、ハッサムはサイドンを追うセイギ達を見て、嘲笑うかのような顔をしてその場を飛び去った。

## バングルの街 廃スタジアム【奥地】

嘗てバトルやスポーツに使われたスタジアムの中に、1匹のバグが瓦礫を食べていた。紫の体毛のゴリラのような体格をして、腕にはバズーカ砲が取り付けられ、顔に円盤状の仮面を付けたバグだ。このバグこそ、セイギ達の目標である”ドンゲ”だ。

「グゴオオオオオ!!」

「ウギ!?!」

そこへ再感染したサイドンがやって来て、ドングに襲いかかって来た。ドングはサイドンを突き飛ばそうとするも、サイドンの力が強いのか身動きが取れなかった。サイドンは口を開き、そして

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドングは悲鳴を上げた。

「おいおい、あんなのありかよ……？」

「バグポケモンがバグを喰らうなんて、有り得ないだろ」

「どうなってるの、あれ！？」

セイギ達が到着した頃、ドングは哀れな姿になっていた。そしてサイドンの体も、変化していた。

その姿は、サイドンの体にドングの特徴的な部分が付いた、言い換えればサイドンとドングを掛け合わせた姿になっていた。

セイギ達は思わぬ出来事に驚きを隠せなかった。ある意味異常であるツカサを除いてだ。ツカサは至って冷静に、その姿を見ていた。

「ぼうつとしてないで、来ますよ」

「クツ!!」

「ゴギヤアアアアアアアアアアアア!!」

サイドンは、セイギ達に向かって吼えた。

「さあ、政府の犬共!!どんな様をするのか、俺に見せてくれよ!!」

ハッサムは観客席の、セイギ達から見えない所で見ていた。

## EP10：異常事態（後書き）

異常化したサイドンについて、次回から”サイドング”とします。

”サイドン”と”ドング”を合わせてみましたが、別にこれを狙ってバグの名前を”ドング”にした訳ではありませんので悪しからず。本当です（泣）

でも逆立ちで反省しておきます

## EP11：化け物と罵られし者（前書き）

最近残酷描写が多くてすみません。今回も何となく自重してません  
（11月25日追記：題名変更しました）

## EP11：化け物と罵られし者

バングルの街 廃スタジアム

「ゴギヤズー!!」

「ウワッ!!」

「セイギー!!」

異常化したサイドン（以下、前回の後書き通りサイドング）のパンチに、セイギはスタジアムの観客席まで吹っ飛ばされた。事前にガードしたものの、していなかったらどれほど飛ばされたと思うと、恐怖のあまり一歩後退りするナガレとゲンタだった。ツカサは以前として表情を変え、サイドングに斬りかかっている。

ナガレは矢を放ちながらセイギの元へ後退し、セイギに錠剤型の回復薬を飲ませた後、セイギの体を起こした。

「立てるか？」

「ありがとう」

「セイギ!!!大丈夫か!？」

「!!!」

ゲンタがセイギの、包帯が巻かれてある右腕を掴んだ。セイギは驚きのあまり、ゲンタの手を払いのけた。その行動に、ナガレもゲンタも驚いた。

「あつ…、ごめん」

セイギはそれだけを言い、サイドングへと走って行った。2人は啞然していた。あの仲間思いのセイギが、仲間の手を払いのけたのだからだ。

「セイギ、俺達にも右腕を触らせたくないんだな」

「あいつ、最近どうしちゃったんだよ…？」

2人はセイギの姿を見て、悲しんだ。やがてサイドングへと向かって行った。

「何をしていたんです？」

「すみません」

「しかし、どうします？」

「あんなの、修復出来るんですか？」



セイギ達は、1人応戦していたツカサに聞いた。この状況をどうにかするには、目上であるツカサに聞くしかないからだ。ツカサは溜め息混じりに冷静に答えた。その答えに、3人は驚きを隠せなかった。

「どうするも何も、

殺すしかないでしょう」

「……えっ!?!」

「そもそもバグポケモンがバグを捕食する事態異常です。今までの任務にもありませんでした。元々種族差がありますがバグ感染したポケモンは、バグが全身に周るのに時間がかかります。バグを捕食するという事は、完全なバグになる為の時間短縮になる事なんです」

「だからって、同じポケモンを殺すなんて出来ませんよ!!」

「あれはポケモンではありません、立派なバグです。バグを殲滅す

るのが僕達の仕事です、バグ化したポケモンも対象に含まれます」

「でも、でも…、僕達には出来ません」

ツカサの言い分は合っている。実際バグ化したポケモンを見た者はいないが、殲滅対象に入っている。しかしセイギ達は未だに反論していた。自分達が、同じポケモンを殺すなんて考えもしないのだからだ。

その時、ツカサの平手打ちがセイギの頬に当たった。誰もが驚き、ツカサはセイギの胸倉を掴んで静かに言った。

「…貴方達の思い通りに世界が動く訳が無いだろ？」

「…えっ？」

「誰だって時には、やりたくもない事だってやらなくちゃ駄目な時だってあるんだよ…！」

ツカサは口調が変わる程声を荒げて叫び、セイギを突き飛ばした。ナガレとゲンタはツカサを睨んだ。しかしツカサは構わず叫んだ。

「僕だって本当は仲間と一緒に任務をしたい！！1人より大勢の方がさぞかし楽しいからね！！でも、現実はどうだ！？あいつ等から”化け物”呼ばわりされてメンバーから外されているんだ！！あんな結果主義の馬鹿共と一緒にの任務なんて端から御免なんだよ！！貴

方達だって、僕の事を”化け物”だと思ってるんだろ！？そりゃそうさ！！普通のツタージャじゃ持つことすら出来ないこのロングブレードを楽々と使いこなしてるんだから！！化け物と言われたって仕方ないさ！！だって僕は、本当に化け物なんだからよ！！」

「ゴギヤツ！？」

ツカサはそう叫び、襲いかかって来るサイドングの腹を斬った。斬られた所からは、勢い良く血が噴射した。

ツカサの言い分に、セイギ達は返す言葉が無い。傍観していたハッサムの表情からも、先程までの不適な笑みが消えている。ツカサはサイドングの方に体を向け、ロングブレードを構えた。ツカサは口調を戻し、セイギ達に向かって静かに言った。

「もし貴方達の誰かがバグになったら、その時は貴方達で殺し合う事になるんですよ。その事だけは理解して下さい。さぞかし辛いでしょうが、貴方達は現実を分かって下さい」

その言葉は、セイギ達の心に深く刻まれた。特にセイギにとっては、自分が何時完全なバグと化してみんなを殺しかねないという警告として、受け入れたのだった。

ツカサはサイドングに向かって行った。サイドングは両腕に取り付けられてあるバズーカから、瓦礫で作られた弾を放った。ツカサはロングブレードを振るって弾を斬りさいた。

「（仲間なんて…）」

「ゴギヤアアアアア！！」

「せやあー！！」

「グギッ！？」

「（仲間なんて…必要無い！！）」

ツカサはサイドングの攻撃を避けながら、ロングブレードで攻撃した。途中、ツカサの脳内に雑念が過ぎ<sup>よ</sup>った。仲間なんて必要無い”と。しかし、彼の脳内に過去の映像が流れた。  
バスト・リフレクション

『今日こそはワシが勝つからな！！』

『いいや私が！！』

『…あのつ、僕も』

『はあ！？何でお前みたいなの化け物”を連れて行かなきゃならんのじゃ！？』

『”化け物”は連れていけるわけないだろ？一人で暴れてろ』

『でも、正規メンバーは必ず同行しないと…』

『 ”原則” であって ”絶対” じゃないだろ？ 』

『 嫌なら正規メンバーから離れるんだな、ハハハハハハハハハハ！ ！ 』

『 ……！ ！ ！ 』

「 ゴギヤアアアアア！ ！ 」

「 しまっウワアアア！ ！ 」

バスト・リフレクション  
過去の映像のせいで、ツカサはサイドングの攻撃を喰らった。ツカサはスクリーンまで殴り飛ばされ、液晶画面が粉々になるほどめり込んだ。

「 ガハッ！ ！ 」

ツカサは吐血し、スクリーンから崩れ落ちた。死んではないものの、体力が消耗し過ぎて立てる状況ではない。サイドングがツカサに近付き、右腕を振り上げた。

「 （僕も終わり…か） 」

ツカサは死を覚悟し、ロングブレードを手放して目を瞑った。しかし、サイドングの右腕は振り下ろされなかった。何故なら

「ググ…グッ」

「…！！」

ツカサの目の前で、ゲンタが大斧を構えてサイドングの攻撃を防いでいたからである。

「ゲンタさん、どうして…？」

「…例えちゃんとした仲間じゃなくても、守るのが俺達ケルベロスの勤めですからね！！”火炎車”！！」

「ゲギッ！？」

ゲンタは大斧を押して、サイドングを突き飛ばした。サイドングはよろけ、その隙にゲンタは火炎車で攻撃した。相性は悪いが、サイドングが後ろに倒れたのでよしとした。

「ツカサさん、回復薬です！！」

「…どうして」

ナガレがツカサに回復薬を渡し、弓に矢をかけた。ツカサは苦し紛れに言葉を発した。

「どうして、僕を助けるのですか？セイギさんを殴ったというのに……」

「……だって、見逃せませんよ。いくら酷い事したって、僕達は仲間なんですから」

「……えっ？」

「……まあ、痛かったですけどね。あゝ、痛っ」

「回復薬置いておきます。俺達はゲンタのサポートに周りますから」

ツカサの質問にセイギは頬をポリポリ掻きながら答えた。ナガレは回復薬をツカサの手の届く範囲に置き、ゲンタのサポートをした。

ツカサは回復薬を手に取り、それを飲み込んだ。次にロングブレードを手にし、それを松葉杖のようにして立ち上がった。同時に、ツカサの脳内にある映像が流れた。

『ツカサ、早く来いよ！！』

『置いていくぞ！！』

『はっ、はい!~!』

「（…本当は、こんな仲間が欲しかったのかもな）ハハッ…」

ツカサはそう思い、静かに涙を流した。そして、一本のロングブレイドが降ってきた。



## EP12：死を招く黒刀（前書き）

今回も自重してません。描写も文章も全く（謝）

全く上昇しない作者の表現力をどうか許して下さい

## EP12：死を招く黒刀

突如スタジアムに何か<sup>が</sup>落ちてきた。それにはセイギ達やサイドングも驚いた。

落下地点には、一本のロングブレードが刺さっていた。黒い悪魔の翼を模し、取っ手はチェーンソーのようになっていた。デバッグウエポンは使用者と引き合う形になっている為、デバッグウエポンであるそのロングブレードが落ちてきたと言うことは、使用者が此処にいる事でもある。そしてその使用者とは、そのロングブレードの後ろに立っていたツタージャだ。

『ツカサさん、貴方のデバッグウエポンのメンテナンス終わったので送りました!!』

「グッドタイミングです」

そのツタージャ、三原ツカサは通信相手と話した後、そのロングブレード（黒）を左手に持つと、右手に持つてあるロングブレード（白）と刃を擦らせた。

「少し遊びすぎたようですね。此処からは本気で行かせて貰いますよー!!」

「ゴギャッ!?!」

そう言い終わった頃にツカサは、ロングブレード2本を慣れた手付きで振るい、サイドングに斬撃を浴びせていた。続いてロングブレード（黒）の柄尻でサイドングを殴り、高く跳躍して両剣の柄尻でサイドングの頭を殴った。

「”宿り木の種”！！」

サイドングが怯んでいる内にツカサは一個の種を植え付けた。種から蔦が何本も生え、蔦はサイドングの全身に纏わりついた。

「そりゃあ！！」

「ギッ！？」

ツカサは地面に綺麗に着地すると、両剣を逆手に持ち直した。そして、サイドングの両腕に取り付けてあるバズーカ砲を斬り落としたのだった。1つ1つ隙の無いツカサの動きに、セイギ達は啞然としていた。

「ツカサさん、すげえ」

「凄いを通り越して格好良いな」

「うん同感」

「何をボサツとしているんです？貴方達も戦わないと死にますよ」

「そうだった」

「はっ！！」

「おりゃあ！！」

ツカサの言葉で自分も戦っていた事を思い出したセイギは、長槍の柄の部分でサイドングのこめかみ辺りを殴った。ナガレは持ち前の素早さを生かして、バズーカ砲があった右腕の傷口まで飛び込み、至近距離で矢を放った。ゲンタは跳躍した後サイドングの体を伝って頭付近まで行き、大斧を振り下ろして角を破壊した。

高ダメージを受けたサイドングは、今や攻撃しようともミスをする事が多くなってきた。HPが少なくなってきた証拠だ。

「…やっぱり、僕達はポケモンを殺せません」

「…僕が何時殺すなんて言いました？」

「…って事は」

「ええ、多少無駄しますが修復します<sup>デバッグ</sup>」

「ツカサさん…」

サイドングを殺すかどうかの選択を強いられていたセイギは、結局  
”殺せない”と答えた。しかしツカサは笑顔で、サイドングを修復  
すると言った。

「ただ言った通り、多少無茶をします。それでも構いませんよね？」

「「「勿論ですとも！！」」」

「…やっぱり、貴方達は馬鹿なのかどうなのか」

ツカサはセイギ達の答えに失笑、そして弱っているサイドングに口  
ングブレード（黒）を向けた。

「修復デバッグと言ってもコアを破壊するのですが、厄介な事にあんなった  
場合、そのコアは内臓デバッグにあります」

「内臓って、手当たり次第体を突き刺せと？」

「それも1つの手ですが、殺せないと言いましたのもう1つの手  
を使うしかありません」

「それって…」

ゲンタとセイギが、ツカサに質問した。ツカサは両剣を再び逆手に  
持ち、

「コアを吐き出させるんです。ねっ、無茶でしょう?」

そう言ったと同時に、サイドングに近付いて腹部を両剣の柄尻で殴り始めた。

「…貼り付いてる訳じゃないんだな」

「…そうなんだ」

「面白え!!」

「ゲンタ、お前…」

「うわっと!!」

意外な答えにナガレとセイギは呆然、ゲンタはツカサの方法に乗ったのか、サイドングに近付いて殴り始めた。ただ隣にいるツカサが武器持ちなので、結構危ない。

しかしサイドングも、左腕を振り上げてゲンタとツカサを殴り飛ばそうとする。そこで、

「僕達はサポートでもしょうか!!」

「そうだな!!」

「グギッ!？」

セイギとナガレはゲンタとツカサのサポートをする事にした。とりあえず、2人はサイドングの注意を引こうとした。案の定サイドングの左腕は、邪魔なセイギとナガレに振り下ろされたが、2人は同時に左腕に斬撃を与え、無理矢理攻撃を中断させた。

「て言うかツカサさん、これ何時までやれば良いんですか!？」

「吐き出すまでに決まってるじゃありませんか」

「やっぱり?」

「ええ。僕の黒刀が飽きてるようですけど、仕方ないです」

「こっちももう飽きましたよ!!」

「ゴブッ!？」

ゲンタとツカサに関しては、サイドングを殴っている最中にもかかわらず、実にほのぼのとした会話をしていた。とは言え、流石に飽きたゲンタは右拳に力を入れ、サイドングの腹を思い切り殴った。すると、サイドングの口からある物体が吐き出された。

「ツカサさん！！これが！？」

「ええそうです、そのサイドンのバグコアです」

”サイドンのバグコア”と呼ばれた物体とは、パイプが何本も繋がられてある、機械で出来た黄色の球体だった。パイプからは、灰色の胞子が多量に排出されていた。

ツカサはサイドングから離れ、ロングブレード（白）を地面に突き刺し、黄色いバグコア目掛けてロングブレード（黒）を突き上げた。ロングブレード（黒）の剣先からは、悪食神のような顔の怪物が現れた。その怪物は口を大きく開け、今にもバグコアを喰わんばかりの勢いで暴れていた。

「CAUSE OF DEATH BLACK BLADE」、  
”死を招く黒刀”、今回だけですよ」

ツカサのロングブレード（黒）から現れた怪物に驚くセイギ達をよそに、ツカサはそう呟くと表情を殺人鬼のような表情に豹変し、サイドングが悪足掻きとして襲いかかってくるのをよそにロングブレード（黒）を振り下ろした。

デバッグ キャリアアウト  
「修復・執行」

怪物はバグコアを一口で丸ごと喰らい、何度も何度も噛み砕いて飲



み込んだ。それと同時にサイドングも元に戻り、気を失った。

『ウガアアアアアアアアアアアアア！！』

「今日も暴れ始めたか」

喰らい終えた怪物が突然暴れ始めた。ツカサは冷静にロングブレード（白）を地面から抜き取り、その柄尻をロングブレード（黒）の柄尻に取り付け、ハルバード状にした。暫くして怪物は大人しくなり、ロングブレード（黒）の剣先から引っ込んだ。

「ああ、そっぴゃあの化け物もアレだったんだっけ？どうりで異常な訳だ」

スタジアムの観客席で高みの見物をしていたハッサムは、ツカサを見て呟いていた。

「全く、俺達が潰したと言うのに、まだくだらない事やってたんだな、政府はよ」

ハッサムはそう言うと、フードを被ってその場を後にした。

「さて、次は彼処でも襲うか」

「ツカサさん、凄いですね」

「伊達に14年も生きてませんよ」

「（14年って、俺達年下より劣ってるのかよ）」

「（悲しいな）」

セイギ達は、帰還用に呼び出したヘリに乗って、バングルの街を後にしていた。通常出発も帰還もエアポートが原則なのだが、4人共同体がボトボトなので仕方無い。

「ツカサさん、あの黒刀って何なんですか？」

「あああれですか？白刀とペアで作られた奴なんですけど、結構食いしん坊で。さっきまでメンテナンスに出してたんです」

「はあ…」

「あれだけで任務に出るのは危険なので、白刀が使えない時には任務に出ないんですよ。幾ら食べても減ることのない食欲に駆り立てられてるみたいで、白刀が無いと最悪僕まで喰われる事も」

「（怖っ）」

セイギから聞かれた質問にツカサはスラスラと答えたが、その答えは意外にも怖かったようだ。ゲンタが震えてるのだから。

「…さて、先程聞きましたよね？」 バグが異常に多かった」と

「はい」

「その質問、お答えします。貴方達が気になっていた異常発生の原因を」

## EP12：死を招く黒刀（後書き）

次回、第2章完結致します

### EP13：第3者

「本来バグは宇宙から飛来したバグ胞子が集まって個体を形成している事は御存知ですよね？」

「はい、一般常識ですから知らない訳には」

「当然バグが死ねば個体は地面に還り、形成していた胞子はそのまま散乱している事ですか？」

「ええ」

「ところが最近の”大量殲滅任務”に限り、死んだバグの個体から胞子が散乱されずに自然消滅しています。しかも翌日の任務にその地区”大量殲滅任務”が無い。先程言った事と照らし合わせると、明らかに可笑しいですよね？」

「確かに。本来バグ胞子は消滅せず、また新しいバグ個体を形成するの……」

「だからこう言う人が居るんです。”第3者がバグを精製して各地区に放しているんじゃないか”と」

「第3者が……ですか？」

へりに乗っての帰還中に、ツカサはセイギ達の質問に答えていた。その解答は、今後セイギ達も知る必要がある物ばかりで、3人共真剣に聞いていた。

「更にここ最近、一般人のバグポケモン化が異常なまでに増加しています。1ヶ月に3人の筈が、25人ものが被害者が毎月出ています。一般人は各地区に侵入禁止の筈なのに、どういつ訳かバグ感染する。あまりにも不自然です」

「……」

「ただバグポケモン化した一般人には1つだけ共通点がありまして、感染する直前まで居住区に居たと言っんですよ。先日貴方達が修復したピカチュウも、”居住区を散歩していたら突然目の前が真っ暗くなつて、気がついたらカンドの森で助けられいた”と」

「そうだったんですか……」

「特に最も稀に見ないバグの再感染、これも異常です。普通だった<sup>デバッグ</sup>ら修復した際に抗体が入る筈なのに、抗体が入って直ぐのポケモンが再感染するなんてまず有り得ない事です。しかし修復した筈のサイドンが再感染、しかもバグを補食。どう思いますか？」

「おつ、可笑しいです。普通に考えても……」

セイギの答えを聞き取ったツカサは、一度深呼吸して再び話した。

「これも先程同様、第3者が関わっています」

「その第3者って、誰なんですか？」

「詳しくは分かりませんが、心当たりならあります。最近目撃例が多い非政府組織」

ツカサはそこまで言い終わると、ヘリに乗った際に配給されたスポーツドリンクを飲んで喉を潤し、一度咳払いをして答えた。

「ハッカー”です」

「ハッカー”？」

「聞いた事あります」

「本当かよナガレ？」

ツカサの言った”ハッカー”にナガレは反応、何も知らないゲンタが聞いたので、ナガレは静かに答えた。

「デバツカーがバグの存在を全否定して殲滅するのに対し、バグの存在を肯定して自分達の目的の為に有効活用をする過激派の連中で、目的の為に手段を選ばず、その障害となり得る者を徹底的に潰す自己中心的な組織。つまり俺達デバツカーが業務する事の逆を行っている連中だ」

「その通りです。今回の一連の事件、僕はハッカーが絡んでいるのではと思っています。バグの大量発生、居住区にいたと証言する一

般人のバグポケモン化、再感染とバグの捕食行為、どれも不自然に起こった物としか思えません。意図的にバグを大量発生させ、自由に一般人をバグポケモン化する。普通のバグ胞子にはできません」

「だからハッカーという奴らがやっているのではないかと？」

「ええそうです」

デバッカー 宿舎トワイライト支部 食堂

「もらいっと」

「ああ、それ俺のトウモロコシ！！返せよ！！」

トウモロコシの取り合いをしているナガレとゲンタを余所に、セイギとツカサは食事をとっていた。ツカサの皿は（デザードが7割だが）バランスよく配膳されており、驚く事にセイギの皿は緑黄色野菜が多く盛られていた。

「案外野菜好きなんですね」

「ベジタリアンなので…。意外ですか？」

「いえ」

「この単細胞の熱血バカ！！」



「なんだとムツツリスケベ!!」

2人は再び自分が盛った食べ物を口に運んでいた。ナガレとゲンタに関しては、無意識の内に食堂の外に出るほど取っ組み合いをしていた。その様子をセイギは笑いながら、ツカサは啞然しながら見ていた。

「セイギさん、何故貴方は彼等と組んだのですか？」

「…僕、彼等に助けてもらったんです。気が付いたら川で溺れていて、ゲンタは自分の身も省みずに川に飛び込んできて、ナガレは僕達2人を陸に引き上げる為のロープを作ってくれて、助けてくれたんです。彼等に助けて貰わなければ、僕は死んでいたかもしれません。だから決めたんです、彼等と共に生きるって」

「そうですか。彼等と共に生きてきたから、彼等を信じられるのですね」

「はい」

セイギとツカサは、楽しそうに平凡な会話をしていた。

ノービスランク 宿舍 チームケルベロスの部屋

「グガアアアアア、ゴオオオオオオオ!!」

「これも乾　って奴の仕業なんだ…」

月明かりが優しく差し込む部屋で、ゲンタは大きい躰しづみを掻きながら、ナガレは意味不明な寝言を言いながら、共にボロボロの状態で寝ていた。部屋には普通のベッドと二段ベッドが1つあり、普通のベッドをセイギに譲って2人は二段ベッドで寝ているのだ。因みに上はナガレ、下はゲンタである。

「……」

セイギはベッドに座り、包帯を取った自分の右腕を、月光に翳しながら眺めていた。彼の右腕には、真っ黒に染まった小さなバグコアが出来ていた。

「ゴメンね…ナガレ、ゲンタ。流石に君達にも言えないよ」

セイギはそう言うと、右手に包帯を巻いてベッドに横になった。そして静かに寝息を立て、深い眠りに着いたのだった。

ツカサさんは”仲間なんか要らない”と言っていた。でも、心の中では仲間と一緒に居たかったのだと思う。誰だって、自分1人だけでは限界があるのだからだ。でも、本当は頼りたいのに頼れない所まで行ってしまったんだと思う。ツカサさんも、僕も…

2  
t  
h

D  
e  
b  
a  
c  
k

白  
刀  
と  
黒  
刀

E  
N  
D

## 設定集？

### 『キャラ設定』

名前：ツカサ（本名：三原ツカサ）

種族：ツタージャ

性別：

性格：ナガレ以上の冷静沈着

所属：デバッカー

ランク：ゴールド

武器：ロングブレード×2（その内1本曰く付き）

技：草結び

グラスミキサー

宿り木の種

???

2048年5月4日生誕

2053年6月4日

（データ破損の為無記載）

2058年9月30日”D・ADVENT”入隊。段田バン、佐伯ウラと共にチーム”サンスター”を結成するも、3ヶ月後の12月30日に正規メンバーから契約メンバーに異動

名前：チハル（本名：四条チハル）

種族：タブンネ

性別：

性格：マイペース

所属：デバッカー トワイライト支部受付嬢

ランク（最終段階）：カッパー

武器：ガトリング砲（現在は他のデバッカーが使用）

技：????

???

???

???

2037年7月9日生誕

2052年11月17日”D - A D V E N T”入隊。神崎（現トワイライト支部長）とチームを結成。チーム名不明

2057年2月23日トワイライト支部受付嬢に強制異動

名前：マサト（本名：門矢マサト）

種族：ハッサム

性別：

性格：挑発的

所属：ハツカー

武器：大剣

所持品：カードとグリップ

技：燕返し

???

???

???

1983年生誕

2005年鉄道会社に就職

2010年バグ襲撃による落盤事故により死亡

2062年10月13日チームケルベロスが発見し、生存が確認

『地区設定』

## ・バンゲルの街

セイギ達が訪れる数ヶ月前まで居住区として使われた大都市で、現在は嘗ての面影は全く無い。高層ビルが建ち並んでいるオフィス街、様々な物が買えるショッピングモール、何人ものポケモンが居住するマンション等といった、生活に必要な物がある。バグ汚染と同時にゴーストタウンに廃都市と化し、今や飢えたバグの巣窟となっている為、デバツカ―しか侵入を許可されていない。

## 『バグ設定』

### ・ドンゲ

ゴリラのような大型バグの一種。両腕の強腕攻撃や巨体を生かした突進攻撃は勿論、取り付けてあるバズーカ砲から瓦礫弾を発砲といった、遠近対応型バグ。聴覚が優れており、離れた場所の音にも聞き取る。瓦礫と言った石物を好む。亜種情報有り

## 設定集？（後書き）

現在、キャラクターにICVを付けるかどうか迷っています。

作者は最近の声優に詳しくないので、俳優も入る可能性100%です。

もし付けた場合、あくまでイメージなので殴らないで下さい。全力で土下座するので

## EP14：特訓

### トワイライト支部 訓練場

『ギャツ!?!』

「あーあ」

「大丈夫かな?」

ボール打ち出しマシンで特訓していたゲンタは、時速150kmで放たれたバレーボールをもろに喰らった。因みに大斧は持つてない。

その様子を、紙コップに淹れたコーヒーを飲み、ナガレは呆れ、セイギは心配そうに見ていた。同じく武器は持つてなかった。

此処はトワイライト支部に所属するデバツカーが訓練するために設けられた訓練場である。今のようなボール打ち出しマシン等様々な器具が用意されているスポーツジム、水中戦を考慮した深めの室内プール、気候や温度を変えられる部屋、挙げ句の果てには実際の区域をそのままVR空間で再現したVRルームなんかもあり、最先端技術を利用している訓練場である。余談だがこのような立派な訓練場はトワイライト支部だけで、中にはこれ目当てでトワイライト支部に異動するデバツカーも少なくない。当然電気代なんかは半端ないが、ありとあらゆる方法を使って自家発電して電気代を浮かしているとか。後はトワイライト支部の電気タイプから少しずつ徴収とかもしてるとか。



「ゲーター、それ”反撃面”を鍛えるんじゃないくて”防衛面”鍛えるやつだぞって、聞こえないか」

『コノヤロウ!!』

「ははっ…」

ナガレは訓練中のゲンタに、この訓練の目的を言ったものの、外からの声は聞こえない部屋での訓練だった事を思い出して言うのを止めた。当然聞こえてないゲンタは、バレーボールを投げ返したりしていた。セイギはただ笑うしかなかった。

「にしてもさ、セイギ自ら訓練しようなんて珍しいな。何かあったか？」

「ああ、コレだよ」

何時もは自ら訓練しようとな乗出する事のないセイギに違和感を感じたナガレは、ふとセイギに質問した。するとセイギは、3枚の緑色のカードをナガレに見せた。カードには3枚とも”D - A D V E N T トワイライト支部ゴールドランク 三原ツカサ”と書かれていた。

「”契約ライセンス”？」

「そつ。この前ツカサさんがくれたの。他人のライセンスを貰うには自分のライセンスも必要でしょ？だからナガレとゲンタのライセンス、無断で1枚ずつ持ってっちゃった。ゴメン」

「どつりでライセンス1枚無かった訳だ。まあライセンスの交換なら仕方ないな。つまりツカサさんの足を引っ張らないように強くなりたいたいから自分から訓練を名乗り出た訳か」

事情を話して謝ったセイギを許し、ナガレはツカサのライセンスを1枚セイギから貰った。

デバツカーはライセンスと呼ばれる、所謂免許証を常時携帯しなければならぬ。ライセンスを携帯していないと、盗難防止用に取り付ける事を義務付けられているデバツグウェポンの固定装置を解除出来ないからだ。もっともライセンスだけでは無く、使用者の手形&指紋認証も無ければ固定装置を解除出来ないが。ライセンスには2種類あり、身分証明書や固定装置を解除するのに使用する”キーライセンス”、他チームに渡してチーム契約を結ぶのに使用する”契約ライセンス”と、用途に応じて使い分ける。因みに間違えないように、キーライセンスは専用パス（配布される）に挿れる事を義務付けられている。契約ライセンスを他チームに渡す事で、そのチームと契約を結ぶことになり、緊急任務以外の大抵の任務に同行してもらおう事が出来る。つまりライセンスは、デバツカーにとっての名刺なのだ。

「ツカサさん、前に所属していたチームで拒絶されてから今まで1人で戦っていたみたいだし、この前の任務も色々助けてもらったか

ら、今度は僕達がツカサさんを助けてあげようよ」

「…ああ」

「死ぬかと思った…」

「お疲れ様。あとコレ」

「…何コレ？契約ライセンス？」

「ツカサさんからだってさ。持っておけよ」

訓練が終わり、ボロボロの状態だった故に四つん這いで這い出てきたゲンタは、終いに倒れた。ナガレは倒れているゲンタに近付き、ツカサの契約ライセンスを渡した。

「あれ速過ぎるだろ。異常だ、異常過ぎる…」

「単にお前が避けないからだろ？」

「同感」

「何だよそれ、じゃあお前等やってみろよ」

「言われなくてもやってやるよ」

「ゲンタはゆっくり休んでてね」

セイギとナガレはそう言って、ゲンタをベンチに寝せた後、部屋の中に入って行った。

「球速は、時速150kmと」

「観てる方は楽しいのに、やる方は怖いってこういう事なんだね」

『速度認証、砲撃開始シマス』

マシンがそう言うのと、砲撃口からバレーボールが一斉に発射された。セイギもナガレも、飛んできたバレーボールを瞬時にかわし始めた。

「…オイオイ、あいつ等も異常過ぎるだろ？」

『よつと！！』

『ハッ！！』

時速150kmの球速をも楽々とかわすセイギとナガレに、ゲンタは啞然としていた。

この訓練で鍛えられるのは”瞬発力”、技や武器を使わずに己の感覚と体だけで瞬時に動けるようにする為の訓練である。訓練全部に言えることではあるが、武器や技を使つては意味が無いのだ。当たり前の事だが種族や個性、性格によって得意不得意な訓練は違ふの

だ。

「…何やっっているんですか？」

「ツカサさん、その火傷痕どうしたんですか？」

「ああコレですか？あの馬鹿共と縁を切りに行ってやりあった痕です。火炎放射熱かったなあ」

訓練を終え部屋から出てきたセイギとナガレは、クレープを食べながらやって来たツカサの左頬にあった火傷痕の事を言った。事情を説明し、クレープを食べ終えたツカサは、ゲンタが持っていた契約ライセンスをみていった。

「それ、持っていてくれたんですか？」

「いや、さっき貰ったばかりで」

「そうですか。所で何故訓練を？」

「ライセンス貰ったので、足を引つ張らないように強くなりたいんです」

「そうですか」

ツカサはそういうと、紙コップに淹れたコーヒーを飲み、セイギ達にとって意外な事を言った。

「ランク、上げたくないですか？」

「ランク…ですか？」

「そうです。ランクが上がれば高感染度のバグポケモンの修復許可も降りますし、一度に覚えられる技の数も増えますよ」

「上げたいです」

「ウオイ！？」

「近々昇格試験があります。挑戦してみてはどうでしょうか？」

「は、はい…。確かにバグポケモンが多い今、少しでも助けられるようにしたいです」

「分かりました。多分誰か指導官が付くかと思います。その人のいう事をちゃんと聞いて下さいね。それでは」

ツカサはそう言うのと、その場を後にした。

こうしてセイギ達は、昇格試験を受けることになった。

## EP15：天使と悪魔の指導官（前書き）

お久々の更新

今回はギャグ回として頑張りました

## EP15：天使と悪魔の指導官

「ハ―イ、貴方達が今噂のケルベロス？聞いてたより頼りになりそうじゃない」

「…ゴフツ―!!」

「ちょっ、ナガレ!?」

「大丈夫キミ!?とりあえず医務室に!!」

「…ハア」

開始早々で何だが、ナガレは突発的に鼻血が出た。セイギと眼鏡をかけた1人のコジョンド がナガレを医務室へと運んだ。ゲンタは運ばれていくナガレを見て、溜め息を吐いた。約5秒、セイギ達が彼女と初対面してからこうなるまでの時間だ。

### 医務室

「…ウン？」

「気がついた？」

「すみません、初見の大人の女性って苦手なんですよ」

「なら指導官替えた方が良いかしら？」



「大丈夫です、もう慣れましたから」

「全く、いきなり鼻血出されてもなあ。だからムツツリスケべんだよお前は」

「煩い熱血バカ」

「あつ、起きた？」

医務室にて目覚めたナガレは、コジヨンド とゲンタの2人と話していた。そこへセイギが、缶のお茶4本を持ってやって来た。

「改めてまして、私の名前は天美ヒバリ。シルバーランクのデバツカーよ。今回貴方達ケルベロスの昇格試験の指導官を担当する事になりましたって、堅苦しいの苦手だから普通に行きましょう」

「宜しく御願います…」

そのコジヨンド、天美ヒバリは自己紹介を軽く済ませた。セイギ達も軽く自己紹介し、試験日までの訓練について話した。

「試験には一次試験と二次試験の2種類があるの。一次試験は審査官とバトルを行い、二次試験は各地区に行って指定された大型バグの討伐になるの。二次試験も大変だろうけど、一番の問題は一次試験なの。一次試験は武器の使用が禁止され、自分の技と体術だけで

戦わなくてはいけないの。それも、多くて15分という限られた時間の中かつ、”1度使用した技の再使用禁止”みたいな条件付きがあるの」

「なんか、難しそうですね…」

「ほらよく言うじゃない、”武器に頼るよりも自分の力で戦った方が強くなる”って。バグの亜種も発見されている今、武器だけでは倒しきれないのよきつと」

「そうですか」

「でもランクが上がれば良い事もあるし、後悔しないと思うわ。私もできる限りの事をするつもりよ、後は貴方達次第だわ」

「分かりました。僕達、頑張ります」

「じゃあ訓練は明日から。ナガレ君が今輸血してるから今日は無理だろうし、お疲れ様」

ヒバリは（別に疲れている訳ではないが）そう言つと、医務室を後にした。因みにナガレは輸血の為、一晩入院する事になった。

## 訓練場

翌日、セイギ達は陸上競技場並の広さである訓練場に集まっていた。

「ナガレ、大丈夫？」

「何とかな。出ないとお前等の足引つ張る事からな」

「無理するなよ」

「あゝ、ごめんなさい。遅れちゃって」

スポーツウォッチを左手に付けているセイギと、右手に点滴の棒を持っているナガレと、柔軟体操をしているゲンタと、それぞれ個人的な事していると、ヒバリが急いでやって来た。

「いえ、大丈夫です」

「そう。なら始めましょ…と、その前に」

そう言うとヒバリは眼鏡を外し、ケースに閉まって近くにあったベシに置いた。そしたらビックリ仰天、

「……」

「…ヒバリさん？」

「…お前等、今から私の事は”総長”<sup>リーダー</sup>と呼びな」

「「「……ハイ？」」」

「とりあえず走りやがれえ！！周回20周！！10分以内に走り切れ！！」

「ハッ、ハイ！！」

さっきまで優しくかったヒバリが一転、攻撃的な性格になった。ヒバリはそう叫ぶと、近くにあったベンチの脚を蹴り折った。一応言うておくが、そのベンチは重量系のポケモンも考えて鉛を使用している。

それを見たセイギ達は、あまりの恐怖のせいでヒバリに従うしかなかった。

「ヒバリさん、何か変なんだけど！！」

「どうしてあんなった！？」

「こっちが聞きだいつつの！！」

「私語なんか呟いてねえでさっさと走れ！！」

「はい！！」

ヒバリの暴走に混乱中の3人は話していたが、後ろからバズーカ砲を構えたヒバリに撃たれそうだったので、以降は黙ってやることになった。

当然これだけに有らず

「腹筋500回背筋500回、腕立て500回10セット!」

「ゼエゼエ」

「ハアハア」

「……」

「ナガレ!」

ふざけた回数の筋トレや

「時速200kmの豪速球をよけやがれ!」

「アダダダダダ!」

「避けきれないよ!」

「……」

かなりの速さで飛んでくるバレーボールをかわすやつだったり、

「匍匐前進!!」

「いつ、意外に辛い……」

「2足で慣れちゃったから……」

「……」

遂には如何にも軍隊訓練みたいな訓練が彼等を襲い、ナガレに関してはその命を神に返していた。

「……よりによって、元暴走族総長かつ元陸軍軍曹のヒバリさんか。ありゃセイギさん達大変そうだな」

その様子を、ツカサが板チョコレートを食べながら眺めていた。

「……いつ、生きてるか……?」

「どうにか……、でももう駄目かも……」

「……」

地獄のような訓練から漸く解放され、セイギもゲンタも瀕死状態、ナガレは……手遅れだった。

「フウ……、お疲れ様」

眼鏡をかけて元の優しい性格に戻ったヒバリは、3人の為に栄養ドリンクを買ってきたようで、それぞれ渡した。

「ヒバリさん……、僕達もう駄目です……」

「ああ、ごめんなさい。眼鏡を外すとどうもやんちゃだった頃の性格が入っちゃうのよ」

「そうなんですか……（心：やんちゃだった頃って……）」

「でもまあこれで分かったでしょ。」指導官が私だからって訓練は楽じゃない”ってね」

「体に良く刻まれました……」

「じゃあ今日は解散、また明日から頑張りましょ」

「……ここは、天国か？」

「ナガレ違うから」

こうして裏ヒバリの地獄のような訓練が終わり、遂に試験日になった。

一辺500cmの正方形型フィールドに、セイギ達がいた。3人共裏ヒバリの地獄訓練がどのような物なのかが分かる程、ボロボロだった。

『それでは、チーム”ケルベロス”の昇格一次試験を開始する。一次試験の内容は、これから発表する”審査官”と相手をし、どちらかが負けを認めるまで戦う事だ。但し15分以内に、武器の使用を禁止、己の力だけで戦ってもらう』

「どんな奴が出て俺達は負けない」

「どんなにボロボロでもしがみついてやる」

「それは、例え私でもか？」

「「「なっ！！」」」

セイギ達の前に現れたのは2足歩行のヘルガーの、紛れもない神崎支部長だった。思わぬ相手に、セイギ達は啞然とした。

「お前らのここ最近の飛躍的上昇に興味を示してな、圧力かけて審査官にしてもらったんだよ」

「でも支部長、現役引退したんじゃ……」



「だからって、デスクトップ作業ばかりじゃ体が鈍る。丁度良い運動だ」

支部長が入ってきた扉の向こう側には、恐らく本命の審査官だったのである。カイルキーが、ボツボツにやられていた。

「……勝てるか？」

「……さあな」

「言っておくが、支部長だからって手を抜くとかふざけた事するなよ。やるなら全力で来い！！」

「うわっ！！」

支部長の凄まじき威圧感に、3人は吹き飛ばされそうになった。

『条件は”3人同時に技を決める”こと。一次試験開始！！』

## EP16：旧時代VS新時代

「どうするの！？支部長って現役時代、ガブリ役500匹の大群に類の軽い傷だけで、しかも武器無しで全滅させたって、噂があるんだよー！」

「いやいや、その時って確かアイロード250匹、ドング3匹、フエンリン2匹って超最悪の状況じゃなかったっけ！？」

「ふざけた事言ってるじゃねえー！」

予期もしなかった対戦相手に、3人は動揺を隠しきれぬ訳がない。しかし、対戦相手の支部長は構わず跳び蹴りをして来た。3人は戸惑いながらも反射的にかわした。

「正式にはセイギの方が正解、ゲンタのは流石に単独じゃあ無理だったからチハルと後1人接近戦タイプの奴と同行した。私を化け物みたいに言っなー！」

「でも確かカルドア支部との合同任務で”化け物”と言われたみたいじゃないですか」

「シャラップー！」

「グハッー！」

自分に対する武勇伝を否定しているものの、ナガレに水を差され、結果的にナガレの顔面に（覚えのないのに）跳び膝蹴りをかました支部長だった。

「でもやっぱり支部長って怖い……」

「攻撃の手を緩めるな!!」

「ぐっ!!」

支部長は今度はゲンタに打撃のラッシュを繰り出す。この御時世に武器無しの体術だけでここまでやれるとは、中々の実力者である。バグ細胞を破壊するのに最も効率的なデバックウェポンを使わずしてバグを殲滅できるとなると、もはや異常レベルである。

「おいおい、防いでばっかだところなるぞ!!」フェイント”!!」

「ウオツ!!」

支部長は上段蹴りの体勢に入った。それを見たゲンタは、とっさに右手で防ごうとした。しかし実際にやって来たのは上段蹴りではなく、上段蹴りを空振ってからローキックだった。それにより足元を奪われたゲンタは転倒、瞬時に受け身を取った為直撃には至らなかった。

「お前ら、まさか今までのが本気じゃないだろうな？全く齒応えがねえぞ」

「支部長が強すぎるんですよ……」

「まさか私のこと、時代遅れの老兵だとか思っていたのか？ふざけんじゃない、バリバリの現役だ」

「いやいや、別にそんな事……」

「まあいい。お前ら、このままだと一次試験落ちたぞ？こんなもんで負けやしないし、そう簡単に降参はしないからな！！」

「ガッ！！」

そう言った後、支部長は間合いを一気に詰め、右拳から放たれた一撃でナガレを宙に浮かせた。

「まだまだあ！！」

「うぐっ！！」

続いて脚力に全開まで力を貯めて跳躍した後、身を翻しながらの回し蹴りを放った。蹴りはナガレの腹部のピンポイントに、めり込む程だった。

「終わりだ!!」

「させるかあ!!」

トドメに右拳に力を貯めて全力のストレートを繰り出そうとした支部長だったが、ナガレは支部長の右腕を掴んで中断させた。

「どりゃあ!!」

「なっ!?!」

そして支部長を、地面に向かって投げ落とした。意外な行動に最初は驚いたものの、すぐに体勢を立て直して足から綺麗に着地した支部長だった。続いてナガレも難なく着地した。

「ナガレ、今の投げは見事だった。頭脳系だと思っていたのに、裏切られた気分だぜ……」

「こう見えて、日々の訓練は怠っていませんから。特に投げに関しては、ですけど」

「大丈夫かナガレ!?!」

「なんとかな。肋一本やられたけど」

「トワイライト支部最強の狂戦士<sup>バーサーカー</sup>」と、伊達に呼ばれてないから

な。手加減は一切しないぞ!!」

「でも……、僕達は貴方に勝ってみせます!!」

「その息だ。さあ、私を楽しませろ!!」

「ワイルドボルト」!!」

「甘い!!」

セイギは右手に電気を集中させながら突進、支部長に接触前に右手を支部長に当てて放電した。支部長は顔を一切歪まず、逆にセイギを蹴り上げた。まさしく”カウンター”だ。

「”影分身”!!」

「数で圧そうてか? しゃらくせえ!!」

ナガレは自分の影から次々と分身を作り上げ始めた。ナガレの分身は、一斉に支部長へと飛び掛っていったが、支部長は分身軍団を蹴りだけで一掃した。

「そいやあ!!」

「”イカサマ”!!」

分身軍団を一掃し終わると同時に、”穴を掘る”で地面から攻めていたゲンタが飛び出してきたが、支部長はそれを利用してゲンタに攻撃した。ゲンタは大きく吹き飛び、直撃を免れるために受け身をとった。

『試験終了まで、残り5分です』

「どうしたあ！？もう終わりかあ！？」

「支部長が、激昂してる……」

「まずいな、時間も相手も両方……」

「このまま一次試験落ちは勘弁だけど……」

まともなダメージを負わせてないまま、残り時間が少なくなってきた。焦りと疲れの色を隠せない3人だが、もつと焦ったのは支部長が全く疲れてない事、むしろ金色のオーラが体から放出していてやる気満々だという事である。

この不利の状況の中、ゲンタが突発的に言った。

「……なあ、久々にアレやるか？」

「アレか。一回警察沙汰になったから正直避けたかったが、もう仕方ないな」

「ハハッ……、じゃあアレといきますか!!」

ゲンタの言ったアレに、ナガレとセイギは賛成した。そして、3人は攻撃体勢に構えた。

「何しうが知らねえが、やっと本気を出してきたみたいだな」

支部長も最初は驚いたが、すぐに同じく構えた。その際、背後の才ーラはより強力に放たれた。

「さあ新世代に行くひよつ子共、陸軍にいた時」ゴッデス・オブ・ヘルセルグ「狂気の女神」と第2の通り名で恐れられたこの私を倒してみな!!」

「「「うおおおおおおお!!」」」

支部長がそう叫んだと同時に、3人は3方向に同時に飛び出した。まず最初に飛び込んできたのは、直線上に來たゲンタだった。

「”神速”!!」

「遅いつ!!」



”神速”のスピードを利用して高速ラッシュを繰り出しているゲンタと、それについて来れる時点でもはや異常な支部長の打撃戦が始まった……と思いきや、

「……からの、”穴を掘る”!!」

「なっ!？」

「”悪の波動”!!」

「チィ!!」

2、3回攻撃を受け止められたゲンタはそのスピードのまま浅い穴を掘り、そこに入って身を屈めた。その背後から、ナガレが放った黒い波動が支部長目掛けて飛んできた。支部長は舌打ち混じりに、飛んできた波動を回し蹴りで一掃した。更に、

「やあ!!」

「セイギイ、てめえ何するんだあ!!」

「うおっと!？」

トドメとしてセイギが右手に電気を貯めた状態で、支部長の左腕に触れた。その行動に支部長は疑問と怒りを覚え、セイギに回し蹴りを放った。セイギは間一髪で避けた。その直後、

「……チツ、ふざけた真似をしてくれる」

「ふざけた真似じゃないです、立派な”電磁波”です」

「一丁前な口を叩きやがって……」

支部長の動きが鈍くなり始めた。”電磁波”による麻痺である。セイギが手に電気を貯めていると、大体”ワイルドボルト”を放ってくるのだが、”ワイルドボルト”は自分の体力を削る諸刃の剣、連発すると体力が保たなくなる。支部長は初めからそれを狙っていたのだが、生憎にも”電磁波”だったので今の支部長は裏切られた気分である。

「……これ位で警察沙汰になったのか？」

「実は小さい頃これの練習をしていた時、運悪く警察に当たっちゃって……」

「警察は俺達を何かと間違えたらしく、手錠振り回して追ってきて……」

「いやー、あん時は怖かった……」

「全く……、馬鹿な警察だな。私なんか派手にバイク乗り回してたら何時の間にか警察沙汰になってんのによ」

「（流石支部長、やってる事が怖い……）」

『残り時間、あと2分30秒です』

「さてと、お前らの本気はを見せてもらった。私は満足だよ。ホラ、さっさと決めちゃいな」

「「「……」」」

支部長はそう言いながら、両手を広げて完全に無防備になったのだ。セイギ達はそんな状態の支部長に攻撃するのを、躊躇していたのだ。

「……おいおい、さっさと攻撃しろよ。ランク上げたいんだろ？心配するな、別に死ぬ訳じゃない」

「「「……」」」

「早く！！さっさと攻撃しろ！！そして昇れ！！てめえ等の栄光は、てめえ等で勝ち取りやがれ！！」

「「「……ハイ！！」」」

支部長の後押しにより、セイギ達は攻撃する事を決意した。セイギは右手に電気を貯め、ナガレは一瞬の内に支部長の背後を捉え、ゲンタは炎を纏った右拳に力を入れ、

「ワイルドボルト”！！」

「不意打ち”！！」

「フレアドライブ”！！」

一斉に放った。部屋中に爆発が起こり、外から中の様子が見えなくなった。

次第に煙が晴れた。晴れた後にいたのは、ボロボロの状態のセイギ達と同じくボロボロの状態の支部長だった。

「……」

「……ハハッ、効いたぜ。ここから反撃……と、行きたいが……」

支部長は黙って睨みつけているセイギ達にそう言い、右足を前に出した。そして、支部長の体は仰向けに崩れ落ちた。

「体が動かねえ……。もう年か、仕方ないな。四十路だもんなあ……」

「……」

「降参だ。このまま上を目指せ、地獄の番犬共……」

「……ハイ」

間もなくセイギ達の体も、崩れ落ちたのだった。

『チーム”ケルベロス”、一次試験合格とする』

イグドラの窟 入口

数日後、セイギ達チーム”ケルベロス”とヒバリの4人は、蒸気があちこちから噴き出ている洞窟の入口に来ていた。

「さて、一次試験合格おめでとう。支部長に勝てたとはね」

「ハイ。……まあ、全治1週間でしたけど」

「もし支部長に一騎当千で勝てたら、ランクにも勝てるわよ」

「マジですか……？」

「ええ。支部長のランクはレジェンドだけど、その中でも一番ランクに近いデバッカーだったのよ」

「なる程……」

「さっ、お喋りはここまでよ」

ヒバリはそう言うと、腰に差してある二丁拳銃を指で取り、回しながら持った。

「二次試験、場所は”イグドラの窟”、目標は”カラドリオ”よ。気合い入れて行きましょう!!」

「ハイ!!」

セイギ達は洞窟の中へと進んで行った。

「あつ、そうそう。間歇泉には気をつけてね。火傷じゃ済まないから」

「マジすか……」

## EP17：テスト開始

### イグドラの窟

蒸気や間歇泉が絶え間なく噴き出る為、入口付近でも洞窟内温度が高い。

「……暑いな」

「そうね、この辺りは温泉地だったもの。特にこの洞窟は温泉の源泉があつたのだから。バグに感染してなければ、私通い詰めたのにな……」

「ですよね……」

「よし、頑張りますか!!」

「（何たるやる気……？）」

セイギ達も洞窟内の暑さに堪えている中、唯一熱耐性のあるゲンタだけはやる気があつた。無理も無い、嘗て此处は炎タイプのポケモンの居住区でもあつたのだからだ。

「グルルルルル……」

「おっ、バグのお出ましたぜ」

「ガブリ……にしては色が赤い。て事は……」

「御名答、亜種こと”ウイルス種”よ」

「僕達”ウイルス種”初めて見るんですけど……」

バグには一般的に知られている”通常種”、属性が変化し通常種より凶暴な”ウイルス種”、見た目も属性も変わり攻撃方法も変わった”禁忌種”の3タイプがある。その中でもウイルス種は、溶岩帯や極寒地等の各地形にに耐えられるように、属性変化したタイプが多い。”イグドラの窟”は炎・地・岩タイプの、熱耐性のあるポケモンの居住区だった故に、此処に現れるバグ及びウイルス種は熱耐性のあるものばかりなのだ。

「それっ!!」

「ギギッ!？」

ヒバリは高温地型ガブリ（以下、炎化ガブリ）に向かって、右手の拳銃を撃った。因みにヒバリの持つ二丁拳銃は、全身を赤くコーティングされている単発式旧型リヴォルバーの物。銃型デバッグウエポンは一発撃つ度にPPを消費するため、使い手はなるべく体術にも特化しておかなければならない。別に強制ではなく、嫌ならPP回復薬を使えばいいだけの事だ。

話を戻して、ヒバリが撃った銃弾は炎化ガブリに命中、一撃ではや



られなかったものの炎化ガブリは後方に退いた。

「せいやぁ!!」

「グギヤア!？」

その内にゲンタの、跳躍してからの振り下ろしが炎化ガブリに命中。炎化ガブリは一撃で倒れた。

「これでも喰らいな!!」

「ガギツ!？」

「それっ!!」

「ゴギヤア!？」

同じ様に、ナガレが射った矢が命中して怯んだ炎化ガブリに、セイギの長槍の突きが命中した。次々とバグは倒され、個体は次々と消滅していくのだった。

「うわっちい!!」

「大丈夫!？」

「悪いな……」

その中で、壁や地面から噴射される蒸気がナガレの右耳に触れたりもした。直撃は免れた為、軽い火傷程度で済んだ。反応に気づいたセイギが、急いでナガレの右耳に火傷薬を塗った。

「セイギ君って、仲間思いなのね」

「あれがアイツの長所ですから」

「あら、良い長所じゃないの」

その光景を見たヒバリがゲンタに向かってそう言い、ゲンタは得意げに答えた。

「さっ、先に行きましょう」

「ハイ」

その後、ヒバリを先頭に洞窟の奥へと進んで行った。

奥に進む程蒸気の噴出率が多くなり、温度も暑くなっていくのだった。そのためゲンタを除く全員が、大量の汗をかくようになった。まさに天然のサウナ状態である。そんな中、ナガレがヒバリに質問した。

「……しかしヒバリさん、可笑しくないですか？」

「……何が？」

「カラドリオは本来熱耐性が全く無いバグなのに、熱耐性のあるバグが巢喰うこの洞窟に現れるという事ですよ」

「確かにそうよね……。私も目を疑ったわよ……」

ナガレの言うとおり、今回の討伐目標であるカラドリオは極寒区域に頻繁に出没する極寒耐性型バグであり、逆に熱耐性は無に等しいのだ。此処イグドラの窟は熱耐性の無いバグが住めるような環境ではないのに、明らかに可笑しい事である。この事に、ヒバリも怪しいと感じていたようだ。

「……もしかしてウイルス種じゃないですか？」

「その考えは無に等しいわね。ウイルス種ならそうと依頼内容に書いてある筈なのに……！！みんな、気をつけて！！」

セイギの予測に否定したヒバリは、前方にリヴォルバーを向けた。その行動に釣られるように、セイギ達も武器を構えた。

「ウゴウゴウゴウゴ……」

「あれは、ドングー!!」

「まさか大型バグが他にもいたとはな!!」

「君達にドングの戦闘経験はある!？」

「前に1度!!でもその時はバグポケモン化した民間人が喰らっていたので……」

「つまり”無い”って訳ね!!私が前に出る!!君達は援護をお願い!!」

現れたのはゴリラ型の大型バグである”ドング”。前に1度セイギ達は戦った事があるのだが、その時はバグポケモン化したサイドンが喰らって強化した時だった為、実質ドングを討伐するのは今回が初めて。それを知ったヒバリは彼等に援護を任せ、自分は前線に飛び出たのだった。

「ウゴガア!!」

「よつと!!」

ヒバリに向かってドングの右ストレートが来たが、ヒバリは難なくかわした。

「それっ!!」

「ウギヤツ!？」

ヒバリはその状態から跳び蹴りをドングの左頬に命中させ、ドングは体勢を立て直す事が出来ずに倒れた。遠距離型武器の使用者とはいえ、ヒバリの種族のコジヨンドは”格闘”タイプ、体術なら得意中の得意である。ドングは今の一撃でかなりダメージを受けたようで、中々起き上がれないようである。

「今よ!!」

「分かりました!!”辻斬り”!!」

「ゴギヤツ!？」

ヒバリの指示に従い、セイギは長槍をX字のように振り上げ、ドングの腹部に傷を付けた。ドングは痛みながらも立ち上がり、両腕に取り付けてあるバズーカ砲から瓦礫弾を数10発放った。

「避けて!!」

「よっつ!!」

「はっ!!」

「せいっ!!」

ヒバリとセイギとナガレは軽快なステップで瓦礫弾を避け続け、ゲンタは避ける所か瓦礫弾を次々と大斧で断ち切っている。

「喰らいやがれ!!」

「ウギヤアアア!？」

そしてゲンタはドングとの間合いを詰め、両腕に取り付けてあるバズーカ砲を斬り落とした。バズーカ砲は両腕から分離されたが、だからと言って傷口から血は噴射しなかった。どうやらバズーカ砲はあくまで両腕のパーツのようで、実際に肉体として血管が通っている訳ではないようだ。それでも十分痛いようだ、ドングは痛みの余り立てなくなった。

「ナガレ君、行くわよ!!」

「ゲンタ任せろ!!」

「分かった!!」

弓とリヴォルバーを構えて向かってゆくナガレとヒバリの指示に従い、ゲンタはドングから後退した。立ち上がるうとするドングとの距離を一気に縮め、ヒバリは跳躍してドングの真上から銃弾を浴び

せた。ヒバリが地面に着地すると同時に

「それでも喰らっとけ!!」

「ウゴ……ゴ……」

ナガレがドングを斬った。今までのダメージが蓄積したドングは完全に倒れ、やがて呼吸が止まった。そしてドングの個体は地面に沈んでゆくように消え、形成していたバグ胞子は辺りに散乱した。

イグドラの窟 中間地点前

「みんな、カラドリオよ……」

「あれが……」

「確かに熱耐性が無さそうだな……」

中間地点のキャンプ前に、今回の討伐対象のバグがいた。空色の羽毛を纏い、爪は鉤爪状に変形、嘴はドリルのような螺旋があり、翼には不気味な眼の模様、頭には氷で出来たであろう冠が付いてある、例えるなら孔雀クジャクと鷺を足したような巨大な怪鳥、カラドリオだった。

中間地点のキャンプ内にバグが侵入する事は不可能な為、カラドリオはキャンプの外を彷徨っていた。その為なのか、セイギ達は近付けずに岩陰に隠れている。

「いい？熱耐性の無いカラドリオが此処に居るのは異常だけど、油断せずに戦うこと。良いわね？」

「「「はい」「」」

「良い返事よ。さあ、テスト開始！！」

ヒバリの合図と共に、セイギ達は岩陰から飛び出した



EP18：侵蝕サレシ稲妻 鱗片（前書き）

狂イ咲ケ、曼珠ノ華ヨ！！

EP18：侵蝕サレシ稲妻 鱗片

「ピキユイイイイン!!」

カラドリオもセイギ達に気付いたようで、翼を孔雀のように広げてそこから発生した氷弾を数十発放った。熱地帯の為に氷弾は溶けてしまつて形が變形してしまつたが、それでも当たつた岩を削る程の威力はある。セイギ達は氷弾を次々とかわしてカラドリオに近づく。

「ピキユイイイン!!」

「痛つてえな!!」

「ピキイ!？」

カラドリオは近付いてきたゲンタを払いのけるかのように左翼で殴るが、ゲンタもまたカラドリオを思いきり殴った。カラドリオは奇声を上げて倒れそうになつたものの、何とか持ちこたえた。

「みんな!! 射程開けて!!」

「はいっ!!」

「ピキユッ!？」

ヒバリのリヴォルバーから銃弾が放たれ、銃弾は直線状に風を切つてカラドリオに命中した。よくある話であるが、遠距離型のデバツグウェポンの使い手は常に前方にいる味方の事を気にしなければならぬ。銃弾は全種類特殊加工されており、決して味方には被害を受けない仕組みになっている。だからと言って適当に撃つたら味方に誤射してしまい、信頼性が落ちる。だから遠距離型デバツグウェポンの使い手は、前方の味方を気にかけて銃撃しなければならないのだ。

「ピキヤアアアアア!!」

「ぐっ!!」

「調子狂うぜ……!!」

「みつ、みんな!!大丈夫よ!!」

カラドリオは口を大きく開け、甲高い奇声を発した。あまりの煩さにナガレ達は耳を塞ぎ、攻撃はおろか行動すら出来なかった。

「ピキユアア!!」

「グアツ!!」

「ガツ!!」

「キヤア!？」

「キュアアアア!！」

その瞬間を狙ったかのように、カラドリオは氷弾を放った。ナガレ達は壊す所か避けきれず、氷弾を喰らって後方に吹っ飛んだ。カラドリオはナガレ達を馬鹿にするかのように勇ましく鳴き、低空飛行で急接近して来た。

「……んの手羽先野郎!！」

「ゲンタ君!！」

此処までやられっぱなしだった為、頭に血が上ったゲンタは急接近して来るカラドリオの冠を掴んで受け止めた。カラドリオは一度動揺したものの、構わずゲンタを弾き飛ばそうとした。ゲンタも全身に力を入れて必死に耐えていたのだが、

「グアアッ!！」

「ゲンタ君!！」

「アイツ、自分の身も考えなしに……!！」

最終的には弾き飛ばされてしまった。相性は悪いとはいえ、やはり

氷弾のダメージが大きかったようだ。その上先程のドング戦から間も空かない内にカラドリオに遭遇したのだから、疲労も大きい。ゲンタはそのまま壁に激突するかと思っただら、

「……………」火炎車”っ！！」

「ピギヤッ！？」

体勢を立て直して壁に足を着け、壁を蹴って跳んだ。そのまま火炎車を発動し、カラドリオに攻撃した。怯んでいる内にゲンタは着地し、大斧を拾い上げて構えた。

「回復弾撃つわよ！！」

「ありがとうございます！！行きましよう！！」

何とか立ち上がったヒバリに回復弾を撃たれ、回復したゲンタとナガレは武器を構えて突っ込んで行く

筈だっ

「ピギヤアアアアア!？」

「「「なっ!？」」」

突然彼等の間を一筋の稲妻が通り、カラドリオは奇声を上げながら胸元から血を噴射した。続いてカラドリオの体に、次々と突かれたような傷が出来上がっていった。そしてカラドリオは突然吹き飛ばされ、壁に激突した。吹き飛ばされ再、カラドリオの冠は半分ほど砕けた。

突然の出来事にナガレ達は啞然とした。一体誰が……そう思っていると、本人の姿が海外の映画でよく見る、透明人間が姿を表すかのように見えてきた。

「……セイギ？」

「お前、何時の間に!？」

「さっきから見えないと思っていたら……」

その本人とは、セイギだった。確かにカラドリオとの戦闘開始から、セイギの姿は確認出来なかった。まさか透明人間化していたとは、誰も思い付かない。そもそも透明人間化機能なんて、デバッグウェ

ポンにはない。

疑問に思った彼等はセイギを問い詰めたが、セイギは黙ったままである。

「何とか言え……!!」

ゲンタはセイギの顔を見て言おうとしたが、彼の顔を見て驚愕した。疑問に思ったナガレとヒバリも、セイギの顔を見て驚愕した。

今のセイギの眼がレントラー本来の眼でなく、悪魔のような真紅の眼に変化していたからだ。更に目元には、黒い三角傷が痛々しく付いてあったのだ。

「『これがバグだと？軟弱過ぎて話にならない!!』」

「ピギヤッ!!ピギヤアアアアア!!」

驚愕しているナガレ達を押し分け、セイギはカドリオの顔を踏みつけながら言い放った。何度も何度も踏みつけ、踏んでいた所が充血して血が流れてもなおセイギは踏みつけるのを止めなかった。カドリオは反撃しようとも対抗出来ず、やられっぱなしだった。

「おい止めるセイギ!!」

あまりにもやり過ぎだと言わんばかりに、ナガレはセイギを止めに入った。しかし、

「『こんなバグ一匹にも劣る下素が！！気安く触れるな！！』」

「ガッ！！」

セイギはナガレを殴った。あの仲間思いでお人好しにも程があるセイギが、仲間であるナガレを”下素”と罵り殴るとは、誰も思ってもいなかった。セイギの行動にゲンタは怒り、彼の胸倉を掴んだ。

「セイギ！！何するんだ！？」

「『聞こえなかったのか、その薄汚い手を離せ下素共が』」

「お前、下素だなんて……！！」

「『下素を下素と言って何が悪い？本当の事だろうが、あんな軟弱なバグ一匹に苦戦するなんて、下素意外に何と言えば良いんだよ？なあ？』」

「2人共喧嘩は止めて！！キャア！！」

とうとうヒバリも割り込むようになったが、セイギはヒバリの右腕を掴み、強く握りながら捻ろうとした。



「痛い！！離して！！」

「『早く離せ。離さないなら、折るぞ？』」

「てめえ……！！」

セイギの行動にゲンタは遂にブチ切れ、右腕を上げて殴ろうとした。しかし、意外な事が起きた。セイギ自ら、ヒバリの手を離れたのだ。ヒバリはしゃがみ込み、右腕をさすり始めた。この行動に、3人は驚いた。

「……ごめん、ごめんなさい……」

「セイ……ギ……？」

セイギが、涙を流しながら謝り始めた。さっきまでの極悪非道だったセイギとは全く違い、何時ものセイギだったのだ。眼も元に戻っており、目元の傷も無くなっていた。ゲンタは思わずセイギを離れた。

「……」

「セイギ……！」

「待てよ……！」

セイギは涙を流したまま、落ちていた長槍を拾い、入口方面に去って行った。

「セイギ……」

「アイツ……一体何が……？」

「ピギッ、ピギルル……」

「みんな、カラドリオが……！」

カラドリオは起き上がり、奥地の方へと飛んで行った。

ナガレ達はセイギの事を心配していたが、カラドリオの方を追う事にした。

EP18：侵蝕サレシ稲妻 鱗片（後書き）

何とか書けました。実は今回の展開、後に重要になるのでお忘れなく

今回のセイギの行動で、今後彼をどう思つかはお任せします

因みに前書きの”曼珠ノ華”とは”曼珠沙華”、簡単に言えば彼岸花の事です

個人的にセイギは曼珠沙華が似合う気が……

## EP19：未遂と励ましと変異

### イグドラの窟 入口

セイギは胸に手を当て、苦しそうに呼吸をしながら泣いていた。自分が仲間を傷つけた……彼にとってその事はとても悲しく、辛く、自分を責め立てたくなる怒りを感じる。

自分自身を蝕んでいるバグを抑える事が出来ず、肉体はおろか精神までバグに染まってしまった。彼にとって、恐怖以外の何者でもない。何れ自分の意思はバグに埋められ、例えば友や仲間を傷つたとしても痛みを感じず、逆に快感としか考えられなくなる。その日が来る事を考えると、セイギは恐怖を感じた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……こんな物さえ無ければっ!!」

セイギは自身の右腕に向かって、左手で持った長槍を突き立てようとした。彼は自身の汚れた右腕を、切り落とそうと計らっていたのだ。しかし左手は恐怖と抗うかのように震え、なかなか定まらなかった。

「こんな物さえ無ければっ!! 僕はっ……!!」

セイギは右腕を切り落とす覚悟を決めていたのだが、左手がいうことを聞かない。結局セイギは長槍を下ろし、崩れるように座り込ん

だ。そして、再び泣き始めるのだった。

「……」

泣いているセイギの元に、ツカサが黙りながらやって来た。どうやら任務でこの近辺に来ていたらしく、彼の情報端末には”任務一時中断”と表記されていた。ツカサは両剣を地面に刺し、セイギの傍に座り、彼の肩に優しく手を乗せた。セイギは気付いていたようだが、構わず泣き続けるのだった。

暫くしてセイギの泣き声が落ち着いた後、ツカサが話しかけた。

「……気が済みましたか？」

「……」

「……どうかされましたか？」

「……みんなを、ナガレ達を傷つけたんです」

「……そうですか」

セイギは泣きながら答え、ツカサは余計な事も言わず、ただただ聞いていた。

「僕……馬鹿ですよ。」仲間を傷つける奴は許さない」とか言っておいて、自分で傷つけて。本当、何言ってるんだか……」

「……でも、セイギさんの性格はこの時代に相応しいと思いますよ」

「ツカサさん……？」

「僕は周りとはともかく馬鹿共からも”化け物”呼ばわりされていたから、来る日も来る日も孤独だったんですよ。たまに支部長さんとも任務に出た事もありましたが、支部長さんは僕以上に化け物並の強さで……」

「ですよ、ハハッ……」

「少なくともセイギさん達の事、僕は大切な仲間だと思っていますよ。仲間の大切さを教えてくれましたからね」

「……」

ツカサは立ち上がり、黒刀を地面から抜き取って翳した。太陽の光が当たり、黒刀は輝いた。

「この剣はですね、適合者との相性が悪いと適合者を喰らうんです。前の適合者も結局喰らわれたみたいでして、みんな恐れるデバッグウェポンなんです。コイツと僕の適合率は98%、相性は良いとはいえ危険なんです。それを楽々と扱えるから、僕は化け物と呼ばれているんです」

「そうなんですか……」

「僕にはもう、大切な人はいない。だから化け物と呼ばれたって構わない。」

でも貴方は違う、貴方には大切な友達がいる。だから貴方は化け物になってはいけない。大切な友達の前から居なくなつてはいけない、彼等を見捨ててはいけない。貴方の居場所は彼等であり、彼等の居場所は貴方でもあるんだから……」

この時セイギは、不思議な感覚がした。ツカサの姿に、自分と同じレントラーの姿が重なったような錯覚を見たのだ。

ツカサは黒刀を下ろし、セイギに助言した。

「今貴方がやるべき事は1つ、大切な仲間を守る事、それだけではないですか？」

「……はい！！ツカサさんのお陰で立ち直る事が出来ました、ありがとうございます」

「……頑張つて下さいね」

セイギはツカサに礼を言つて頭を下げ、長槍を構えて洞窟内に再び入って行った。それを見送ったツカサは、

「……彼と僕は同じ存在だと言うのに、何故彼ばかりに試練が訪れる？運命とは本当に残酷な物だ……」

そう呟きながら、白刀を地面から抜き取ってその場を後にした。

イグドラの窟 最深部付近

「”跳び膝蹴り”っ！！」

「グギヤッ！？」

ヒバリは炎化ガブリに跳び膝蹴りを喰らわせた。炎化ガブリが怯んでいる内に、左手のリヴォルバーから銃弾が放たれ、炎化ガブリを貫いた。

「喰らえっ！！」

「ビギギッ！！」

ゲンタは宙を舞う、全身が赤いアイロードのウィルス種”高温地型アイロード（以下、炎化アイロード）”を大斧で2つにした。因みに炎化アイロードは毒鱗粉を出さない代わりに、溶岩を出してくるので意外と厄介である。



「それっ!!」

ナガレも後方から、矢を数本放ってバグを次々と射抜くのだった。こうして彼等の行く手を阻むバグは、簡単に倒されていくのだった。バグの全滅を確認した彼等は、カラドリオが逃げたであろう最深部へと向かって行った。

### イグドラの窟 マグマ・ホール【奥地】

イグドラの窟の最深部は、マグマに囲まれた小島であった。このマグマにより、蒸気や間歇泉が熱せられ勢いよく噴射するのだ。

当然熱く、ゲンタを除く2人が大汗をかき、水筒に入れていたスポーツドリンクを口に使っていた。彼等の目の前には、狂気状態のセイギと熱さにやられたカラドリオがいた。しかし立っているのがやつとの状態である。

「一気に行くわよ!!」

「はい!!」

「……待つて!! 様子がおかしいわ!!」

ナガレとゲンタはカラドリオに攻撃しようとしたが、ヒバリによって止められた。一体何故……そう思っていたら、その答えは直ぐに分かった。

カラドリオが、環境に合わせて変化しているのだった。水色の羽毛は朱色に変わり、砕けた氷の冠も炎の冠になり、カラドリオは氷の怪鳥からウィルス種である炎の怪鳥へと変化した。高温地型カラドリオ（以下、炎化カラドリオ）、とでも言えば良いだろう。

ナガレ達は啞然とした。おまけに炎化カラドリオは体力をある程度回復しており、活性化もしているのだ。

「こんな事って、あるのか？」

「……0・5%の確率でな」

「みんな！！気をつけて！！」

「クジャアアアア！！」

## EP20：気のせい

カラドリオが高温地型バグ、所謂ウイルス種になった事は、ナガレ達を啞然とさせた。通常種のバグがウイルス種になる事はある話だが、だからと言ってその瞬間を間近で見たのだから、平然としていられず誰だって啞然とする。

炎化カラドリオは先程氷弾を放った要領で、今度は火炎弾を発射してきた。しかも不運な事に、時速200km以上のスピードで飛んできたのだ。

「グッ!!」

「チッ!!」

「ウッ!!」

「クジャアアアア!!」

ナガレ達はバックステップで避けたものの、火炎弾は地面にぶつかったと同時に爆発し、彼等は爆風をもろに喰らった。幸いな事に、3人共マグマには落ちなかった。まあゲンタは炎タイプなので、彼だけはマグマに落ちても平気ではあるのだが。

話を戻す、炎化カラドリオは追い討ちをするかのように鳴き始めた。因みに先程と鳴き声が違うように思われるが、同じ系統のバグでも通常種とウイルス種と禁忌種とでは鳴き声は全く違うのである。

再び話を戻す、その鳴き声によって天井の岩がいくつか崩れ落ちてきた。ナガレ達は耳を塞ぎながら岩を避け、その岩陰にそれぞれ隠れた。

「なんて奴なんだ……」

「あんなにやられてたのにピンピンしてやがる……」

「最悪、コレ外さないと駄目かしらね……?」

「いえいえ!! 外さなくて大丈夫です!!」

「そうですよ!! そんな事したら余計戦い難くなりますよ!？」

ヒバリがそう言って眼鏡に手を掛けたので、ナガレとゲンタは猛反論した。確かにこんな状況で裏ヒバリなんか発動したら、炎化カラドリオはおるかこの洞窟すら崩壊するような気が……。とにかく、ヒバリは仕方なく眼鏡から手を離れた。

「痛っ……!!」

「ヒバリさん!？」

それと同時に、ヒバリの右腕に激痛が走った。恐らく先程の狂気セイギに捻られた痛みであろう。右手はリヴォルバーが握られない程

痛められ、先程から右腕を動かしていない。もしここを炎化カラドリオにやられたら、二度と右腕は動かせなくなるだろう。

「ヒバリさんは無茶をしないで下さい。此処は俺達に……」

「でも、貴方達もボロボロじゃないの……」

「俺達は大丈夫です……。元から丈夫なんで」

「それはお前だけだな」

ナガレとゲンタはそう言っで、岩陰から出た。それに気付いた炎化カラドリオは再び鳴き、2人を威嚇するのだった。

「ナガレ、あの手羽先どうやって料理してやるか？」

「任せる。焼き鳥でも何でもすればいいさ」

「了解！」

「クジャアアアッ!!」

しかし2人は威嚇にも怯えず、逆に冗談を言い合っていた。そしてゲンタが大斧を構え、炎化カラドリオに突っ込んで行った。炎化カラドリオもまた、低空飛行で突っ込んで行った。

「せいやあっ！！」

「クジャアッ！！」

ゲンタと炎化カラドリオは先程と同じ様に取っ組み合いを始めた。そして互いに動かない。猪突猛進、実にゲンタらしい性格かつスタイルだが、先程も同じような事をして結局は力負けした。勝てるのか……誰もがそう思ったが、

「クジャジャッ！？」

「一発喰らいなっ！！」

今度はゲンタが勝った。そして右拳を強く握り締め、炎化カラドリオを力一杯殴りつけた。炎化カラドリオは体勢を整えられず、そのまま地面に叩きつけられた。

「ナガレ！！」

「お前のその性格、治した方が良くぞ？命がいくつあっても足りないからな」

「煩え！！」

ゲンタに呼ばれてナガレが性格について注意しながら出てきた。そして弓に矢を1本かけた。

「猟つてのは普通、射撃武器でやるもんだ。主にライフル等の射程が長い銃器や弓でな」

「今の時代、弓使うか？」

「バーカ、昔の時代だ」

「クジャアアアッ!!」

「安心しろ。外すつもりなんか……無いからなっ!!」

ナガレはそう言い、矢を放った。矢は勢いの良いスピードで宙を切り、炎化カラドリオに飛んでいった。炎化カラドリオはそれを焼き払おうと、炎を吐いた。しかしナガレは、焦らず冷静に呟いた。

「なあゲンタ、ミラージュアローって知っているか？」

「ミラージュアロー？」

「……」 D - A D V E N T ” が開発した弓使用者の為の特殊矢でな、使用者の思考に合わせて色々と出来るんだよ。分裂とか炎耐性とかな」

「クジャッ!？」

そう言った途端、矢は数十本にまで増えた。炎化カラドリオは驚き、炎を吐くのを止めた。そして矢は全部、炎化カラドリオに命中し、炎化カラドリオは倒れた。

「……凄いな」

「まあな」

「流石ね……!!」

ナガレとゲンタはそう言い、互いの拳を合わせた。ヒバリは安心しながらその光景を眺めていた……が

「2人共、後ろ!!」

「えっ？」

「はいつ？」

「クジャアアアッ!!」



倒れていた炎化カドリオが起き上がり、2人を払うように吹き飛ばした。2人は岩に体をぶつけ、炎化カドリオに向かって悪態を付けながら言った。

「なんて…しぶとい手羽先なんだよ……」

「……拙いな、俺達」

「クジャアアアア!!」

炎化カドリオは巨大な火炎弾を、2人に向かって放った。避ける程のスタミナは残っておらず、2人はただ喰らうだけであった……が、火炎弾は突然落ちた雷によって打ち消された。

「クジャツ!?!」

「……雷!?!」

「こんな所に、雷……!?!」

「まさか……!?!」

そして2人の前に、2本の長槍を持った電気ポケモンが現れた。彼等にとって、そのポケモンが誰なのかは分かっていた。

「……………」

「セイギ……………」

「お前……………」

「……………ヒバリさん、2人を頼みます」

「わっ、分かったわ……………」

セイギは長槍を回転させ、炎化カドリオに突っ込んで行った。炎化カドリオは構わず火炎弾を数発作り、セイギに向けて放った。しかしセイギは2本の長槍を振るい、火炎弾を斬り消して行った。

「やあっ！！」

「クジャツ！？」

セイギは炎化カドリオを斬りつけた。炎化カドリオは仕返しとばかりに攻撃するもセイギの猛攻撃が上手で、反撃出来ずに耐えるのが精一杯である。

「”電磁波”っ！！」

「ジャッ!？」

セイギは炎化カラドリオに、電気を溜めた右手を放った。炎化カラドリオは麻痺状態になり、思う通りに動けなくなった。その間にセイギは高く跳躍し、長槍の刃を下に向けて炎化カラドリオの頭上を狙った。

「みんなは……僕が守るんだ!!」

そう言った途端、長槍の数が2本から6本になり、追加された4本は最初の2本の周りに集中するように纏まった。

「でやああ!!」

「クジャアアッ!!」

長槍は炎化カラドリオに突き刺さった。そして炎化カラドリオは完全に倒れ、体は消滅し、形成していたバグ胞子は飛び散った。

イグドラの窟 入口

「……ええ。チーム”ケルベロス”は、無事カラドリオの討伐に成功、これから帰還します」

ヒバリは端末を通じて連絡をしていた。連絡を終えたヒバリは、ナガレ達を誉めながら話した。

「みんなお疲れ様、結果は後に通告されるから楽しみにしててね」  
「分かりました」

「これで俺達、ランク上がるな」

「いや、まだ分からないだろ。でもまあ、これでバグ化した人々を多く救える事が……」

「あらっ、知らないの？」

「「はい？」」

「デバッグの許可率が増えるの、シルバーランクからよ？ カッパーじゃまだ未熟だから降りてないんだけど……」

「「ナンデイスツテ!？」」

「驚きのあまりオンドウル語になった!？」

3人が話をしている中、セイギは輪に入らないで右腕を眺めていた。バグに感染していなければ、彼等を傷つけないで済んでいられた筈だ……そう思っていながら眺めていた。

「さあ帰還しましょ」

「あつ、俺達もう少しだけ居ます」

「分かったわ、なるべく早くね」

ヒバリは残ると言ったナガレ達を置いて、1人帰還して行った。ヒバリが帰還していくのを確認したナガレ達は、セイギの元へやって来た。

「セイギ、まさかとは思うけど……」

「……」

「気のせい……だよな？」

「うつ、うん。気のせいだよ……」

「……そつ、そうだよな!!あのセイギがナガレを殴るなんて有り得ないよな!!あゝ良かった……」

「そうだよ。僕はナガレ達を殴ったりなんかしないって……」

「だよな、セイギがあんな事するなんて無いもんな」

「よし、帰ろうぜ!!」

セイギ達はホッとした感じで帰還して行った。しかし、未だにセイギはナガレを殴った事を悔やみ、自分に怒りを感じているのだった。こんな日々は何度もあるけど、今思えばこの日々を大事にしなければいけないと思った。もし僕の体を蝕んでいる物が僕を完全に蝕んだ時、この在り来たりで安らかな日々を、2度と過ごす事なんて出来やしない。だから今は、彼等を見捨ててはいけない……

某所

「ヒツヒツ……、ヒギヤアアアアアアアアアア!!」

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「助けっ……グギヤア!!」

『ガツガツガツガツ……』

「……いけない子、命を食べちゃうなんて。もう食べちゃ駄目て言っただけなのに。」

「ごめんなさい。輪廻の輪に乗って新しい命になると良いわ……。天に登るか地に堕ちるか、人となるか雑魚となるか、前世を忘れるのよ。永遠に、永遠に、永遠に……」

『グゴラアアアア!!』

3th Deback 昇格試験 END AND TO BE  
COUNTED

## EP20：気のせい（後書き）

次回は特別編をやります

## EX1:ピギンズナイト・ストーリー（前書き）

後書きにアンケート（？）がありますので、宜しかったら答えて下さい



## EX1：ビギンズナイト・ストーリー

D - A D V E N T トワイライト支部

「……ふう」

コンコン

「……誰だ？」

『受付嬢の四条チハルとシルバーランクの天美ヒバリです』

「入れ」

トワイライト支部の支部長室に、タブネの”四条チハル”とコジンドの”天美ヒバリ”の2人がやって来た。トワイライト支部長であるヘルガーの”神崎支部長”が、丁度デスクトップワークを終えた頃合だった。

「支部長、お怪我の方は大丈夫なのですか？」

「心配するな。あれ位の傷なんて慣れてる」

「凄いですね」

「お前らも私みたいに鍛えれば自然と慣れる。やるか？やるなら付き合っぞ」

「「御遠慮します」」

3人は部屋にある来客用の椅子に座り、話をしていたのだった。それはまるで、親しい間柄のような感覚であった。

話している内に、チハルがある事を話した。

「支部長は本当に昔から変わりませんね」

「まっ、まあな」

「5歳から陸軍に所属して15歳でデバッカーになり、今では支部長にまで登りつめたんですよ。受付嬢に強制異動された今でも私の憧れです!!」

「おいおい、そういうのはよせよ」

目を輝かせながら支部長を尊敬しているチハルに対し、支部長は冷静に対応したのだった。様子を伺っていたヒバリも、口を開いた。

「そう言えば、支部長が陸軍に所属していた時バグの大群が防衛ラインに現れて大規模な防衛戦が行われ、それを気にD・ADVENTに入隊したと聞いたのですけど……」

「……ああそうだ。当時D・ADVENTからデバッカーが3人来てたな。そいつらの影響で、この世界に入った訳だ」

「その時の話を是非!!」

「……長くなるぞ？」

「構いません！！」

「ヒバリは？」

「私も大丈夫です」

「……あれは吹雪の強い日でな……」

支部長は話し初めた。自分がこの”生き残るか死ぬかの世界”に入  
った訳を……

西暦2035年。当時神崎は14歳で陸軍大尉、あまりの飛躍的階  
級特進に自衛隊すら目を丸くする程である。前線に出るとどんな敵  
でも叩きのめし、更に自他共に厳しい鬼教官的存在であつた為、部  
下はともかく上官ですら”狂気の女神”ゴッテス・オブ・ベルセルクと恐れられていた程だつた。

そんなある日の出来事だつた。神崎達は”カルドア防衛ライン”に  
いた。カルドアはかつて大規模な噴火によつて崩れた火山が、カル  
デラ湖になったことで住人が集まり繁栄した、バグ感染されていな  
い居住区である。因みに”そのまんまやないか！！”なんてツッコ  
ミしたらギガスキャンの刑だぞ（うぜえ

話を戻す。北方角である為に雪が激しく降り、15mを越す積雪や  
猛吹雪なんか、住民は氷タイプじゃなくても馴れている。そのため  
か、此処に暮らす一般人やカルドア支部のデバツカーはタイプ不問

で寒さに強い。

「陸軍の皆さん！！此方に来て暖を取って下さい！！」

神崎達陸軍所属のポケモン達は、カルドア支部所属の軍人の指示に従い、当時の防衛ラインの要であった塔の中へと入って行った。余談であるが、神崎が陸軍だった当時デバッカーは表向きに知らされておらず、主にバグの処理は陸軍等の自衛隊が行っている物とされていた。

「……と言う訳で、今回の作戦はこの”カルドア防衛ライン”に襲撃予定のバグの殲滅です。幸いな事にフェンリルクラスのバグはならず、調査した結果、大型バグはドング・カラドリオ・マッドスコルピオのみとなっております……」

「……」

「……」

「ちゃんとしてられないのね、これもナナミのせい……」

塔の中にある大広間には、神崎達を初めとする軍に所属しているポケモン達が集められていた。彼等の前で作戦内容について話しているドナイトスは、スラスラと話しながら何故か額に青筋を浮かばせていた。つまり怒っている。何故怒っているのかと言うと、原因は

大広間の出入り口付近の壁に寄りかかっている3人のポケモンだった。1人は黄緑の風船ガムを膨らませながら、1人はヤンキー座りしながら同じくピンクの風船ガムを膨らませ、1人は自分を責めている、所謂”やる気ない”状態である。

「しかし、今回の作戦は大規模になりかねないという事で、”D-ADVENT”カルドア支部の優秀なデバッカーチームを……！！」

話を続けていたドダイトスはついにキレてしまい、机を叩いて3人を指差した。それと同時に、神崎達は3人を見た。そしてほぼ同時に溜め息を吐いた。

「……つそこのクソガキ共！！ちゃんと話を聞きやがれ！！」

「……ああ、ちゃんと聞いてますよつと」

「要はバグを潰せばいいんだろ？んなもん簡単だつつの」

「折角生まれてきた命を殺すのね、悪い子……」

「クソツ！！何でこんなガキ共があ……インフィニティランクのデバッカーなんだよ……！？」

ドダイトスは彼等に悪態を付けながらも、話を続けたのだった。作戦会議が終わり準備に移っていた際、神崎は彼等に話しかけた。

「私は陸軍大尉の神崎と申します。失礼ですがあなた方は……？」

「えっ、俺ら？」

「はい」

「俺らは”D - A D V E N T”カルドア支部 インフィニティ ランクのデバッカー、  
”グレイヴ”だけど……。因みに俺はソラト、志村ソラトという。  
お前、下の名前は……？」

「すみませんが、下の名前は教えられません」

「そうか」

神崎が話しかけた、先程風船ガムを膨らませていたヤナツキー、志村ソラトは彼女の質問に答えた。すると彼の背後から、ヤンキー座りしながら風船ガムを膨らませていたバオツキーが、ソラトを押し退けるかのように話しかけた。

「あんたが噂の”ゴッテス・オブ・ヘルセルク 狂気の女神”か！？」

「えっ、ええ……」

「おっと忘れてた。俺は禍木リクヤ、後はコイツと同じだ」

「おいリクヤ、押し退けて謝りもしないのか！？」

「はいはいごめんなさいと……」

「謝る気無いだろ？」

ソラトとリクヤが漫才みたいな会話をし始めたので、神崎はとりあえずスルーして、ソラトに自分を責めていたヒヤッキーの事を尋ねた。

「そちらの方は……？」

「ん？……ああ、アイツは美輪ナナミ。彼女も俺達の仲間だ」

「……貴方、陸軍の人？」

「はっ、はい。そうですが何か……？」

「……貴方も殺すんでしょ？生まれたての命を」

「なっ……！？」

「……軍人なんて誰だつてそう。命をぞんざいにして、簡単に殺すんだもの。嫌い、軍人なんか大嫌い。いつそ消えてしまえば良いわ、軍人なんて……」

神崎は彼女、ナナミの発言に茫然とした。こんな事を言われたのは初めてであるからだ。そこへ2人がフォローに回った。

「ナナミ、それ俺達にも言える事だぞ？」

「すまない、ナナミは何時もあだから……」

「そうですか……」

「お前がそう思うのはまあ仕方無いけど、アイツ等だって俺達ポケモンを殺すんだぞ？だから仕方なくアイツ等を殺すしかないんだ。分かったか？」

「うん、うん……」

「神崎大尉、そろそろ出撃しろとの命令が……」

「分かった。ではまた後程……」

神崎は彼等と別れ、防衛ラインへと向かって行った。後に彼女はこの3人が自分よりも遥かに上の実力であるという事実を知ることになるとは、彼女を含め誰も予想しなかった……

## カルドア防衛ライン

既に防衛ラインは、戦場と化していた。圧倒的なバグの多さに、ポケモン達は次々とやられていったが、ポケモン達も負けじと武器で対抗し、何とか互角に繰り広げている。その中でも



「おらよっ!!」

「グギヤアッ!!」

神崎は一際目立っており、素手でドング等の大型バグを次々と倒していくのだった。神崎は周りの状況を見て叫んだ。

「もっと気合いを入れろ!!こんな所でくだばるんじゃない!!」

「イエッサー!!オラオラオラア!!」

「グギヤギャッ!？」

神崎の一喝によって軍人達は本気を出し始め、多くの小型バグを潰していった。その様子を塔の中で見ていたドダイトスは

「うっ、噂に聞いていたが……、まさかあれ程とはな……」

冷や汗をかいていた。しかし、

『こちら第一ライン、たった今通過され……ギヤアッ!!』

「チッ、なんて事だ……」

「クソッ！！準備はまだか！？早くしろ！！」

第一ラインが通過された、それによって誰もが焦りを覚えた。ドダイトスは怒りを覚えながら、部下に命令をした。何か仕出かすかのように……

その頃上空を飛んでいるヘリでは

「おゝ、派手にやってるねえ！！こりや楽しみだな」

「命を食べちゃう悪い子達……」

「よしみんな、行くぞ！！」

ソラト達が自分達のデバッグウエポンを構え、ヘリから飛び降りた。ソラトの手には後に誰かが使うであろう、悪魔の羽を模したロングブレードが、リクヤの手には黒い怪物の顔を模した装甲が取り付けられたハンマーが、ナナミの手には黒い怪物の顔を模した銃身のブラスト砲が、それぞれの持ち手部分に彫られた、”神喰ライ”という文字が完全に見えなくなる部分を持ちながらだ。

「ふっ！！」

「ガビッ！？」

「！！！！？」

ソラトがマッドスコルピオの頭上目掛けて落ちてきて、マッドスコルピオの頭を叩き割った事で、戦場の空気は一変した。

「はあっ!!」

「グギャギャッ!」

「ピリュ!」

「ウギッ!」

「ピキュアッ!」

ソラトは防衛ライン中を駆け回りながら、目の前にいるバグを次々と一撃で死体に変えていった。斬ったガブリをアイロードにぶつけて怯んでいるうちに斬り、その勢いで倒したドングを踏み台にし、高い所にいるカラドリオを一撃で地に落とす、その豪快で大胆なやり方を、今まで見てきたであろうか？

「潰れなっ!!」

「ガビギャッ!」

リクヤもソラトと同じように駆け回り、ハンマーで次々とバグを潰

していった。バグの攻撃を受け流し、自らの鉄拳で怯ませている内に潰し、その反動で宙を舞って別のバグを叩き落とし、更にはバグを打ち上げて別のバグにぶつける。彼のスタイルは”猪突猛進”に実に相応しいやり方だった。

『アァー!!』

「グギユギャ!？」

「ふふふふっ……」

ナナミのブラスト砲が謎の悲鳴を上げながら銃弾を放ち、銃弾は4つに分散して1つずつバグに当たった。ナナミは不適に笑い、銃弾を次々と放っていった。そしてその餌食になったバグは、次々と闇に引き寄せられるように散っていくのであった。それでもナナミはただただ、不適に笑い続けるだけである。

「おいおい、洒落になんねえぞ……!!」

「グギャツ!？」

彼等の圧倒的戦力に、神崎は啞然としながらもバグを素手で倒していくのだった。いやいやあんたも洒落にならん強さだよ……誰もがツッコんだ

その頃塔の中では、ドダイトスがキレてた

「クソッ！！我々よりもあんなクソガキ共の方が上手だとも言うのか！？解せぬ、全く解せぬ！！」

「隊長落ち着いて下さい」

「……まあいい、我々が開発したバグ殲滅用爆弾を爆発させ、バグもろともあのクソガキ共を片付けて」

「ヒギヤア！？」

実は今回の任務で、ドダイトスはある計画を企てていた。彼はバク用に開発した浄化爆弾を爆発させ、防衛ラインに襲撃予定のバグを殲滅するつもりだったのだが、ソラト達デバッカーも参加する事を知らされていなかった。元々デバッカーを快く思っていなかった彼であり、このままでは全て彼等にいいところ取りされてしまう。そう考え、この爆弾で奴らも殲滅しようと謀っていた。

そんな中1匹のアイロードが侵入し、そのドダイトスと話をしていたポケモンを喰らい殺した。

「クッ！！調子に乗るな化け物共っ！！」

ドダイトスはアイロードに向かって、マシンガンの銃口を向けた。

一方、ソラト達がいくら倒してもバグは増え続けるのであった。

「……ああもうー！ーうじゃうじゃと沸きやがる……！ー！」

「解せぬ……」

「どうする？このままだと俺達、潰されるぞ」

「アイツ等余裕だな……」

リクヤはバグに悪態を付け、ナナミが不機嫌になり、ソラトは危機感を感じていた。そんな中、神崎はガブリを倒しながら3人を眺めていた。

「潰される？俺達が簡単に潰されると思うのかよ？」

「……だな、最後の最後まで足掻いてやるよ！ー！」

「また、赤い血の華を咲かせるのね……」

しかし3人は開き直り、再び多くのバグを倒していくのであった。

その頃、ドダイトスはふらふらと歩きながら塔のある部屋にやって来た。彼はアイロードを倒したのだが、攻撃を喰らったようで彼方此方から血が流れていた。ドダイトスは部屋にあるマイクを使い、戦場にいる軍人に伝えた。

「総員、 退避せよ!!」

その通信は軍人達に伝えられ、彼等は急いでヘリコプターに乗って防衛ラインを後にしていった。置いて行かれたソラト達と、通信を聞いていなかった神崎は焦った。

「おい!! 何で逃げるんだよ!!」

「まさか、俺達を見捨てるとも言うのか!!」

「酷い、なんて酷いの? 悪い子……!!」

「何をするつもりなんですか!!」

『この一帯に……バグ殲滅爆弾を爆発させる!!』

「そんな事したら、この防衛ラインは荒れ地になりますよ!!」

『……』

「……チッ!! 通信切りやがったか!!」

「おいどうした!」

「この一帯に殲滅爆弾を爆発させ、バグを一斉殲滅するようです！  
！皆さんも避難を！！」

「爆弾だつて！？何考えてんだアイツは！？」

「救いようもない悪い子なのね……」

神崎はドダイトスと通信をし、彼が何を企んでいるのかを聞いた。  
それを聞いた神崎は更に問い詰めようとするものの、ドダイトスは  
通信を切った。神崎は怒り混じりにソラト達に避難するよう伝えた。  
ソラト達はドダイトスに悪態を付けながら撤退し始めた。

その頃、ドダイトスは手元のコンピュータを動かし、あるスイッチ  
を取り出した。それを手にして、ドダイトスは笑みを浮かべながら  
押した。

「消え失せろ、化け物共め！！」

「残念でしたあ！！」



「!？」

ドダイトスは振り向いた直後、血を噴き出しながら倒れていった。彼の胸には挟み斬られた痕が残され、大量出血により彼は死んだ。

「……ハッハッハッ、ハッハッハッハッハッハッ！」

犯人は高笑いしながら、音も出さずその場を後にした。そしてこの場所は、爆発によって消え去った。

塔は爆発し、周囲にいたバグは全て消え失せ、神崎達は逃げ切れなかった。爆発が治まり、塔があった場所を中心とした半径10kmの大地が抉れ、巨大なクレーターが出来上がった。

「……ぷはーっ!!死ぬかと思った!!」

「あーあ、派手に爆発しやがって。後処理どうするんだよ？」

「救いようもない悪い子、地獄の釜で煮え立つと良いわ……」

「……」

クレーター内の瓦礫の中から、ソラト達は這い出てきた。リクヤは

息を荒げ、ソラトは溜め息を吐き、ナナミは元凶を呪い、神崎は黙っていた。彼女にとっては信じがたい事実である、自分よりも上の奴がいると言う……

「仕方ない、こっぴどく怒られて来ますか」

「だな」

「酷い参事、これもナナミのせい……」

「……待て」

「あ？てか、生きてたのか？」

神崎は思わず、帰還しようとするソラト達を止め、彼等に言い放った。

「私は……、絶対あんた達を超えてみせる。だから、今回は私の負けだ……」

「……そんな事か？別に競いあつてた訳じゃないだろうったく？」

「俺達と決着着きたいんだったら、お前もデバツカーになれよ」

「デバツカー……」

「ふふつ。軍人は嫌いだけど、貴方は嫌いじゃないわ。また会いま

しょう……」

「……という訳だ。私はあの3人に惹かれてこの世界に入った」

「なる程」

「そうなんですか……」

支部長は話し終えた後、暗い顔をして再び話始めるのだった。

「それから5年経って、私がシルバランクになり始めた頃だった。アイツ等が任務中に行方不明になり、任務に行っていた場所に残されていたのはアイツ等のデバッグウェポンのみ。幾ら搜索しても見つかりはおろか情報すら無く、最終的に死亡と断定された。そして私は、アイツ等に言った事を成し遂げられずに現役引退。凄い悔しかったさ……」

「はあ……」

「でも確か、美輪ナナミは……」

「ああ。最後に見つかったナナミのデバッグウェポンの記録から、彼女は生きている可能性がある。だから私は彼女を連れて帰る、それが今の私に出来る事だ……」

支部長はそう言い、コーヒーを飲んだ。その後、彼女達は暫く話をしていた。

某所

1人の少女が虚ろな顔で、曼珠沙華の花びらを1枚1枚千切っていた。そんな彼女の後ろには、不気味に光る赤い目をした怪物がいた。彼女は花びらを千切り終えると、怪物が吠える中で悲しく呟いた。

「眠らせて……、誰か　　を眠らせて……。深い深い、闇の底まで……」

『グゴラアアアアア!!』

EX1: ビギンズナイト・ストーリー　END

## EX1：ピギンズナイト・ストーリー（後書き）

個人的な事なのですが、現在この作品のイメージ曲を応募します。

個人的にも考えているのですが、一応皆さんの意見も聞きたいので……。答える場合は”曲名”と”歌っている人”を感想からでも構いませんので気軽にお願いします

因みに一件も無い場合、イメージ曲はアイドルになりますので

## 設定集？

### 『キャラ紹介』

名前：ヒバリ（本名：天美ヒバリ）

種族：コジヨンド

性別：

性格：二重人格者

所属：デバツカー トワイライト支部

ランク：シルバー

武器：リヴォルバー（単発式）×2

技：跳び膝蹴り

???

???

???

2035年5月31日生誕

2050年7月30日陸軍入隊。最終段階は軍曹

2055年6月1日陸軍脱退。同時に”D-ADVENT”入隊

名前：ソラト（本名：志村ソラト）【故人】

種族：ヤナツキ

性別：

性格：冷静沈着

所属：デバツカー カルドア支部

ランク（最終段階）：インフィニティ

武器：ロングブレード（現ツカサの黒刀）

技：不明

2030年”D-ADVENT”入隊。禍木リクヤ、美輪ナナミと共にチーム結成

2034年初のチームでのインフィニティランク昇格デバツカーに2040年任務中に行方不明、デバツグウェポンのみ発見された為死亡と断定

【データが古い為、一部の情報が欠けてます】

名前：リクヤ（本名：禍木リクヤ）【故人】

種族：バオツキー

性別：

性格：猪突猛進

所属：デバツカー カルドア支部

ランク（最終段階）：インフィニティ

武器：ハンマー

技：不明

2030年”D-ADVENT”入隊。志村ソラト、美輪ナナミと共にチーム結成

2034年初のチームでのインフィニティランク昇格デバツカーに2040年任務中に行方不明、デバツグウェポンのみ発見された為死亡と断定

【データが古い為、一部の情報が欠けてます】

名前：ナナミ（本名：美輪ナナミ）【不明】

種族：ヒヤツキー

性別：

性格：陰湿かつ自虐的

所属：デバツカー カルドア支部

ランク（最終段階）：インフィニティ

武器：プラスト砲

技：不明

2030年”D-ADVENT”入隊。志村ソラト、禍木リクヤと共にチーム結成

2034年初のチームでのインフィニティランク昇格デバツカーに  
2040年任務中に行方不明、2045年にデバツグウェポンのみ  
発見された為死亡と断定

2060年デバツグウェポンの情報から、生存が確認。しかし調査  
は難航している為、生存の可能性すら揺らいている状況

【データが古い為、一部の情報が欠けてます。また、最後の情報に  
関してはデバツカー外秘になっております】

#### 『用語解説・設定』

・バグ 宇宙から飛来してきた胞子細胞型ウイルス同士が集まり、  
個体を形成した物の総称。一部のバグには思考があり、喋る物がある

・デバツグウェポン バグ細胞を死滅させるプログラムを持つ武器。  
剣や銃だけでなく、盾や一部の玩具等にもこれらの分類に入る

・デバツカー デバツグウェポンを扱う許可が降りているポケモン  
の総称

・D-ADVENT デバツカーを統一する政府下の組織。数十の  
支部がある

・入隊の年齢制限 陸軍は5歳から、デバツカーは10歳から入隊  
可能。但し13歳未満のデバツカーは前線に出る事を禁じられている  
・単価 ギル、1ギル＝1円とする。デバツカーに関しては、キー  
ライセンスに電子マネーのようにしてなっている



『区域設定』

・イグドラの窟

炎・岩・地面ポケモンの巣窟だった洞窟。至る所から高温の蒸気や間歇泉が勢いよく噴き出ている。奥地はマグマに囲まれており、通称”マグマ・ホール”と呼ばれている。此処に現れるバグの殆どは、熱耐性のある高温地型が殆ど

・カルドア防衛ライン

1年間の3/4を猛吹雪に包まれている、カルドア支部所有の防衛ライン。”Dタワー”という、防衛ラインの要となる塔があったが、現在は跡形も無くなっている。大規模な攻防戦により、現在はそれによって出来た巨大なクレーターが当時のままに残されている

『バグ設定』

・カラドリオ

クジャク

孔雀と鷺を模した巨大な怪鳥型バグ。氷弾を発射したり怪音波による攻撃を得意とする。また頭の冠は、カラドリオのプライドの高さを象徴するが為に、冠が壊されると怒りを露わにする。通常種は熱に弱い。亜種は高温地型。

## EP21：事の始まり（前書き）

実は今回、ある方とコラボしています

そして今まで謎だったあのキャラが本格的に関わってきます

## EP21：事の始まり

### イザヴェルの遺跡

ある1人の伝説ポケモンが住む遺跡。例外なくこの遺跡もバグ汚染されているが、そのポケモンを護る事を使命とした3人のポケモンが、バグといった外敵から主君を護る為に日夜戦っている。彼らの使う武器はデバグウェポンでもない普通の武器なのに、バグは次々と倒されているのだ。

「……」

遺跡の奥地にある寝殿の扉の前に、1人のコバルオンが仁王立ちで立っていた。彼の両腰には、カイロスの頭の缺の内の1本を模した蒼い曲剣が1本ずつ差してあった。彼は目を瞑り、自らの精神を集中していたのだった。すると、

「よおクストウス!!」

「……何しに來たセクリス？お前の持ち場は此処じゃ無いだろ？」

「んだよ、素っ気ないなあ番人さんよお」

巨大なモーニングスターを担いだ、セクリスと呼ばれたテラキオンが東からやって來た。彼はコバルオンの事をクストウスと呼び、親

しいように接した。しかし対するクストウスが素っ気なく流したので、逆に苛立った。

「黙れ。俺は……お前とは違う」

「……そりゃそうだよな。俺とディアは迎撃かつ防衛、お前は寝殿にいる王子様の護衛だもんな。責任の重大差はお前の方が上……」

「お前等に俺の気持ちは分からないだろ？」

「まあな。かつたるい事ばっか考えているお前の気持ちなんか分かりやしない」

「……言いたい事はそれだけか？」

「残念だけど私からはあるわよ」

「おっ、ディア」

クストウスとセクリスの2人が話していると、薔薇のブローチが取り付けられたレイピアを持っているブリジオンがやって来た。口調や声の高さからして女性であろう。セクリスは親しいように接するも、クストウスは相変わらず素っ気なく接した。

「貴方って何時も冷たいわねえ。女性に嫌われるわよ？」

「……恋愛なんか元から興味ない。俺は使命さえ果たせばそれで

良い」

「あーあ、これだからお堅い人は苦手なのよね。つまらないからセクリス、持ち場に戻りましょう」

「あつ？ああ、またな」

「ふん！！」

ディアはセクリスを連れて持ち場に戻ろうとした。その様子をクストウスは、相変わらず冷たい態度で見ていた。すると

「おいおい、折角お出迎えしてくれると思っていたのによ……」

「！！！！？」

彼等の前に黒コートを着たハッサムが現れた。彼は被っていたフードを脱ぎ、彼等に向かってにやけながら言い放った。セクリスとディアは驚いたが、クストウスは態度を変えずにハッサムに向かって冷たく言い放った。

「……誰だ貴様は？」

「通りすがりの悪役……とでも言えば良いのかな？」

「ほう、自白するとはな……」

「貴方、此処がどこだか分かっているの？」

「分かってるさ。てか、分からないでこんな所来る奴なんか馬鹿だろ？」

ハッサムはにやけ顔で彼等を馬鹿にするかのような言い方で話した。その言い方に、セクリスとディアは怒りを覚えた。そんな2人を通り越し、クストウスは腰の双曲剣を抜いて構えた。それを見たハッサムはにやけながら、コートから弾倉が付いた大剣を抜き取って構えた。

「此処に来たという事は、些か王子が目的なんだろう？」

「その通り！やっぱり頭が回る奴は良いねえ……だが、ぶっ殺してやるよ……！」

クストウスとハッサムは刃を交えた……

カッパ・ランク宿舎

「……よし、とりあえず荷物は全部移動したな」

「お疲れ様」

「疲れた……」

セイギ達はカッパーランクの宿舎にいた。前回の昇格試験だが、ヒバリによってセイギが狂気状態になったという事を知らされていないらしく、結果的に合格して見事カッパーランクに昇格したのだ。という事で、セイギ達は引越しているのだった。

「……今日からカッパーランクだな」

「カッパーランクになったという事は、より強くないとだな」

「……じゃあ訓練場で特訓しようか」

「おう!!」

「ああ」

セイギ達は一息ついた所で、特訓しに訓練場に向かって行った。しかし、その道中でチハルに呼び止められたのだった。

「あつ、ケルベロスの皆さん丁度良かった……!!」

「チハルさん？」

「緊急任務です!!今まで反応がなかった”イザヴェルの遺跡”に大型のバグ反応が確認されました!!調査と殲滅をお願いできませんか!？」

「えっ！？……ってか、他の人は？」

「他の皆さんは任務に出ています、今空いているのはケルベロスさんとジロウさんだけです」

「ジロウさん？」

「シルバーランクのデバツカー何ですけど……」

「はっ、俺様が邪魔者みたいな言い方だな！！」

チハルが戸惑っていると、1人のワルビアルがやって来た。セイギ達は彼を見て、みんな同じ事を考えた。”嫌なタイプの先輩キタ！！”と……

「おいおい誤射女、俺様にそういう重大な任務をこんな下の奴らと一緒に行けと言うのか？」

「でっでも、今空いているのはジロウさんとケルベロスの皆さんしか……」

「はっ！！……こんな下の奴らと一緒にの任務なんて御免だなっ！！」

「下って、幾ら先輩でも酷いです！！」

「あゝあん！？お前らみたいな下の奴らなんか眼中にもねえんだよ！！……ヴァーカ！！」



ワルビアル、ジロウは一方的にセイギ達を馬鹿にしていた。幾ら先輩とはいえ、セイギ達は怒りを覚えているのであった。

「とにかく皆さん、調査と殲滅に向かって下さい!!」

「チツ!!こんな奴らとの任務は気が進まないが仕方ない、行くぞお前等!!」

「……」

「……まあ、御覧の通りプライドが高くて気が難しい方なんです。だから皆さん彼を……」

「……ですよね……」

セイギ達は既に向かって行ったジロウを追いかけて、遺跡に向かって行くのであった。

## イザヴェルの遺跡 入口

遺跡の入口に、1人のルカリオが立っていた。そのルカリオは182cmと標準よりも背が高く、赤黒いコートを着ていた。またそのコートの左胸には”black angel”と刻まれた黒い短銃が、右胸には”white devil”と刻まれた白い短銃がホルスターに入っていた。更に背中には、”Dinsleif”と刻まれた

160cmを越す半月型の片刃のツーハンドレッドソードが留めてあり、剣の腹の中央部に埋め込まれてある眼のような赤い宝石が不気味に光っていた。

「さうて、お仕事と行きますか!!」

そのルカリオは笑っていた。まるでこれから起こる戦いを楽しむかのように……

## EP21：事の始まり（後書き）

今回は『f e n r i r 魂の乱用者を喰らう者』より、主人公のソル君に来てもらいました。第4章の期間だけですが、ちゃんと表現出来るように頑張ります

後、ジロウは俗に言う”良くいる後輩いびりの先輩”なので気にしないで下さい

因みにテーマ曲の募集は今週いっぱいまでとします

## EP22：一般人と対立と結託（前書き）

まず始めに、ハボックさんすみませんでした

## EP22：一般人と対立と結託

### イザヴェルの遺跡 入口

「おいお前等！！俺様が仕方無く手伝ってやるんだからな、足引つ張るんじゃないぞ！！」

「わかりました……」

「ああん？何だその返事は！？俺様と一緒にの任務が嫌なのかよ！？だったら帰って別の任務に行け！！」

「別にそんな訳じゃ……」

「チツ！！何でお前らみたいな俺様の足元にも及ばない下の奴らと任務に出なきゃならないんだよ！！」

「（殺す、アイツ後で殺す……！！）」

セイギ達とジロウは早速仲が悪かった。先輩だからって幾らなんでも言い過ぎているジロウに、セイギ達は怒りを覚えている。ゲンタに関しては殺意すら感じている状態だ。

因みにジロウの持つデバッグウェポンは、初心者でも扱える大剣を強化した物で、一振りですら岩をも容易に断ち切れる程の物だった。とはいえ、市販品を強化した武器と言う事を忘れてはならない。はい此処重要だから赤線引いとく事……失礼しました。

とは言え幾ら仲が悪くても組んでしまつたら仕方ない、ちやつちやと終わらしてコイツ（等）と別れたい、そう考えたセイギ達は任務を開始する為に奥に向かおうとした。すると、

「ジロウさん、あれ……」

「ああん？……あれは一般人か？」

「いや、あんなに武装してますよ？一般人にしては物騒では？」

「あんなデバッグウエポン初めて見ましたけど……」

彼等は、仁王立ちしているあのルカリオを見かけた。セイギ達は彼が一般人と認識しているも、一般人には必要ない武装をしているため、そのルカリオが一般人なのか認識に悩んでいた。

「避難勧告出しますか？」

「俺様がやるからいい、お前等は見ている」

「「「（やつぱりイヤな先輩だなあ……）」」」

「おいそこのお前！！」

「「「（やつぱり乱暴な言い方だ……）」」」

「ん？俺の事か？」

ジロウはセイギ達が思っていた通りに乱暴な口調のままでルカリオに話しかけた。そんな事も気にせずルカリオは普通に話した。

「此処は一般人の来る所じゃないんでね、立ち去ってくれないか？」

「悪いけど、俺は一般人じゃあないんだが？」

「じゃあ同業者か。何処のデバツカーだ？此処はトワイライト支部管轄の地区だ、勝手に他地区の奴が来られても困るんだよ」

「デバツカー？……ああ、聞いた事あるな。残念だが俺はデバツカーじゃない、ただの便利屋だ」

「便利屋？そんな奴が此処に何のようだ？」

「仕事だ仕事、便利屋が仕事して悪いか？」

「……ああもう煩え！！とにかく邪魔だから消えろ！！」

「……（やりやがったあの馬鹿先輩！！）」「」「」

ルカリオの話に痺れを切らしたジロウが、威嚇とばかりに大剣を振り上げた。それを見たセイギ達は全員して同じ事を考えてツツコンだ。しかし威嚇のほずが、

「……ほう、俺に喧嘩を売ろうってか。良い度胸だな!!」

「ふぎやつ!?!」

圧倒的な誤解を招いてしまった。結果的にルカリオはジロウの顔を回し蹴った。ジロウは吹っ飛んで近くの岩場に体をぶつけた。

「凄っ……」

「てかアイツがチハルさんの言ってたバグか!?!」

「でもあんなタイプのバグ見たこと無いよ!?!」

「とっ、とにかく迎撃しないと!!」

セイギ達は呆然とするも、そのルカリオに向かって構えた。ルカリオは頭を掻きながら溜め息を付き

「ワルビアルはともかく、なんか勘違いされてるような気がするな。……まあ俺も普通じゃないから仕方無いか……っ」と

背中の手ハンデットソードを片手で抜いて構えた。

「とりあえず誤解を解かないとな……!!」



「それっ!!」

「ふん!!」

セイギは素早く距離を詰めて跳躍し、長槍を振るった。ルカリオは片手のまま、大剣で楽々と受け止めた。そしてそのまま、肉眼では捉える事すら不可能な程の異常スピードでの剣劇が始まった。辺りに散らばる火花の量が凄まじく、剣劇の強さがどこことなく伝わってくる。

「背中ががら空きだ!!」

「残念でしたっ!!」

剣劇中のルカリオの背後を狙い、ナガレが矢を射った。しかしルカリオは左手でコートの左胸に締まってある黒い銃を抜き、そのまま器用に矢を撃った。

「どりゃあ!!」

「おらっ!!」

同時にゲンタが”神速”を使い、ルカリオとの距離を詰めて右拳に力を込めた。それに気づいたルカリオは、大剣でセイギを払った後

に右足で受け止め、回し蹴りの要領でゲンタを地面に叩きつけた。

「”ワイルドボルト”！！」

「”シャドークロー”！！」

電気を溜めたセイギの右手が、ルカリオに密着するように当たった。しかし電気が流れる前に、ルカリオがシャドークローで払った。セイギは吹き飛ばされそうになったものの、何とか持ちこたえた。ルカリオはそのまま追撃するように近づいたが、突然止まった。何故なら

「……………！！」

「！！いつの間に……………！！？」

セイギが白い銃を向けていたからだ。ルカリオはコートの右胸を確認するも、そこに白い銃は無かった。つまりルカリオの白い銃は、今セイギが持っていた。彼は焦りながらセイギに説得し始めた。

「お前、その銃は普通じゃねえぞ、下手したらお前の腕吹き飛ぶぞ！！」

「っ！！！！」

ルカリオの静止を振り切り、セイギは銃を撃った。銃弾は近くの岩を貫通する程の物だった。セイギはそのまま片手で撃ち続け、ルカリオは何とか避けるのだった。

「なんて奴だ、ホワイトデビルを使っても何ともならないだなんて……!!」

「降参して下さい、そうすればもう危害は加えませんし銃をお返しします」

「くっ!!仕方ない!!」

ルカリオは黒い銃をセイギに向かって撃ち始めた。セイギもまた避けながら、ホワイトデビルという名前の白い銃を再び撃ち始めた。2つの銃から放たれた銃弾がぶつかり合い、それで発生した風圧によって2人は吹き飛ばされた。セイギはその反動でホワイトデビルを手放してしまう。

「がはっ!!」

「セイギ!!クソッ!!何なんだコイツは……!!?」

「あんなバグ、今まで発見されなかったぞ!!」

「ぐっ……、待て!!お前ら勘違いしてるようだ」

「グオオオオツ!!」

ルカリオが何か言おうとした途端、2匹のガブリが襲いかかってきた。しかし、一瞬の内にガブリは消え去った。ルカリオとセイギが瞬時に倒したのだ。

「バグじゃないんですか!？」

「ああ。俺はソル・ネファステウリス。便利屋”fennir”の事務長だ」

「(フェンリルってバグにもいるよな?)」

「(名前が偶然似たような物だろ?)」

「主に悪魔とかそういう奴を殲滅するのが俺達の仕事だからな。この遺跡には、俺の知っている悪魔に似た波動が感じられるから来てみたら、あんたらに勘違いされるわ銃を奪われるわで大変だ……」

「勘違いしてすみませんでした……」

「いやいや、土下座までしなくて良いから」

セイギ達はそのルカリオ、ソルから色々聞いた後、とりあえず土下座して謝ったのだった。

「しかし、まさか俺の銃使っても平気な奴初めて見た。17kgもあるのに……」

「どつりで重い訳でしたよ……」

「いやゝすまんすまん。こっちも久々に骨のある戦いで興奮した。悪魔なんか弱っちい奴ばっかだもんなぁ!!」

「はあ……」

ソルは色々話した後、立ち上がって提案した。

「どうだ？この遺跡、一緒に進まないか？」

「えっ、良いんですか!？」

「まあな。それにあのワルビアルのびてるし……」

ソルの言う通り、ジロウは完全にのびていた。最も嫌っていたので、セイギ達にはどうでも良いみたいのようだが。

「じゃあ……宜しく御願います、ソルさん」

「いやっ、別に”さん”付けなくて良いから」

セイギ達とソルは、遺跡の奥へと向かって行った。

EP22：一般人と対立と結託（後書き）

ゲンタ「こうして見ると、セイギが異常に見えてくるのだが」

作者「気のせいだ」

## EP23：狂気の双刀

イザヴェルの遺跡

「ヒヤッハア！！無駄無駄無駄あ！！」

「グギヤギヤギヤ！？」

「ちよっ、凄っ……………！！」

ソルは無双状態だった。襲ってくるバグをツーハンドトソードの”ダインスレイブ”を使って一瞬で蹴散らし、次々とバグを無に還していた。セイギ達は啞然とし、そして悟った。”コイツ敵に回してはいけない奴だ”と……

「俺だつて悪魔共を狩ってるんだ、これ位できて当たり前だろ？」

「はっ、はあ……………（悪魔も御愁傷様だなあ）」

「はっ！！」

「グギヤ！？」

「喰らええ！！」

「ピルッ！？」



セイギとソルが話している裏で、ナガレは的確にバグを射抜いており、ゲンタは大斧を振り下ろしてバグを倒していた。それを見たソルは、セイギに話した。

「あのグラエナとウインディ、良い波動を感じるじゃないか」

「波動？……ああ、ルカリオ種の特殊能力ですよ。直感で波動を感じ取ることが出来る、確か二番目に個人でインフィニティランクになったデバツカーになったのも……」

「インフィニティランク？」

「デバツカーの中でも最高ランクに相当するデバツカーなんです。どんなに熟練のデバツカーでも使いこなせない最狂のデバツグウェポン”神器”を扱える許可が降りているのです。でも今までのインフィニティランクのデバツカーは8人、その内死者行方不明者は……8人」

「つまり呪われたデバツカー……か」

「そうですね。まあ殆どは武器に捕食されたみたいです。神器は大変強力なんですけど、武器自身のバグ消滅プログラムが使用者の体を蝕み、プログラム分解酵素を定期的に打ち込まない限り、最終的にプログラムによって消滅される。神器を拒んでも危険な任務詰めめいずれ職業病で死んでしまう。だから今現在、インフィニティランク志願者は0なんです」

「ふうん……」

「……って話反れちゃいましたね。僕にはそのような特殊能力はあ

りませんから、俄いむかには信じられません。でも、たった今信じました」

「……ありがとうな。さて、後何体倒せば良い？」

「そうですね……、とりあえず道中のバグ全部倒して下さい」

「お安い御用。てか、その方が得意なんだぜヒヤッハア！！」

「ピルギヤッ！？」

ソルはセイギと話し終えた後、”神速”を使ったのかかなりの速度でバグを潰し始めたのだった。

「（……やっぱりあの人は敵に回してはいけないな）」

「痛っ！！何処射ってやがるナガレ！！」

「悪い、ミスった」

セイギが呆然としている中で、コミカルに喧嘩をしているナガレとゲンタだった。……理由？ナガレが射った矢が誤ってまたゲンタの尻に刺さったからである。まあナガレ自身に悪意があってやった訳では無いので、許してやって下さい。

イザヴェルの遺跡 寝殿入口【中間地点】

「何だこりゃあ……？」

「既に何かが暴れた形跡が……」

「つてあれ、誰か倒れてますよ!？」

「助けないと!!」

寢殿の入口は、杜撰な状態になっていた。地面の彼方此方は抉れ、木々は斬られて倒れており、寢殿の壁には斬り傷の痕が残され、扉は破壊されていた。その扉の前には、親衛隊の1人のクストウスが倒れていた。セイギ達は彼に近付き、介抱し始めた。

「大丈夫ですか!？今回復薬を……!!」

「……くな」

「!!お前等今すぐ離れ」

「王子に……近付くな!!」

クストウスの様子がおかしい事にいち早く気づいたソルが警告しようとした途端、ナガレが吹っ飛んだ。ナガレは近くの岩に激突、そのまま戦闘不能になった。

「うらぁ!!」

「がつー!!」

そしてそのままクストウスは、ゲンタに強力な回し蹴りを喰らわせた。ゲンタはナガレと同じように吹き飛び、斜線上の壁に激突して同じく戦闘不能となった。

「ナガレ!! ゲンタ!!」

「王子に……、近付かせはしない!!」

「セイギ!! まさかアイツ!!」

「いえ、バグコアが感知しません!! 恐らく我を忘れているようです!!」

「くっ、厄介だな!! とにかく来るぞ!!」

「うらぁ!!」

クストウスは双剣を持った後素早く近付き、滅多斬りを始めた。その動きは途轍とてつもなく速く、セイギとソルは防ぐだけで精一杯だった。

「はっ、速い!!」

「クソっ!! 一方的だな!!」

「シザークロス”!!”」

クストウスは追撃に双剣の斬撃をX状にして放った。セイギ達はなんとか避けたが、斬撃を受けた岩は砕け散った。

「だったら……!!喰らえ!!」

セイギは1本の長槍でクストウスに、星を作るように5回斬撃を放った。クストウスは怯み、後退りをするのだった。

「黒崎流・流れ星……」

「（何処かで聞いたような技と技名だな……）」

「効かん、効かんぞおおおおおおお!!」

「orz」

「げっ、元気出せよ。凄かったぞあのオリ技……」

何故か”決めてやったぜ……”と言わんばかりの顔をして技名を言ったセイギに、ソルは個人的な感想を心の中で思った。しかしクストウスには大して効いておらず、セイギは落ち込んだ。因みにあえて言っておきますが、あれはオリ技ではないので悪しからず。ただセイギが命名しただけの斬撃です。

さておきクストウスは双剣を合体させ、大鋏状にして切りかかった。大鋏の威力は凄まじく、切られた岩が粉々になる程だった。

「あつぶねえ物使いやがったぜ……」

「折角、折角3日間飲まず食わずで練習したのに……ウウッ」

「ほれ、元気出す！」

「喰われる愚か者共お！！」

再起不能になったセイギを立ち直らせているソルに、クストウスの大鋏が襲いかかった。ソルは片手で持ったダインスレイブで大鋏を受け止め、もう片方の手でクストウスの顔面を殴った。

「セイギ、気絶には峰打ちか電気が有効だ！！」

「ふえ？……ああ、分かりました！」

「死ねえ！！」

ソルは漸く再起動したセイギにホワイトデビルを渡し、セイギはホワイトデビルを逆手に持ってクストウスに近付いた。クストウスは向かってくるセイギに、大鋏を開いて切る準備をした。セイギが大鋏の中に入った時、クストウスは力強く閉じた。だがセイギはしや

がみ込み、そのまま低い体勢でクストウスに接近した。

「”ワイルドボルト”!!」

「ガアッ!？」

「悪足掻き、終了です!」

セイギは右手に溜めた電気をクストウスに放った。相性は悪いとは言え、その攻撃でクストウスは大袂を手離してしまう。その隙にセイギはホワイトデビルの柄でクストウスを殴り倒し、彼を気絶に追いやった。

「グラア!!」

「空気読まないバグだなコノヤロウ!!」

「グギヤア!!」

その頃ソルは、この参事を嗅ぎ付けてやって来たKYなガブリにキレて、神速を使ってダースレイブでガブリを斬り刻んだ。

「……ッハ!!」

「起きたか？」

「誰だ貴様等は！？先程の仲間か！？仲間なら……」

「待て待て落ち着け！！俺達は此処の調査に来たんだ」

クストウスは目を覚まし、看病していたソルに敵意を剥き出しにしていた。ソルは何とか宥め、事情を説明した。その裏で、セイギは復活したナガレとゲンタの怪我の治療をしていた。

「……大型バグ？そんな物、この辺りでは見かけなかったぞ？」

「えっ！？でも確かに反応したんです！！」

「……そうだ此処で休んでいる暇は無い！！奴が王子と接触する前に止めなければ……グッ！！」

クストウスは立ち上がり、破壊された扉の中に入って行こうとするも、先程の傷が癒えてないらしく、痛みのあまり跪くのだった。

「あまり動くな、傷口が」

「触るな！！これ位の傷……、王子に何か起きるよりはマシだ……！！！」



「お前……」

「俺は、使命さえ果たせればそれで良い……。俺の命も惜しくない……!!」

「……チエスト」

「ガッ!？」

「「「ナニヤツテンダアンタ!!!!?」」」

ソルを振り切り、自らの命を犠牲にしてまで王子を護りに寝殿へと向かおうとするクストウスに、ソルは峰打ち（手刀）をした。クストウスは再び気絶し、セイギ達はツツコんだ。続いてソルは、クストウスを近くの辛うじて無事だった木に縛り付けた。

「これで大丈夫……で、この先に何かありそうだな」

「大型バグの反応もこの先にあります」

「よっしゃあ、行くか!!」

「うん!!」

「ああ」

「りょーかい!!」

セイギ達は寢殿へ入って行った。

### EP23：狂気の双刀（後書き）

セイギ自信満々のあの技に関してですが、某忍者戦隊の黒忍者の個人技そのものです。最近これを見て凄い感動しました……

テーマ曲は今回で締め切りとさせて貰います。あまりにも素晴らしい曲ばかりで甲乙付けづらかったので、

全部採用します!!

あと個人的に推薦した曲を含めたその結果

OPテーマ：Naked arms（T・M・Revolution）

EDテーマ：ドッペルゲンガー（椎名林檎）

第4章テーマ曲：ロゴスなきワールド

こんな風になりました。個人的に推薦したのはOPですすみません。とにかく、テーマ曲を考えて下さった御2方、本当にありがとうございます。

（あくまでイメージなので、ファンの方々はお願いですから殴らないで下さい。全力で土下座しますのぞ）

## EP24：黒コートの男

イザヴェルの遺跡 謁見室【奥地】

「ハアッ、ハアッ……クソウー！」

「……生きてる、セクリス？」

「ああ、しかし……なんて奴だ」

「おいおい、親衛隊ならもう少し足掻けよ。つまないだる」

セクリスとディアは苦戦していた。自分達はボロボロだというのに、目の前にいるハッサムは全くの無傷、それどころか黒コートにすら傷付けられなかった。

「おいガキ、あまり親衛隊なめんなよ……！！！」

「ガキ？俺27なんですけどー！！こっ見えて飲酒喫煙可能なんですけどー！？」

「さっきからム力つくわねあんた……！！はあっ！！」

「おっとー！！」

「キャアー！！」

ハッサムの馬鹿にするような言い方に腹を立てたディアは、レイピアを構えて突進した。ハッサムは大剣でレイピアを受け止め、左手でディアを殴った。

「ディア！！……てめえ！！」

「おっ、まさか恋人だったりするの？だがそれがどうした？」

「喰らいやがれえ！！」

セクリスはモーニングスターを振り下ろした。ハッサムは後方回避で避けたものの、モーニングスターの破壊力は地面を抉る程の凄まじいだった。セクリスはそのままハッサムに向かって突き出した。

「全く……、頑固な伝説ポケモンさんだねえ。こっぴうのは好きじゃないんだよ！！」

「があ！！」

ハッサムは大剣の柄についてあるトリガーを倒し、弾倉を回してセクリスに攻撃した。セクリスはモーニングスターで受け止めたものの、そのまま地面に叩きつけられた。

「セクリス！！」

「ぐっ、アイツは化け物かよ……!!」

「化け物？褒め言葉だよありがとぅ！でももう飽きたからさ、バ  
イバィー!!」

ハッサムは不適な笑みを浮かべながらそう言い、ただ睨みつけるこ  
としか出来ない伝説ポケモン2人に近付いて行くのだった。

同時刻 イザヴェルの遺跡 寝殿内

「……（ガクガクブルブル）」

「うっわぁ、G並にウザッたい……」

「勘弁してくれ……、勤勉な奴は苦手なんだよ……」

「貴様等……、よほど剣の錆になりたいようだな……!!」

セイギはもはや呆れ、ナガレとゲンタは共に抱き合って怯え、ソル  
は目頭を押さえていた。何故ならクストウスが、縛られてある木を  
引っこ抜いてまでやって来たようで、今ソルに掴みかかっている。  
と言っても、実際は彼の左頬スレスレに壁を突き抜ける程の蹴りを  
していたという……。とりあえず彼の拘束を解き、事情説明した結  
果、仕方なくクストウスと同行する事になったセイギ達だった。

「中の様子はお前が詳しいんだろ、しっかり案内しろよ」

「黙れ、俺に命令して良いのは王子だけだ」

「はいはいっと……」

「所で、先程仰っていた”奴”って誰ですか？」

セイギは未だにソルと仲の悪いクストウスに質問した。クストウスは奥歯が砕ける程奥歯を噛み、額に青筋を浮かばせ、近くの壁に突き抜ける程の鉄拳をして乱暴に言い放った。

「黒いコートを来たハッサムだ！！アイツ他人を馬鹿にするかのようない方しくない癖に、俺達親衛隊よりも遥かに戦闘に慣れているみたいでな！！ああもう思い出ただけで腹が立ってきた！！」

「……（ガクガクブルブル）」

「あのっ、ナガレとゲンタが（先程の）トラウマで怯えているのであまり驚かすような事は止めて下さい！！」

「グルルルルル……」

「おい、バグが来たぞ」

軽いコントはともかく、彼等の前から大量のバグがやって来た。ソルはホワイトデビルとブラックエンジェルを抜き取り、バグに向かって撃ち抜き始めた。

「この俺に勝てると思ってるのかヒャッハア!!」

「グギャギャッ!!」

「王子の寝殿を汚す輩共!!地獄に落ちな!!」

「ピギユギユギャ!!」

クストウスに関しては大剣でバグをかつ切っており、切られたバグは当然の如く胴体をバラバラにされた。

「ちょっと2人共!!怯えてないで戦つてよ!!」

「無理だ……、あんな奴が近くにいるだなんて……」

「ごめんなさいごめんなさい食べないで下さい……」

「……駄目だこりゃ」

長槍で応戦しているセイギはナガレとゲンタに戦うよう言ったが、当の2人には無理だった。因みにナガレに関しては頭を抱えて縮こまっている。そんな2人に、セイギは呆れるしかなかったのだった。

「ヒャッハア!!ヒャヤヤヤヤヤッハアアアアアア!!」



「グギユグジュ……」

「消える……王子の名の下に……！！」

「ビギイ！！」

結局の所、大半のバグは無双状態のソルと狂気に駆り立てられたクストウスによって倒されたのだった。すると、

「おいあれ！！」

「アイツ……！！今度こそあの首を切つてやる……！！」

「速っ！！……あの人、何か嫌な予感が」

「だな。アイツの波動、とてつもなく禍々しい」

ソルとクストウスは、セクリスとディアに襲いかかろうとする黒コートのハッサムを見た。クストウスは全速力で彼に向かって行った。呆気にとられたセイギ達も、急いでクストウスを追いかけた。行った。

イザヴェルの遺跡 謁見室【奥地】

「化け物？褒め言葉だよありがとっ！でももう飽きたからさ、バイバイ！！」

「グッ……！！」

「貴様あ！！」

「おっと！？」

ハッサムはセクリスとディアに向かって大剣を振り下ろしたが、クストウスが背後から斬りかかって来たのを感じたのか、背後に向かって大剣を振った。

「またあんたかよ？しつこい奴は嫌われるぞ？」

「今度こそ、貴様を殺してやる！！」

「寝言は寝てから言い……！！」

「そこまでだ。次は当てるぞ」

ハッサムが言い放とうとした途端、彼のフードに切れ目が出来た。ソルがブラックエンジェルを撃ったからである。その背後からセイギ達もやって来た。ハッサムはセイギ達に反応したのか、セイギ達を罵るような発言をした。

「ほう、政府の犬共も来るとはな。些か俺目当てなんだろ？」

「政府の犬共って……！！お前、あまり俺達を馬鹿にするな！！」

「本当の事を言って何が悪い？てめえらは政府の言いなりになって働いてるんだからそんな物だろ？」

「政府の言いなりって……！！まさか貴方は……！！！」

「その通り！！！」

ハッサムはそう言うで大剣を地面に刺し、大声を上げて叫んだ。

「初めまして政府の犬共の皆さん！！てめえらの天敵、ハッ……ハッカードえゝす！！！」

「ハッカードと！？」

「ハッカードって何だよ？」

「僕達デバッカーと対になる組織、つまりバグを支配する連中なんです！！！」

「バグは良いぜえ、この世界の新たな存在になるんだからよ！！それを政府は認めず、てめえら政府の犬共は政府の言いなりになって次々に殺す！！こちとら大迷惑なんだよ！！！」

「こっちこそ、バグはこの世界を喰らい尽くす！！そうなれば俺達ポケモンは絶滅してしまう！！だからそうならない為にバグを駆除してるんだ！！！」

漸くトラウマから解放されたようで、ナガレとゲンタはハッサムと  
言い争っているのだった。

「絶滅？お前等がどうしようがどうせ滅びる、だったらバグを受け  
入れれば良いんだよー！」

「貴様、何しに此处に来た！？さては王子狙いか！？」

「王子？はん、あんな餓鬼なんか興味無いね！！この遺跡も、バグ  
の巣窟にする為に来たのさー！！」

「何だと……！？」

「そんな事の為に、貴方の好きにはさせない！！」

「貴様……、今すぐ王子に懺悔しろ！！でなければ、無理矢理にで  
もしてやる……！！」

「おゝ怖い怖い。じゃ、コイツにでも助けてもらおうかなー！！」

ハッサムはそう言うと1つの紫色の球体を取り出し、地面に放り投  
げて割った。するとそこから煙が現れ、煙は個体を形成した。ドラ  
ピオンを模した体格で、全体を覆う銀色の堅固な鎧、それ以上に鋭  
い爪に長くて先端に巨大な針を付けた尻尾、腹部には鋭い牙が生え  
た口がある、そのような蠍型バグを形成した。

「ガアアアアアアー！！」

「マツ……、マッドスコルピオ!!」

「俺はハッカーだぜ？バグ一匹持ってなくてどうする？」

「貴様……、よほど殺されたいようだな……!!」

「もうこんな遺跡には興味無いんでね、悪者は帰らせてもらっぜ」

「待て!!」

「アイツは俺が追う!!お前らはソイツを頼む!!」

ハッサムはそう言い、立ち去ろうとした。ソルはハッサムの後を追うことになり、セイギ達はマッドスコルピオと戦うことにした。

## EP24：黒コートの男（後書き）

前回書き忘れたのですが、クストウスの攻撃モーションは某狩りゲームの双剣のモーションとほぼ同じです

## EP25：共同作戦

「ゴガアアアアア！！」

「避けて！！」

マッドスコルピオは腹の口から黄色い液体で出来た弾を放った。弾が当たった床や壁が溶け出した事から、恐らく液体の正体は濃硫酸であろう。セイギ達はバックステップでかわした。

「次から次に……、今日は何なんだ！？」

「全く、ろくでもない日よ！！」

「黙って避ける！！」

セクリスとディアはハッサムからダメージを受けた体のまま、愚痴を呟きながら何とか避けた。

「今度奴に会ったら首を刎ねてやる……！！」

「ゴガアアアアア！！」

「（いやはや凄いな……）」

クストウスに向かって両手の爪で素早い連撃をするマッドスコルピオと、それについてこれる程のスピードで双剣を振り回しながら、ハッサムに悪態をつけるクストウスを眺め、セイギは暢気にそう思った。

「ドリヤア!!」

「はあっ!!」

「ゴギヤ!?!」

クストウスが注意を反らしている中で、セクリスはマッドスコルピオの胴体にモーニングスターをぶつけ、ディアがレイピアで連続突きをした。マッドスコルピオは傷口から血を噴き出し、衝撃で横転したものの、そのまま濃硫酸を吐き出し始めた。セクリスはそれをモーニングスターで防いだが……

「……ってあれ？濃硫酸なのに何で溶けないんですか？」

「ああ、俺達の武器ってああいうのにも耐えられる金属の入っているから……」

「……納得」

「俺達の武器は濃硫酸にも耐えられるように設計されているからな」



モーニングスターが溶けてない事に疑問を抱いたセイギがセクリスに質問し、彼は普通に答えた。その答えに心底納得しないような顔をしているセイギに、ナガレは率直に補足した。

「アイアンヘッド”!!」

”ストーンエッジ”!!」

「リーフブレード”!!」

「グギ!? グガアアアアアアアアアア!!」

「チツ!!」

「うおっ!!」

「いやっ!!」

ディアは葉を纏わせたレイピアで×印を刻み、セクリスは地面を抉って出来た岩塊を砕いてその破片を飛ばし、クストウスは額に力を込めた頭突きを、それぞれマッドスコルピオに喰らわせた。マッドスコルピオは後退りするものの、体を横に回転させて彼等を払った。

「あんまり効果的じゃないけど……!!」

「でやあ!!」

「ワイルドボルト」!!」

跳躍したナガレは矢を放ち、ゲンタは大斧を逆手で持って斬り、セイギは右手に電気を溜めてマッドスコルピオに放った。しかし

「グガアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ガッ!!」

「うおっ!!」

「うがつ!!」

マッドスコルピオは両手の爪を降り回し、セイギ達を払い飛ばした。特にセイギは壁を突き破って寝殿の外に出され、その先の地面に叩きつけられた。

「痛た……ん？」

セイギはふらつきながらも立ち上がり、出された穴に向かって歩こうとした。その時彼は、たまたま目に入った光景に疑った。

「……!!」

セイギは何かを感じたのか、目の前の状況を放り出してその場所へと向かった。

「セイギ!!大丈夫か!!」

『僕は大丈夫……、でも少し気になる事があるからそっち頼んだよ!!』

「……ああ」

「グルルルル……」

マッドスコルピオが唸り声を上げて威嚇する中、セイギと通信し終えたナガレとゲンタは一安心した。そしてマッドスコルピオを睨み、ナガレは思い出したように呟いた。

「……今思い出したけどさ、マッドスコルピオは既存する大型バグの中で防御力に特化したバグだったんだよな」

「何だつて……!?!」

「それ早く言えつて……」

「無駄な体力消費しちゃったじゃないの……」

ナガレの言うとおり、マッドスコルピオは既存する大型バグの中では最高の防御力を持つ。とは言え実際に防御力を持っているのは鎧の方であり、生身の方は意外と衝撃に弱いのだ。ついでに言えば、鎧は機動性に優れて衝撃に弱い生身を保護する為の御節介の象徴なのである。

「でも何か策はあるんだろ、ムツツリスケベ」

「……ふん！愚問だな、熱血バカ」

「何でも良いからさっさと言い！！このまま暴れさせて寝殿でも壊させてみる、真っ先に貴様の首を刎ねてやるからな！！」

「その為には、貴方方の協力が必要なんですよ……」

「私達の……？」

「協力……？」

「……良いだろう」

「じゃあ方法なんですけど……」

「ゴガアアアアアアアアアアアアアア！！」

ナガレはクストウス達に作戦を伝え始めた。その途中でマッドスコ

ルピオが襲いかかってきたので、5人はかわした。

「ゴギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

「ッー！」

ナガレは矢を一斉に5本放った。それをマッドスコルピオは体を横に回転して弾き、その風圧でナガレは吹き飛ばされた。

「はあああああっ！！！」

「ゴッ！？！」

ディアがレイピアを逆手に持ったまま走り、跳躍して振り下ろした。マッドスコルピオは前方に両爪を構え、ディアの攻撃を防いだ。

「とっつー！！！」

「ゴッ？ゴガアアアアアアアアアアア！」

セクリスがマッドスコルピオの懷を、スライディングで滑り過ぎるのを目撃したマッドスコルピオは、追いかける為に懷に通した。それが仇になるとも知らずに……

「ゴギヤッ!？」

マッドスコルピオはひっくり返った。マッドスコルピオは訳が分からず戸惑う中、ナガレは当然のように言う。

「間接のある鎧なんか纏ってんだ、柔軟性が無くなって自由自在に動けられる訳がないだろ」

「ゴッ……」

「まさかあんだと私は……?」

「そういう事ですね」

「ゴッ……、ゴギヤアアアアアアアアアアア!」

ナガレの発言にキレたマッドスコルピオは、全力で起き上がった。しかし

「ゴギヤ!？」

マッドスコルピオの左前脚の地面が崩れ、地面に埋まってしまった。抜こうとするも、なかなか抜けない。それ所かどんどん脚が埋まってしまふ。

「機動力失うのを分かって鎧を纏ってんだ、地盤の悪い所で一度嵌ったら抜けないよな」

「ったく、その頭脳を是非欲しいよな」

自信満々で喋るナガレの横で、ゲンタが地面から這い出てきた。恐らく彼が”穴を掘る”で地盤を悪くしたと考えられる。

「さて……、トドメは任せましたよ」

「ああ……任せろ……」

「ゴギッ!？」

クストウスが殺気オーラ全開で双剣を構えているのを見て、マッドスコルピオは少し怯えた。

「神聖な王子の聖域で粗相な行為をした下衆め……、我が剣の錆となれ!!」

「ゴ……ゴギヤアアアアアアアアアア!!」

クストウスは目に見えない速度で、マッドスコルピオの胴体をバラ

バラにした。因みにこの描写はグロいので、障子で仕切られているエフェクトで見る事。なんで障子だって？気にするな！！……失礼しました

話を戻し、バラバラにされた胴体はバグ胞子となり、あたりに散布された。

「許しを乞え……、そして後悔するんだな……」

「（ガクガクブルブル）」

「クストウス、やったな」

「王子は無事よ、それよりも奴を」

「あつ、セイギとソルさん……！！」

イザヴェルの遺跡 高台付近

此処からの時間帯は、クストウスとマッドスコルピオが連撃合戦をしていた頃合まで戻す

「遂に追いついたぞ……」

「ん？まだ此処まで来てないじゃん」

ソルはハッサムを追い詰める事に成功した。しかし、彼との間には



距離15m、高さはおよそビル60階もの谷があり、底には岩が剥き出しの海が広がっていた。

「へっ、余裕だな!!」

「ほーっ……」

ソルは助走無しに飛び越え、見事ハッサム側の崖に辿りついた。

「お前、名前は？」

「俺の名前？門矢マサト、ハッカーが送り込んだエージェントさ」

「そうか……。じゃあ門矢マサト、今からお前は俺の敵だ」

ソルはハッサム、門矢マサトにダインスレイブの先端を向けた。

「いいねえ、化け物と化け物の戦い。楽しもうじゃないの？」

マサトもまた、大剣の剣先をソルに向けた。そして、火花が散り始めた。

「……何か、嫌な予感が……!!」

セイギは急いで走って行った。

## EP25：共同作戦（後書き）

前に書いたテーマ曲に関して、若干の変更があるので伝えます

OP：This is Love（宇多田ヒカル）

前回投稿した”予告”は、『スーパードラジカルタイム 豪快DX！』に移動します

## EP26：狂気VS異常（前書き）

今回は何かやりすぎた気がしました

とりあえず

ハボックさん申し訳ありませんでした！！決して悪意があってやった訳ではありません許して下さい！！

## EP26：狂気VS異常

「おらぁ！！」

「ハッハア！！」

ソルとマサトは、互いの大剣で剣劇を始めていた。剣劇の被害は凄まじく、辺り一帯の地面が抉れたり、一帯の木が吹き飛ぶ程の物だった。しかしそれでも、2人は異常なまでに笑みを浮かべていた。

「中々やるねえあんた、俺そいつの嫌いじゃないよぉ！！」

「はっ、てめえみたいな奴なんかこれでも喰らって黙れってんだよ、”波動弾”！！」

「”燕返し”！！」

ソルは波動弾を放ち、マサトはそれを右手の爪で斬り落とした。そのままマサトはソルに向かって大剣を振り下ろした。ソルは滑るように後退しながら避け、ブラックエンジェルを撃ち始めた。マサトは大剣を横に大きく振って銃弾を防いだ。大剣には穴や凹みはおろか、刃毀れ1つすらない。

「……100インチの鉄板をも貫く弾なのにな、やっぱりお前は化け物だな」

「は？それ自分にも言えるだろ？」

「ククク、まあそうだがな」

「お前には分かるだろ、あのバグは所詮使い捨てだつて事。お前の世界の悪魔とかいう奴みたいにな」

「ああ。それに思い出したけど、俺の世界にいたあるロリコンジジイが呼び寄せたバグを退治した事があつてな」

「ハツハツハツ、アイツは救いようもない馬鹿だろ。素人の分際でバグを利用して、悪魔とか旧時代の遺産と組み合わせたもんな」

「お陰で簡単に消滅してくれたよ、胞子もな」

「だろ、だが所詮悪魔も天使も旧文明の遺産。勝手に対立して結局両方滅んだ奴らの事なんか興味ないな！」

会話を終えたマサトはトリガーを引いて弾倉を回し、威力が高まった斬撃波を放った。ソルは斬撃波を斬り裂き、”神速”でマサトとの距離を詰めてブラックエンジェルを至近距離で放った。マサトは喰らったように弾き飛んだが、体には銃弾が貫いた穴が空いていない。よく見ると、銃弾は潰されて地面に転がっていた。マサトは懷から、駅員や車掌が持つグリップを取り出しながら話した。

「いやあ、コイツがなかったら折角の楽しみが終わっちゃう所だった」

「……あんまり悪魔の事、なめない方が良いぞ？」

「……で？」

「お前の命はゴミ色だ、特別に俺の力を見せてやるよ……」

悪魔や嘗て彼等が戦った敵の事を侮辱されたのか、ソルの表情は何時もの狂笑いとは違い、静かに怒りを露にしていた。そして彼は、両手を前方に水平に突き出した。

「魔力レベル1開放、目の敵が完全沈黙まで力を開放する」

「へえ、楽しませてくれるのかい」

「ああ、本当の悪魔というのを……その身に刻んでやるよ！！」

ソルがそう言うと、辺り一面黒い靄に包まれた。恐らく彼の体から出ている物だと思われる。靄は形態を変化させて飛刃状になり、マサトに襲い掛かった。飛刃はマサトの体を次々と刻み、流石にこれにはマサトの顔も歪んだ。

「痛た……ん？」

セイギはふらつきながらも立ち上がり、マッドスコルピオに放り投げられた時に出た穴に向かって歩こうとした。その時彼は、ソルが能力を発動してマサトに圧倒している光景を見た。マサトはやられているというのに、何故か口元は笑っていた。

「……………!!」

セイギはその光景に何かを感じたのか、目の前の状況を放り出してその場所へと向かった。

「『さあ、これからがゲームの始まりだ!!』」

「グッ!? ガアッ!!」

ソルの体から2体の四足歩行の赤黒いグラエナが現れ、マサトに襲い掛かった。マサトは吹き飛び、地面に叩きつけられた。そのままソルはブラックエンジェルとホワイトデビルの両方の引き金を引き、銃弾を放った。銃弾はマサトの体を貫き、マサトの体はまるでボロ雑巾のようにボロボロ……じゃなくてボロボロになった。しかしソル及び2体のグラエナは、攻撃の手を休めなかった。

「『俺はお前が嫌いだ、大っ嫌いだ。もうお前とは戦わねえ、その



「まま地獄に逝きな!!」

「ガアアアアアアアアアア!!」

マサトの断末魔と共に、1体のグラエナがマサトに襲い掛かり、そして爆発した。ソルの表情から怒りが消え、そのまま燃え盛る炎を見ていた……

しかし

「……ハッハッハッ、ハッハッハッハッハッ」

「『何っ!?!』」

炎の中から、コートがボロボロの状態になっているマサトがゆっくりと姿を現した。ソルの表情に驚きが表れた。

「まさか……、まさかあんなので終わりか?ガツカリだな」

「『あんな状態になつてまで……、生きてるだ！？』」

「まあいいや。さてと、お前ばかりではズルいな……」

マサトがそう言うと、彼の顔に黒い複雑な紋章が表れた。そして彼の両目が緑から悪魔のような赤い目へと変貌した。

「バグの力……」

「その身に焼き付けてやるよ!!」

「

「なっ！！！！？」

マサトの背中に、巨大な漆黒の翼が生えた。それも、剣や銃などの武器で造られた翼であった。マサトは大剣のトリガーを引き、弾倉が回っている状態で近付いて行つた。残っていたグラエナが、マサトに立ち向かつて行つた。が

「ハアアッ！！」

「ギャーン!!」

グラエナは真つ二つになつて消滅した。そしてソルとの距離を一気に詰めた。マサトの斬撃速度は異常なまでに早く、ソルは追いつくだけで精一杯であつた。

「『ハアアッ！！』」

「グッ！！コイツは……！！！！」

マサトは後退しながら跳躍し、翼の中の銃器を1本取り出し、ソルに向かって銃弾を放った。すると翼を形成している残りの銃器全てが、ソルに向かって一斉に銃弾を放った。ソルは防ぎながら後退するも、全ては防ぎきれずに何発かは喰らった。

「『遅いな！！』」

「『なっ！？グアッ！！』」

マサトは着地後、肉眼では捉えられない速度でソルの懷に潜り込み、サマーソルトキックを喰らわせた。ソルはそのまま宙を舞い、そして跳躍したマサトの踵落としを喰らって地面に叩きつけられた。

「『グッ、ガハッ！！』」

「『言っておくが、まだ力の半分以上も出してないぞ？』」

「『なんだ……、この力は……！！！！』」

「『これがバグの力だ……！！！！』」

マサトが話している途中で、見えない何かがマサトを攻撃した。マサトは吹き飛ばされたものの、ダメージは大して無かった。見えない何かは姿を現し、ソルは驚いた。見えない何かの正体はセイギだった。しかし、彼の顔は昇格試験の時の狂気状態と同じだった。

「『貴様、下衆の分際で何目立っている？』」

「『セイギ……？』」

「『……面白い物見つけた。でも今は飽きた、だから帰る。バイバイ！』」

「『待て！』』」

マサトはそう言うと、高く跳躍してその場を去った。

「『く……』そ……」

「ソルさん！？ソルさん！！」

ソルは気絶し、元に戻ったセイギはソルを介抱し始めた。

## EP26：狂気VS異常（後書き）

あつ、因みに次回で4章は終わります

## EP27：謹慎と虹色と宝物

D - A D V E N T トワイライト支部 支部長室

「お前達が遭遇したハツカーの名は門矢マサト。職業は駅員はつせで、生きていれば79のジジイだ」

「生きていれば……？」

「マサトが勤めていた駅は2010年のバグ襲来の時点で駅全体が潰れ、乗客・駅員全員死亡している。奴もまた例外なく……な」

「つまり俺達は幽霊若しくはゾンビと戦っていたのかよ……」

「ジジイには見えなかったけどな……」

「奴がどうしてこの時代まで生きているのか、また奴が当時の外見そのままの状態にいるのか、調べる必要があるな……」

セイギ達は支部長室に呼び出されていた。あの後ナガレとゲンタはセイギとソルを発見し、そのまま帰還する事になった。現在ソルは医務室に運ばれ、セイギ達は現在に至る。

余談だが、あの惨状を見たクストウスは「おのれデ ケイ オー!!」と叫んでいたらしい。

「奴に関しては私が調べておく。しかしお前ら、カッパーじゃ勿体無い程まで成長しやがって……今回は仕方ないな」

「……つまりどういう事ですか？」

「特例だ。」チームケルベロス”は本日付けでシルバーランクに昇格だ」

「……Pardon？」

「……だからシルバーランクに昇格だって」

「……Why？」

「てめえらの耳には何が詰まってんだ馬鹿野郎！！」

支部長は久々にセイギ達の事を怒り、久々に机を思いつきり蹴飛ばした。そして久々に尻餅をついたセイギ達であった。支部長は吠えるように声を荒げ、彼等に言い放った。

「昇格だって何度言ったら分かるんだ！？あゝあ！？それとも昇格なんかしたくないとでも言うのか！？」

「「「いえ全然！！むしろ嬉しいです！！ワイワイ昇格バンザイ！！」」」

「……必死の抵抗乙」

「……支部長、俺の事忘れてますよね？」

「あつ、ああ。すまない、で……」

必死の抵抗をしているセイギ達を尻目に、支部長は次にジロウと話し始めた。あの後最後まで気を失っており、彼が出てきたのは大体5話ぶりである。

「てめえは最後の最後まで何やってた、あゝあ！？」

「いやあの、一般人に蹴られてそのまま……」

「その一般人がセイギ達と共に任務をしたって連絡があるんだが……」

「いやだからあの……」

「自分の仕事を一般人に任せ、てめえは最後の最後まで寝てたっつか？」

「いやですから……」

「てめえにセイギ達を非難する資格は無い。てめえは降格だ、カッパーランクからやり直せ！」

「……チッ！！全部お前等のせいなんだよ！！」

支部長に降格と言われ、それを認めないジロウは憂さ晴らしと言わんばかりにセイギに襲いかかった。しかしセイギには傷が付かなか



った。何故なら

「ウガゲビシャッ!!」

机を飛び越えた支部長がジロウの胸倉を掴み、見事な背負い投げを決めていたからである。

「……自分の失敗を認めないで他人に押し付ける青二才が、ふざけた真似をしてるんじゃないやねえよ!! てめえはそれなりに実力持っているクセにそれに慢心して他人を見下す、傲慢な性格が気に食わないんだよ!!」

そんなに降格が嫌なら……いつそのこと辞めちまえ」

支部長はそう言つと、ジロウの懷からある物を取り出した。彼のキーライセンスである。

「自宅謹慎しろ。暫く一般人になって頭を冷やしてきな、良いな!! あん!?!」

「……クソッ!!」

ジロウは立ち上がり、舌打ちをしながら部屋を後にしていくのだった。セイギ達は呆氣にとられながらも、支部長に異論した。

「支部長、今のはいくらなんでも……」

「……少し頭を冷やした方が良くいんだよ。さっきも言っていた通り、アイツはプライドが高いせいで本来の力を出し切れてない」

「だからって解雇は……」

「解雇までは行っていない、謹慎だ。それともお前等が代わりに謹慎するか？」

「いやそれは結構です」

「それは置いといて、お前等のライセンスを貸せ」

「「「……」」」

「取り上げないから安心しておけ」

会話の後、セイギ達は警戒しながら支部長に、自分達のライセンスを渡した。支部長は3人のライセンスのカップーバッチを、シルバーバッチに付け替えて3人に返した。

「お前達は今日からシルバーランクだ、感染率50%のバグポケモ<sup>デバッグ</sup>ンの修復が出来るぞ」

「……ありがとうございます!!」

セイギ達は返して貰ったライセンスを眺めた。そしてゲンタが率直な事を呟いたのだった。

「……また引越ししなきゃな」

「「あ」」

トワイライト支部 医務室

「……お久しぶりです。貴方もご覧になったように、これが僕の世界です」

「……ああ。汚れきつた世界だな」

目覚めたソルと、見舞いにやって来たツカサが会話をしていた。ソルもツカサも両方共、一度会った事があるかのような口調だった。

「お前が気に入っている奴ら、本当に良い奴らだったぜ」

「……これからですよ、彼等はもつと成長します。それと、コレは僕からのお見舞い品です」

「おつ、おお！！おおお！！」

ツカサはある物をソルに差し出した。ソルはその物に目の色を物凄く変えた。大体……虹色であろうか？その物とは……

「イチヨコレエエエエトサアアアアンデエエエエじゃねえええええかああああ！！」

ソルの好物であるチヨコレートサンデーである。彼は目の色を虹色に変えてかぶりつくように食べ始めるのであった。そしてペロリと平らげた、速い！！

「おかわり」

「お金払うの僕ですよ？」

「オカワ〜リ」

「テレビで見たような台詞ですね。そう言わなくてもありますよ、今回の報酬金ペアですが」

ツカサは渋々と替わりのチョコレートサンデーを差し出した。それもペロリと食べ終えたのだった。

「どうですか、怪我の具合は？」

「まあ何とかなった」

「なら安心しました……、もうお帰りの時間みたいですし」

「……ああ」

ソルとツカサが話し終えると、目の前に銀色のオーロラが現れたのだった。ソルはベッドから起き上がり、コートを着てオーロラの中に近付いた。

「……彼等には会わないのですか？」

「良いさ。アイツ等も大変だろうし、だから最後に伝言を頼む」

セイギ達の前にツカサが現れた。疑問視を浮かべるセイギ達を無視し、ツカサはセイギ達の顔を見て話しかけた。

「ツカサさん、どうかされました？」

「ソルさんからの伝言です

『お前達の人生はお前達で決めろ、どんな困難が訪れてもお前達なら乗り越えられる』

以上です  
「

「……ソルさんは？」

「つい先程、自分達の世界に帰られました。コレをセイギさん達宛てに……」

ツカサはセイギにある物を渡した。銃弾の形をした金・黒・赤の石が取り付けられたペンダントであった。

「……コレは？」

「さあ、僕には石しか見えませんが。多分貴方達に必要な物ですよきっと」

「……」

セイギ達はペンダントを貰い、大切にすることを誓うのであった。

「クソッ！！どいつもこいつも……、俺の実力を知らないクセに！」

「それは可哀想だな、自分の実力を知らしめる事が出来ないとはな」

「おつ、お前は誰だ！？」

「通りすがりの悪の手先だ、覚えなくて良い」

「悪魔の手先……?」

「俺は認めるぞ、お前の力をな」

「本当か!?」

「どうだ、俺達の仲間になるか?今の所よりは数百倍マシだぜ?」

「……この際だ、仲間になってやるよ」

「よしきた、なら一緒に来いよ」

「……ああ」

この日、D・ADV ENTワイライト支部所属の登ジロウと、異界からやって来たとされる狂戦士、ソルの2名は消息を断った。

伝えていなかった、最後の最後まで伝える事が出来なかった。そんなに助けてもらったのに、「ありがとう」と伝えていなかった。もどかしくて、何だか悔しい気分を感じてしまう。そんな気分だった

4 t h D e b a c k 災いの塔 E N D



## 設定集？（前書き）

今回ゲストに来て頂いたソル君の設定は、ハボツクさんの所の『  
e n r i r 魂の乱用者を喰らう者達』を参照して下さい

## 設定集？

### 『キャラ設定』

名前：クストウス

種族：コバルオン

性別：

性格：生真面目

武器：双剣（大鋏型に合体可能）

技：シザークロス

アイアンヘッド

経歴不明

名前：セクリス

種族：テラキオン

性別：

性格：短気

武器：モーニングスター

技：ストーンエッジ

経歴不明

名前：ディア

種族：ビリジオン

性別：

性格：クール

武器：レイピア

技：リーフブレード

経歴不明

名前：ジロウ（本名：登ジロウ）

種族：ウルビアル

性別：

性格：プライドが高い

所属：元デバツカー

ランク（最終段階）：シルバー

武器：大剣

技：不明

2030年5月6日生誕

2050年8月30日D - ADVENTトワイライト支部に入隊

2062年10月13日謹慎処分を喰らうが行方不明に

『地区設定』

・イザヴェルの遺跡

トワイライト支部以外の管轄外に当たる、“世界10大遺産”の1つである遺跡。”勇気の王子”と呼ばれる王子が生活する寝殿があり、王子の護衛を任された親衛隊が日夜戦う戦場の場となっている。大型バグは殆ど確認されてない。

『バグ設定』

・マッドスコルピオ

蠍型バグ。衝撃に弱く機動力のある柔軟な体を、堅固な鎧で覆って機動力を犠牲に防御力に特化した、大型バグ1の防御力を持つバグ。

両爪で獲物を捕らえ、口から吐き出す濃硫酸で獲物を溶かす。腹の口は固形物に弱く、捕食時は獲物を溶かして捕食する。亜種情報あり。

## EP28：トラウマと異常とアンドロイドガール

2050年 ヴィガルドの草原

『わーいわーい!』

『コロコロ。あんまりはしゃぐなよ、父さん追い付けないだろ』

『ヤクモさん、貴方現役のデバツカーなんですよ?』

『うつ……。いやっ、こっちは勤務疲れがまだ残ってたな……』

『父さん母さん早く!!』

『はいはい、待てー』

『わーい!』

『元気な奴らだ。あー、これ絶対筋肉痛だな』

現在は様々なバグが巣くうこの草原も、2050年当時はまだまだ綺麗な場所であった。そしてその草原で、ポチエナの子供と彼の両親であるグラエナ2人が遊んでいた。ポチエナの母親であるグラエナはポチエナを追いかけて、ヤクモと呼ばれたグラエナは絶賛筋肉痛の中で呟いていた。

『父さん母さん、僕大きくなったら父さんみたいなヒーローになり

たいんだ！  
㊦

「えっ、そうなの？」

『父さんみたいなヒーローって、父さんは危険な奴らと戦ってるんだ、何時もの怪我だけじゃ済まないんだぞ。それでも良いのか？』

『うん！お仕事している父さん格好いいもん！』

「……ナガレエエエエエエエエエエエエ！お前は本当にいい子だなあああああ！！父さんスゴい感激だあああああああ！！」

『ウェップ』

「ヤクモさん!!」

ナガレと呼ばれたポチエナの話聞いて、ヤクモは号泣しながらナガレを抱き締めた。あまりにキツく抱き締めすぎたようで、ナガレの顔は青ざめてしまった。そしてナガレの母親はヤクモの後頭部に蹴りをかました。

「あつ、僕の帽子！待てー！！」

「あまり遠くに行っちゃ駄目よー！」

『うつつ、いい子だよ……ナガレは、うつつ』

『何時まで泣いているのよ?』

草原に微風が吹き、ナガレの持っていた麦藁帽子が飛んで行ってしまい、彼は追いかけて走った。ナガレの母親は未だに泣いているヤクモにツツコミしながら注意した。

帽子は少し飛んだ後地面に落ち、ナガレはそれを拾い上げて戻って行った。

『父さん母さん、帽子あった……!!』

ナガレは2人が居る場所に戻って来た。しかし彼は目の前に広がる光景を見て、帽子を落としてしまった。帽子は再び飛んでしまい、そのまま何処かへと行ってしまった。

彼の目の前には、虎のような体格に金色のマントを着けて、白い仮面を取り付けた狼のような顔の黒い体毛の大型バグ、フェンリルが2人をくわえている光景だった。フェンリルの口は2人の血で赤く染まり、2人は力無くぐったりとしていた。

『父……さん、母……さん……』

ナガレは恐怖のあまり体を震わせ、目から大粒の涙を流しながら怯えていた。フェンリルは彼の前で彼の両親を飲み込んだ後、ナガレに近付いて来た。

『やめて……、来ないで……、食べないで……！！』

『グルルルルル……、グラアアアアアアア！！』

『嫌っ、嫌ああああ！！』

フェンリルはナガレ目掛けて飛び込んで来た。

2062年 トワイライト支部 シルバーランク宿舍  
「っは！！」

ナガレは飛び起きた。体中から大量に汗を流し、呼吸を荒くしていた。

「……」

「グカーグオオオ……」

「……またあの夢か、最近よく見るな。……気持ち悪いしシャワー浴びよ」

セイギはナガレとゲンタが使う二段ベッドに背を向けながら静かに寝息を立て、下のゲンタは盛大に鼾を欠いていた。ナガレは二段ベッドから降り、シャワーを浴びに部屋から出て行った。



勢い良く湯が放出される中、ナガレはただ黙って浴びていた。その内彼は呼吸を荒くするのだった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

ナガレは崩れ落ちるように座り込んだ。その様子は、第3者が見たら彼の背中にある大きな傷跡が、かなり生々しく見えるような感じになっていた……

ここ最近、セイギ達は傷だらけで帰還する事が多いのであった。何故なら……

「うぎゃあー!」

「うおっ!?!」

「いやあああああー!」

前回ツカサ越しにソルから貰ったペンダントを御守りとして常時した途端、身体能力が異常なまでに上昇したのだ。例えばジャンプ力が、機動力の悪いゲンタでもビル20階分の高さまで行くようになり、100m走が1.5秒になったり、握力がナガレでも100kgを越したりと……。その結果、身体能力の上昇に付いて来れない

ので毎回毎回怪我をするようになった。但し本人達はありがた迷惑だなんて思わなかったとか。このお人好しがっ！！……失礼しました

支部長室

「お前達に頼みがある……の前に、大丈夫か？」

「「はい……」「」」

「……絶対駄目だな。まあいい」

セイギ達は支部長に呼ばれ、支部長室に居た。とは言え彼等の体には絆創膏だの包帯だの湿布だの、医療品が貼ってあるのであった。支部長は頭を抑え、額に冷えピタを貼った。

「実は今日から暫く、お前達に新入りの教育を任せたいんだが、無理そうだな」

「いや、大丈夫ですよ」

「新入りの教育って出来るのか俺達に？」

「ものは試しだろ」

「よし、じゃあ入って来い」

そう言って支部長室にやって来たのは、ドレディアの少女だった。

だが、彼女の動きはロボットのようにかなりギクシャクしていた。セイギ達は疑問を抱いたが、気にしなかった。

「彼女の名前はエリカ、今日からデバツカーに入隊した新人りだ。彼女の面倒を頼んだぞ」

「分かりました。じゃあ宜しくね、エリカさん」

『宜シク御願イシマス、宜シク御願イシマス、宜シク御願イシマス』

セイギはそのドレディア、エリカに挨拶をした。エリカは片言で挨拶を返した。それには3人も驚いた。支部長は頭を抑え、溜め息混じりに3人に真実を告げたのだった。そして3人は衝撃を受けた。

「……… 本当の事を言う、」

エリカは技術省がバグ対策に開発された戦闘ロボット、つまりアンドロイドだ」

「……アッ、アンドロイドなの？」

『パフ』

「」「」「……ウソダンドコードーン！」「」「」

『ドンドコドンドンっ。』

「ああ、前途多難な感じ」

「……これも成長ですよ」

とりあえずセイギ達のセイギ達による、エリカの為の教育が始まるのだった。

## EP28：トラウマと異常とアンドロイドガール（後書き）

実はケルベロスは本来、恋愛物だったんですよ。その際主人公としてセイギ（病弱でバトル嫌い）、ヒロインにエリカをいう設定で、ナガレとゲンタは出番の無いセイギの親友設定だったんです。完璧に某良太郎と某アイドルが出た某恋愛ドラマのパロです、否定はしません

何故恋愛物からSF風バトル物になったのかと云うと、単に作者が恋愛物の限度を知らないからです

## EP29（前書き）

今回はセイギとエリカが主体の話です

タイトルは最後の方で

## EP 29

トワイライトエリア 公共図書館

『コレハ何デスカ?』

「本……だけど?」

『コレハ何デスカ?』

「机」

『コレハ何デスカ?』

「椅子」

『ナガレサンハ何ヲシテイルノデスカ?』

「ブツブツブツ……」

「勉強つと言って、エリカに分かりやすく言えば、様々な情報を記憶しようとしているの」

『デハ、ゲンタサンハ何ヲシテイルノデスカ?』

「グガーグオオオ……」

「睡眠つと言って、これもエリカに分かりやすく言えば、充電……  
って厭いやかかないでよゲンタ、此処公共の図書館なんだよ」

「グガーグゲゲ……」

「聞いてないし……はあ」

セイギ達チーム”ケルベロス”とエリカの4人は、トワイライトエリアの公共図書館にやって来た。主にエリカの勉強の付き合いなのだが、ナガレは大量の本を読んで自分の勉強に籠もってしまい、ゲンタに関しては足を机に乗せて鼾をかきながら寝てるといふ、所謂セイギだけがエリカの勉強に付き合っている。セイギはエリカの質問に、頭を掻きながら答えていた。すると

『デハセイギサン、ソノアクセサリーハ何デスカ？』

「えっ……ああ、コレ？」

エリカはセイギの左耳に付いてある、”LW”の刻印が彫られた白い翼の形をした、小さなイヤリングに気がついた。セイギはイヤリングを取り外し、エリカに教えた。

「イヤリングって言って、耳に取り付けるアクセサリーなんだ。コレは穴を開けないで耳に挟むタイプなんだけど……」

『耳二穴ヲ開ケル？』

「いや、イヤリングは穴を開けない。穴を開けるのはピアスだから。てかエリカには必要ないと思う」



『コレハ、ピアスデハナイノデスネ?』

「うん、僕の耳朵に穴なんか開いてないよ絶対。

それにこのイヤリング、僕が小さい頃ずっと前から付けてたって、  
ゲンタのおばさんが……」

『ゲンタサンハ、オバサンデハアリマセンヨ? テカ女性デハナイハ  
ズデス』

「言い間違えた、ゲンタのお母さんね。後で聞いたら僕を連れてき  
た時点から付けていたから、誰かが僕に付けたのになって……」

『ツレテキタツテ、ナンデデスカ?』

「……詳しくはEP13：第3者を参照して下さい」

『ハイ!?!』

セイギはエリカの質問に次々と答えていたのだが、何度も何度も質  
問してくるエリカに若干イライラし始め、終いにはエリカには分か  
らないが読者には分かる事を呟いた……って、こっち見んなセイギ  
!! エリカ見てよエリカ!!

「……で、このイヤリングは”ライトニング・ウィング社”って言  
う、主に男性アクセサリーを取り扱う会社の製品なんだよ。この辺  
りは分かる?」

『パフ』

此処で雑学。”ライトニング・ウイング社”（通称”LW社”）とは2050年に創設されたブランド会社で、前述のセイギの発言どおり、主としてネックレスやブレスレットや指輪、イヤリングやピアスやチョーカーと言った男性向けのアクセサリーを取り扱っている。D・ADVENT全支部共通で服装・装飾品に規定は無いので、大抵の男性デバツカーはこの会社のアクセサリーを好んで付けている。余談だが、”パヒュー・フェザー社”（通称”PF社”）という女性向けアクセサリーを取り扱う姉妹社がある。

「てか随分と脱線しちゃったよ。この話はまた後でね」

『パフ』

セイギは再びエリカに様々な事を教え始めるのであった。

カンドの森

「……所でさ、エリカって戦い方分かる？」

『エリカハ、普通ノ技ヲ使用スル事ガデキマセン』

「アンドロイドだからかな？普通のドレディアと違って機械で出来ているから、一般的の草技を覚えられないんだろっな……」

『ソノ代ワリニ、エリカニハ”<sup>ギガント</sup>Gウェポン” トイウ最終兵器ガ備ワッテイマス』

「最終兵器って、だだだだだ駄目だよ！！絶対そんなの使っちゃ駄目だよー！」

『ドウシテデスカ？』

「どうしてって……」

セイギとエリカの2人はカンドの森に居た。あの後ナガレとゲンタの2人は図書館内に取り残しており、セイギはエリカに戦闘訓練をさせる為にこの森にやって来たのだ。エリカの武器は、ノコギリの形をした赤いエネルギー状の刃のロングブレードだが、何故か取っ手の部分は短銃のトリガーの形をしていた。

「で、話を戻すけどさ……」

『戦闘経験ニ関シテハ、試験デ少シダケ』

「つまりあるんだ、なら細かい事は言わないよ。とりあえず、簡単に小型バグを討伐しようか」

『パフ』

2人は森の奥へと向かって行った。道中には、ガブリやアイロード

等の小型バグがいた。セイギは長槍でバグを斬り裂いて行った。エリカは次々とロングブレードで、バグを斬って行くのであった。

『標的確認、発射！』

「ピギヤッ！！」

『発射！発射！発射！』

「ゴギッ！！グバッ！！ゴギヤッ！！」

「……流石アンドロイド、正確な狙い」

エリカはエネルギーを放出しているカフルを倒し、武器をアサルトライフルにして小型バグを撃ち始めた。実はエリカが使用している武器は、D・ADVANTが新開発した”多段変形型武器”で、状況に応じて近距離型や遠距離型の武器に変形をするのだ。エリカの使用する多段変形型武器は一般的なタイプで、エネルギー状に換えたデバッグプログラムを銃弾にして銃撃出来れば、剣状にして斬撃も出来るという1つで2度美味しいのだ。現在では2タイプだけでなく、様々な武器に変形する武器も開発中だとか。

ただセイギにとってはその武器の性能よりも、アンドロイドであるエリカの精密かつ正確な射撃の方に評価をしたのだ。こんな感じで、セイギとエリカの任務は次々と行われていくのだった。

「グギャギャギャッ!!」

『標的撃破』

「これで全部かな」

セイギとエリカは周囲の小型バグを殲滅し終えた。周りには次々と胞子になって消滅して行くバグの屍ばかりであり、2人はそこでカップルのように平然と立っているという、何気にシユールな光景だ。そんな中、エリカの動きは突然鈍くなった。

「エリカ……?」

『眠クナリマシタ』

「……え!?!」

エリカはそう言うと、その場に崩れるように倒れかかった。セイギは急いで彼女を受け止め、彼女の体を揺するのがだった。

「エリカ!? エリカ!! エリ……何これ?」

エリカの体を揺すりながら心配するセイギは、エリカの背中から出てきたある物に唾然としていた。ある物とは、コンセントに差し込むような黒いコードのプラグだった。つまり……

「思っていたより軽いんだね、尚更気になるよ……」

セイギはエリカを背負い、エアボードは流石に危険なのか歩いて帰還していた。セイギの右手には、エリカの背中から出て来たプラグを握り締め、そこから電気を流していた。

「それにしても充電か……って、アンドロイドなんだからそうだよ  
ね」

セイギはそう呟き、エリカの寝顔(?)を時折眺めながら歩いていった。幾らアンドロイドでも、電気等の補給物が無ければ動けない。エリカの動力源は電気であり、中には磁力や重力といった物を動力源にするアンドロイドである。因みに一般的に電気機器は生の電気では駄目なので変電する必要があるが、セイギ達電気タイプのポケモンは体内で変電所の役割も担っているので、このような事も出来るのだ。

しかし数回見るだけで良い物を、セイギは間隔を開けずにチラチラ見ている。

「……」

こんな気分、僕は初めて感じた。胸の奥が苦しくなって、風邪をひいている訳でもないのに体が熱いし、悩んだり考える気分になれ

ない。何だろう、この感じ？……まさか、まさかコレが恋なのかな  
ドゴオオオオオオオン！！

「なっ、何だ！？……あっ、居住区から煙が！！」

セイギはそのままエリカを背負い、トワイライトエリアの居住区へと向かって急ぐのだった。

トワイライトエリア

「……」

セイギは啞然としていた。先程まで居た公共図書館が今では瓦礫の山となり、山の頂上ではヘルガー が背後に金剛力士像のオーラを纏い、仁王立ちをしていた。そして瓦礫の中から、2人のポケモンがゾンビのように這い出て来た。その2人は、セイギにとって一番縁のある2人である。因みにヘルガー もまた然り。

「……エリカの教育をセイギに任せてサボりやがって、覚悟は出来てるだろうな！！あゝ あ！？」

「……セイギイイイイイイイイイイイイイイ！！」

「……ウワアアアアアアアアアアアアアア！！」

ヘルガーは2人を追いかけ始め、その2人はセイギに殺気満々の形相で追いかけ始め、セイギは悲鳴を上げエリ力を背負ったまま全速力で逃げた。

[illegible]

「待てセイギイイイイイイイイイイイイ！」

「ウワアアアアア！ ウワアアアアア！」

夕日の光に照らされ、エリカを背負ったまま逃げるセイギの姿は、まるでヤクザみたいな連中から女を奪った（ある意味）勇者のような姿だった。

セイギとエリカ  
夕の下の2人、この時の彼等はカップルのように見えたとかそうでもないとか

EP 29: 夕の下の2人



## EP29（後書き）

実はこの世界のポケモン達はみんな服を着ております

どういう服を着ているのかは、後に紹介します。と言っても、大抵ゲームのキャラが着ている服が殆どですが

## EP30：狂ウ頭脳

トワイライト支部 ミッションカウンター

エリカの教育を任されてから15日後の本日（因みに任されたのは10月15日）、セイギ達とエリカはミッションカウンターにいた。この頃になると、セイギ達ケルベロスには傷という傷が大量にあるのだった。もはや骨折なんか生温い、下手したら複雑骨折所が大量出血による死亡だって有り得る程すらである。しかし、いい加減突発的に上昇した身体能力に付いていけないとヤバいのか、最近では基礎訓練も入れて少しずつだが付いていけるようになった。とは言え、軽度の怪我は毎回免れないが。

「お待ちしてましたよケルベロスの皆さんと新人のエリカさん……  
って、お怪我の方は大丈夫なのでしょうかね？」

「大丈夫です……多分」

「ある意味不安なのですが……」

今回の任務でエリカさんの教育は終了します。今回の任務以降、エリカさんはケルベロスの皆さんと離れて任務を行うので頑張ってくださいね」

『パフ』

余談だがエリカがアンドロイドだという事を知っている人物は、支

部長とケルベロスの3人程度である。他のメンバーには”ロボット口調のドレディア”としか知らされておらず、ツカサに関しては知っているのかどうかすら不明だという。

「さて今回の任務ですが……」

”ウィガルドの草原”で小型バグ”ノイズプラント”が異常発生したそうです。このままでは草原自体が壊滅してしまいますので、これらの駆除をお願いします」

「……………!!」

チハルの発言した”ウィガルドの草原”という単語に、ナガレは身震いをした。それを見たゲンタは、彼に小声で忠告した。

「……………ナガレ、無理するなよ？ いざって時はお前だけでも帰還しろ、あの時のぶり返しなら支部長も煩い事は言わないからさ」

「……………ああ、俺は大丈夫だ……………」

『ドウカサレマシタカ？』

「何でもないさ。所でセイギ、先に行ってくれないか？俺達は後から向かうからさ、お願い！」

「……………分かった」

突然のゲンタの頼み事に、セイギは疑問を抱くも頼み事を聞き入れ、先に草原へと向かって行くのだった。セイギが去って行くのを確認したゲンタは、チハルに話しかけた。

「チハルさん、3階の団体部屋って明日空いているか？」

「団体部屋ですか？……はい、空いておられますけど……」

「じゃあ予約しても良いか？午後7時からさ……」

「分かりました……」

「どうしたんだよゲンタ、団体部屋を予約するなんてよ……」

「ハアツ、忘れたのか？明日はあの日だろ」

「……あゝ！」

「ああ、もうこの時期になったんですね！では何時ものアレも御用意しておきますね！」

「だからさ、今日は無茶するなよ。壊れて中止になんかなったら、俺の気が済まないからよ」

『アノ日トハ、何ノ事デスカ？』

「そうかエリカは知らないんだったな。教えてやるけどセイギには内緒だぞ？」

『内緒トハ、ドウイウ意味デス力?』

「セイギに言つては駄目っていう事だ、分かったか?」

『パフ』

ゲンタはエリカにも話した。その話にエリカは納得し、セイギを追いかけて草原へと向かつて行つた。

因みにこの時点で既に分かっている人もいるとは思われますが、この事はまだ御内密に願ひします。皆さんが考えている通りの事で恐らく合っているのですけど、下手に話したらゲンタが個人的に萎えると思うので……、すみませんが本当に御内密に願ひします。全力で土下座所か喘息なのに無理して4・5km走りますので。

ウィガルドの草原

「やあつ!」

「!?!」

セイギは既に、向日葵のような姿で茎の部分から薔薇の花のような腕が生えた植物の小型バグ”ノイズプラント”と戦っていた。このバグは根が生えているので動く事は一切しない、しかし遠距離から薔薇の棘を模したミサイル針やソーラービームのようなレーザーを放つ事得意とする遠距離型バグ。だからと言って近距離でも、花粉を飛ばして動きを止めたりと凄じ厄介なバグなのだ。更に厄介な

事に、コイツ等には親である大型バグが存在しているのだ。その紹介は後の章にて。

「放電”っ!!”」

セイギは長槍を頭上に掲げ、そこから広範囲に電撃を放ち始めた。とはいえ、ノイズプラントにはさほど効いてないようだ。

「ああもう面倒だな！異常発生だから仕方ないけど」

「おらあ!!」

「やった、助け舟来た」

若干イライラしているセイギだったが、突然唸り声を上げた火球がノイズプラントを焼き払った事に若干嬉しがった。火球は勢い無くしたのか、地面に落ちた。落ちたと言うよりは、火球は人の形を形成して着地したと言った方が良くかもしれない。

「待たせたな、リーダー」

「リーダーは止めてって言っているのに……」

「もういっちょだ!!」

「「!?!」」

到着したゲンタは久々にセイギを”リーダー”と呼び、もう一度”火炎車”を発動してノイズプラントを焼き払った。セイギは苦笑いをしながら否定し、背後からやってくるナガレとエリカの方に顔を向けた。

「ノイズプラントは見た目通り火に弱いからな、この中ではゲンタが有利だな」

『標的確認、殲滅シマス!』

「!?!?!」

ナガレがノイズプラントに関する知識を言っている間に、エリカはアンドロイドとは思えない動きで、ロングブレードで次々とノイズプラントを斬っていった。胴体を斬られたノイズプラントは、バグ胞子になって次々と消え去った。

『殲滅完了』

「……いつ見ても凄いよな、流石アンドロイド」

「……アイツなら インフイーニティリンク も大丈夫じゃね?」

「もう慣れたけどね」

エリカの圧倒的な動きに、既に知らしめられたセイギ以外の2人は呆気を取られた。

『コノ先二モ、役50体確認デキマス』

「じゃあ急ぐか」

「……ハアツ、ハアツ、ハアツ」

「ナガレ、どうしたの？」

草原の奥に行こうとする彼等だったが、ナガレが呼吸を粗くして身震いしているのにセイギが気づき、彼に話しかけた。

「……大丈夫、早く終わらせようぜ」

「あ……、うん」

「……やっぱ治ってないかつたく、心配だな」

ナガレは身震いしている体を引き摺るように進み始めた。セイギは不思議に思っても進み、先行しているゲンタは溜め息混じりに心配するのだった。

天秤は均衡を保ったままである



「!？」

『殲滅完了』

「これで半分位かな……」

「ああ、そう……だな……」

「……おい、無着するな」

次々と異常発生したノイズプラントを殲滅し続けているのだが、ナガレの表情が次第に悪くなっており、ゲンタはそんな彼に声を掛けた。

「無着……？　そんなのしてないって……」

「……どうなっても知らないからな」

「……風？」

そんな中、突然草原中に微風が吹き始めた。

天秤は揺れ始めた

セイギとゲンタは疑問を抱いている中、ナガレの体の震えは更に増した。そしてエリカは何かを感じ取ったのか、突然武器を構えて叫んだ。

『前方カラ強力ナ生命反応ヲ感知、気ヲツケテ下サイ!!』

「えっ……!!?」

「なっ……!!?」

「……ヒッ!?!」

3人の声と同時に、前方から狼の大型バグ”フェンリル”が姿を表した。ナガレは目の色を変え、震えながら後退りを始めた

天秤は大きく揺れ出した

セイギは驚き、ゲンタは舌打ちをしてナガレを見た。ナガレは尻餅を付き、口をパクパク動かしながら後退りしていた。

「グオラアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「……!!」

フェンリルのその雄々しい吼えに

天秤は傾いた

[illegible]

「ナガレ!？」

「ちっ！！またか！！だから無着するなって言ったのよ！！」

「来るなああああああああああああああ！……うわあああああああ！……」

ナガレサンノ精神ガ不安定ニナツテオリマス！！

「うわあああああ！うわあああああ！うわあああああ！」

「ナガレ、ナガレ！？しっかりして！！」

「おい、戦線離脱するぞ！！コイツの方が優先だ！！」

「グオラアアアアアアアアアアアアアアア！」

ナガレは狂ったように叫びだし、頭を抱えて暴れ始めた。セイギは彼を押さえ、彼等はその場から逃げ出した。フェンリルは再び吼えた

天秤は傾いたまま、動かなくなった

## EP30：狂ウ頭脳（後書き）

ゲンタ「先生、メダルが何処にも見つかりません!!」

作者「これもテンバイヤミーって奴の仕業なんだ!!」

セイギ「何別作品の話で盛り上がっているの？」

作者「みんな、メダルを買う時はテンバイヤミーに気をつけるんだ  
!!」

セイギ「それ以前に鑑定ショップで見つかりますから。まあテンバイヤミーがわざわざ買ったのを売った物が大抵ですが」

ナガレ「コアメダルの購入方法なら余所でやれよ」



「どういう事、ゲンタ？」

「あー、エリカはともかくセイギには話して無かったな。この際黙ってたって面倒だから話すぜ」

俺と奴、初めて会ったのは……」

エリカの質問に答えたゲンタの答えにセイギは疑問を抱き、彼に問い詰めた。ゲンタは溜め息を吐き、2人に話し始めたのだった。

12年前 孤児院”アルペジオ”

佐野ゲンタは孤児院”アルペジオ”の院長佐野キヨコの子であり、その事もあるのか院内ではガキ大將的なポジションに立っていたのか。

『うわあゝん!!』

『ゲンタ!! またお菓子奪ったわね!!』

『イテテッ、イテテッ!! 分かったからもう止めてよ母ちゃん!!』

同じ院内の子供にちょっかいを出して、最終的にキヨコのお仕置きを喰らうという光景は日常茶飯事レベルに達している。勿論セイギやナガレにもちょっかいを出した事はある。そしてどういう経緯で仲良くなるのか、この出来事は後程。

余談だが、彼の父親は威厳の無いごく普通の会社員で何時もキヨコの尻に敷かれているとか。つまり、佐野家は立派な恐妻家であるのだ。

そんなある日の事だった

『母ちゃんおやつは?』

『んなもん無いよ。それよりあんた、今日から新しい子が来るんだから仲良くしなさいよ』

『新しい子って誰だよ?』

『あんたと違って御利口な子だよ。折角だから、勉強教えて貰ったら?』

『ええ、つ、絶対ヤダ!』

『今日からみんなのお友達になる、ええつと……』

『橘ナガレです……』

『そう、ナガレ君ね。とにかくみんな、ナガレ君と仲良くする事。さもないと……、お仕置き10回3セットだからね』

『はっ、はい……』

大勢の子供達の前に、”橘ナガレ”と名乗るポチエナが立っていた。ゲンタを除く大勢の子供達は皆、親を亡くしたり親に捨てられたりと悲劇を目の当たりにした子供である。キヨコは保育士の免許を所持しているので、子供達を無償で引き受けて独立出来るまで育てているのだ。とは言え育てるからには差別する事なく、ゲンタ同様我が子のように優しく厳しく育てる。そして独立して働くようになってあかつきには、今までの養育費を給料の中からふんだくっておくのが彼女の育児方法である。

『……………』

『何……………やってんだ？』

『……………関係ないでしょ？』

『いやっさ、仲良くしないと母ちゃんに叱られるっていつか……………』

『……………嫌々なら尚更関わらないでよ』

孤児院に来た当初のナガレは、どちらかと言うと浮いている存在だった。子供達皆が元気よく外で走り回って騒いでいるのに対し、彼は静かに本を読んでいるだけであった。そんなナガレに他の子供達は興味を示さず、ほっといていた。ただゲンタだけは、キヨコに怒られるからなのか彼に積極的に接していた。しかし当時のナガレにとってはおしいというか、1人で居たいという願望の方が強かった訳で、ゲンタの事を無視しようとしていたのだ。



『いいじゃん別にさ、相棒』

『誰が相棒だよ？ふざけないでよ』

『ふざけてなんか無いって相棒』

『相棒って言うな！』

遂にはナガレを相棒と言うようになったゲンタであった。ナガレはその事を全力で否定し、その場から離れた。こういう風に、当時のナガレとゲンタの2人は全く織が合わないミスマッチコンビだったのだ。

「という訳で、俺がアイツの事を”相棒”と言うようになってたな……」

「なんか関係ない路線になってるけど……」

『眠クナリマシタ』

「エリカなんか電池切れになっちゃったし、コンセントって無いじゃん。仕方ない……」

電池切れを起したエリカの体から出てきたプラグを、セイギは仕方なく握って電気を流し始めた。

「当時話題になっていたろ、現職のデバツカーが休暇中にやってきた、当時バグ汚染されていなかったウィガルドの草原で妻諸共バグに喰われて死亡したってニュース。そのデバツカーの名前は”橘ヤクモ”……」

「橘って……!!」

「その通り、ナガレは橘ヤクモと橘ミサトの間に生まれた1人息子だ」

ゲンタは何時もとは違う、冷静な態度と声でセイギに説明した。セイギにはこの事を知って大体理解した、ナガレが異常なまでのフェンリルに対する拒否反応を起していた事、そしてウィガルドの草原にいる間も挙動不審気味に動いていた事、全て過去のトラウマを思い出させたぶり返しだという事だ。

『あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!』

「……面会拒絶のままだからな、アイツに会えるのも明日だろうな。俺は寝る」

「ナガレ……」

ゲンタはそう言って横になり、大きな鼾を上げて眠り始めた。セイギも未だにナガレの事を気にしつつ、静かに寝息を立てた。

「……此処は？」

ナガレは目を覚ました。目を覚ました所は、辺り一面真っ白い部屋であった。

「俺……、あんな事思い出したんじゃあなあ……」

「グルルルルルル……」

「ヒッ！！」

唸り声を聞いたナガレは、恐る恐る背後に目を向けた。そこには死体を啜えて口を真っ赤に染めたフェンリルが、唸り声を上げていた。ナガレは、フェンリルよりもそれが啜えているグラエナの死体に驚愕した。

「おっ、親父……！！」

『……ウッ、ウウッ……』

死体はナガレの父親、橘ヤクモだった。ナガレが恐る恐るそれに触れる前に、ヤクモの死体は完全にフェンリルの口の中に入り、粉々



天・秤・は・壊・れ・た

[illegible]

### EP31：初めまして（後書き）

ゲンタ「前回の続き、漸くメダルゲット。しかもコンボ確定」

セイギ（ファンタ）「だから別作品……」

作者「とりあえず

・プテラ ナガレ

・トリケラ セイギ

・ティラノ ゲンタ

つてとこだな」

ゲンタ「まさかの尻尾に変形する部分かよ!？」

セイギ（ファンタ）「肩の部分が伸びるアレ……」

ナガレ「（俺のアレは飛ぶ奴か……）」

ツカサ「誰かタコメダル持っていないですかね……?」

ナガレ「てかコアメダルの話は余所でやれって……」

EP32: Let's 銃撃戦

トワイライト支部 医務室

「調子はどうだ、相棒？」

「……」

『喉がガラガラする』ト仰ッテオリマス』

「まあしゃあねえな、あんなに叫んでたんじゃあなあ……」

「ナガレ、大丈夫かい？」

「ああ……」

翌朝、ナガレの叫び声は治まったからか、医務室の扉には”面会拒絶”の紙が剥がされていた。セイギ達は医務室に入り、ナガレの居るベッドにやって来た。ナガレは一晩中叫び続けていたらしく、彼は喉を痛めてしまい声はガラガラしていた。因みに何故かエリカには通じた。ナガレはガラガラ声のまま、セイギ達に話した。

「俺さ、バグの中でフェンリルだけは苦手なんだよ。親父もお袋も両方共あの草原でフェンリルに喰い殺されてな、俺だけ助かるだなんてどうかしてるよ……。それ以来ウィガルドの草原とフェンリル種に対して強い拒否反応起こして、平然を保てなくなるんだよ。正直言つとガブリにも拒否反応が起きてな、ガブリ程度だから大丈夫だけだな」

「なんでそういう事、今まで黙っていたの？」

「その馬鹿相棒がしつこく構ってくるから次第に忘れてたんだよ」

「その馬鹿相棒って俺か、そうかそうか」

「……はあ、情け無いな俺って。自分のケジメなのに、自分じゃあどうする事も出来ないなんてよ……」

『ケジメ……』

ナガレはそう言いながら目を閉じ、静かに涙を流していた。セイギとエリカは、ナガレの悔しさに同情していたのだが、ゲンタだけは冷静に言い放った。

「……正直ガツカリだよ、お前がそんなに器が小さい奴だったとはな」

「……」

「ただのムツツリスケベだと思っていたのによ、ムツツリスケベだけでなく仇の前ではどうする事も出来ないチキンだったとはな！！」

「ゲンタ、いくら何でも言い過ぎだよ！」

「はっ、単細胞の熱血バカに言われたくないな……」



「おかげで今日のアレは中止だな、だから無理するなとあれほど言  
つといたのによ……」

ゲンタはナガレを次々と罵倒し始め、セイギはそれを止めようとしていた。しかしセイギを振り切り、とにかくナガレを罵った。当のナガレは、反発したり掴みかかることなく冷静に言い返していた。

「セイギ、エリカ、任務に行くぞ。ケジメもつけられないようなチキン野郎はもう放っておけ……」

「待つてよゲンタ!!」

『ナニガナンダカ、処理ガデキマセン』

ゲンタはそう言つて医務室を後にした。セイギは彼を追いかけて、エリカが色々と悩んでいる所だった。ナガレはエリカに言ったのだ。

「今のはな、言い換えれば愛情の裏返しってとこだ」

『愛情ノ裏返し……?』

「アイツは素直じゃないんだ、気にするな。お前もさっさと行けよ、1人にして欲しいし、お前のフィアンセが待つてるぜ」

『……パフ』

エリカは納得したのか、医務室を後にした。1人になったナガレは、そのまま眠りに着こうとしたが……

「……、!?」

### ウィガルドの草原

草原ではある程度の数は減少しているものの、ノイズプラントの数はまだまだある方である。また、昨日フェンリルが現れた事により、植物であるノイズプラントを除いた他のバグが全て存在していなかった。フェンリルは大型バグの中で上位ランクに属する肉食生物、自分達より弱い他のバグを捕食して食べる事なんて事はしょっちゅうある。フェンリルはどんなに優れたデバツカーでも苦戦を強いられるバグであり、状態にも応じるが単独で挑んだデバツカーは、インフイニティランクに認められる事もあるのだ。まあ大抵は前線部隊の隊長に選ばれたり、多額の報酬が手に入る事だが。

「オラア!!!爆せる!!!」

「!?!」

セイギ達はエアボードに乗って高速移動しながら、黒い銃器類でノイズプラントを銃撃していた。ノイズプラント達も負けじと、棘を放って遠距離攻撃をし始めた。セイギ達は難なく避け、撃ち抜いていた。

基本エアボードは各支部から各地区までの移動用に使うのだが、移動中にバグと遭遇する事を考慮しているので武器を装備している。武器と言っても銃器しか無く、射程は短いが威力の高いSハンド・威力は低いが射程の長いLスナイパー・射程威力共に中間のMショットの3つのタイプの銃器を状況に応じて使い分けるといふ。それらが全身黒いが故に、セイギはこれらを見て某黒い球体の映画を思い出したとか。後エアボードにも、製作者が何を血迷ったのかボード型・ヨット型・バイク型の3タイプがある。因みに名前はボードだがヨットとバイクがあるのは気にしてはいけない、あくまでホバリングしているので見逃して下さい。

ヨットとバイクに関しては運転もあるので、MショットとLスナイパーを使用する際に固定する固定金具がある。嘗てそれらを撃つて事故を起こしたデバツカーがいた為、やむを得ず取り付けたのだ。因みにボードのタイプは入隊時に決めておくのであり、変更するには多額のギルを払わなくてはいけないのだ。何故ならボードに、使用デバツカーの情報のコピーをする手間があり、更に保険の関係とかまあ色々……って、その銃器を向けないで！！

あくまでエアポートは移動用で、各地区内では使用を禁じられている。但しウィガルドの草原に限り、地区の範囲が指定されていないので地区内のエアボードの使用が認められている。

「!?!」

「!?!」

「喰らえっ!?!」

セイギはボート型のエアボートを乗り回し、Mシヨットのスライドを引いて銃弾をリロードし、ノイズプラントの攻撃を避けながら撃ち抜いていた。Mシヨットは言うなれば”散弾銃”<sup>シヨットガン</sup>であり、発砲の際にはスライドを引かなければならない。そのままもう一度スライドを引き、ノイズプラントの群れと衝突する前にボードに乗ったまま跳躍し、1回転しながらノイズプラントの群れの頭上で引き金を引いた。Mシヨットの銃口から銃弾が放たれ、撃ち抜かれたノイズプラントは次々と消滅した。

「おらおらおらおらあー!!」

バイク型のボートを慣れたように乗り回し、ゲンタはSハンドを乱射していた。運転は上手いのだが、大斧での近距離攻撃を得意とするパワータイプだから、射撃の腕は下手で10発中8発は外しているペースなのである。つまり最終的には、バイクでノイズプラントを轢き倒しているのだ。因みにボードでの突進攻撃はアリだが、幾ら何でもバグを轢き倒すような事をメインとするデバツカーは、流石にそうそういない。

『フェンリルノ反応ヲ確認、皆サン気ヲツケテ下サイ!!』

「グラアアアアアア!!」

「うわっ!!」

「チッ!!」

順調良くノイズプラントを討伐していくうちに、エリカはフェンリルの反応を確認、その数秒後にフェンリルが汚染された大地を力強く蹴って現れ、セイギ達を攻撃した。セイギ達は全員エアボードから降ろされ、持っていた銃器は消え去った。あくまでボードに乗っている時限定の武器なので、たとえボードから振り降ろされたら消滅するのは仕方ない。

『No.28”Conqueror in Forest”、通称  
”フェンリル”ノ生体反応ヲ確認、殲滅開始シマス!!』

「グラアアアアアアアアア!!」

「はあ!!」

「グラア!!」

「うわっ!!」

「セイギ!!」

『目標確認、発射!!』

ボードから長槍を取り出してボードを閉まったセイギは、フェンリルの顔に向かって長槍を突き出した。しかしフェンリルは顔を振り払ってセイギを跳ね除け、彼に向かって右前脚で攻撃した。セイギは大きく吹き飛ばされ、ゲンタは斧を取り出しながら叫んだ。エリカはアサルトライフルでフェンリルの顔面に標準を合わせ、フェ

ンリルの電撃弾を緊急回避しながら撃ち始めた。フェンリルの顔面には銃撃は効き難いのか、全然ダメージを受けたようには見えなかった。

「だああああっ!!」

「グガッ!？」

「……ペンダント、本っつっつっつっつに慣れた方がいいな。体中痛えよ……」

片手で大斧を振るったゲンタと、フェンリルの右前脚による攻撃がぶつかりあった。実力的には互角だったが、ゲンタの首にかけていたペンダントと言う名の厄災を齎す増強剤のお陰によって、力面においては彼が上回った。フェンリルはよろけ、ゲンタは煙が出ている右腕を見ながら呟いた。因みに涙目である。

「どりゃあああ!!」

「グギャ!!」

よろけている間に、肉眼では捕らえるのが難しい速度で駆けたセイギが、フェンリルの腹部に跳び蹴りを喰らわせた。フェンリルは吹き飛ばされ、受け身を取りながら体勢を整えた。このままならいける、そう確信したセイギ達に牙が刺さった。

「うぐっ!？」

「かつ、体が……!？」

『システム異常、システム異常!！』

「!！」

「まさか、取り溢し……!！」

突然彼等の体が動かなくなった。セイギには分かった、先程殲滅したノイズプラントの生き残りが、セイギ達に花粉を浴びせて行動不能にしたのだ。

「グラアアアアアアアアア!！」

「うわあっ!！」

「ぐああっ!！」

『損傷、躯体損傷!！』

その隙にフェンリルが電撃弾を放ち、セイギ達は攻撃を受けた。特にエリカに関しては、右腕が破壊されて色取り取りのコードが引き千切られており、そこから火花が出ていた。

「グルルルルル……」

「やっぱり強いな、フェンリルは……」

「本当、だよな……」

「グルアアアアアアアアアアアアアア!!」

フェンリルは唸り声を上げ、ゲンタとセイギは動かない体のまま皮肉そうに笑っていた。そしてフェンリルは、彼等に向かって襲い掛かった。その時だった、フェンリルの顔面が爆発した。セイギ達は驚愕し、顔を抑えているフェンリルに一台のヨットがぶつかった。ヨットは止まり、動かしていた人物は降りた。持っていた黒い長銃が消え去り、その人物はヨットから弓を取り出してゲンタに向かって言った。

「……待たせたな、相棒」



### EP33：Lロマンス／大切な人へ贈る言葉（前書き）

正直言って、今回序盤でなんでこんな事をしたんだと後悔して  
います

因みに微妙に長いです

### EP33：Lロマンス／大切な人へ贈る言葉

「グルルル？」

「……待たせたな、相棒」

突然フェンリルをはねのけたヨットから降りた男は、弓矢を携えてゲンタに言った。ゲンタは皮肉そうに笑い、男に言い放った。

「……相棒って言うなよ、相棒」

「お前こそな」

『ナガレサン、大丈夫デシヨウカ？』

「人の事言えないだろエリカ、お前生身だったら重傷だろそれ？」

その男、ナガレは色々ツツコミを入れた。特にエリカに関しては、自分の事ほったらかしにして彼の心配をした為、ナガレは入念にツツコミをした。だって右腕引き千切られているもんねー、生身じゃ普通に死んでるようなもんだよねー B Y：作者

とにかく、ナガレは唸り声を上げるフェンリルを睨みつけた。未だに体の震えは若干あるものの、昨日と打って変わってパニックを起こす事は無かった。震えを見たセイギは、ナガレに心配そうに言った。

「ナガレ、無着しないで。もう君が苦しむのを見たくないんだ……」

「心配するなセイギ。それよりもさ、手を出さないでくれるか？ 一応俺のケジメだからよ……」

「……分かった」

ナガレの頼みをセイギは静かに聞き入れ、これ以上の心配をする事はしなかった。やはり自分のケジメだからか、誰の手も借りずに自分1人で振り切りたいのだろう。セイギやゲンタにはその事が理解出来たのだろう、まだまだ常識の甘くて未だに処理仕切れないエリカは置いておくが

「グルルル……」

「さて行くかフェンリル……、俺と勝負だあ!!」

「グラアアアア!!」

ナガレは横に数歩歩いた後に走り出し、フェンリルに向けて矢を放った。フェンリルは払うように右腕を動かし、勇ましく吼えながらナガレに飛びかかった。偶然なのか必然なのか、その叫び声は人語を話さないフェンリルから訳せばこう聞こえるのだった、『笑わせるな死に損ないが!!』と。早い話、フェンリルはナガレの事を見下していたのだった。最も、そのフェンリルがナガレの仇なのかど

うかは不明、だが元々フェンリルはプライドが高い種族なので、一度ナガレが自分を見てパニックを起こした事により、自分は恐れられる程優位な立場に居ると驕っているのだ。

このままナガレとフェンリルは、自然に草原の奥地へと足を進めていたのだった。その頃取り残されたセイギとゲンタの2人は、大量のノイズプラントに囲まれている中で、必死にエリカの壊れた右腕を取り付けようとしていた。

「ちよちよちよ！ゲンタそのコード違っつて！！」

「じゃがしい！！くっつけば何だって大丈夫だろ！？」

『ゲンタサン、ソノ発想八困リマス！！』

「……………（ハア）」

ノイズプラントは溜め息をしたかのように、（見た目では分からないが）かなりの呆れ顔をしていた模様。このいざこざをあと15セツトは続ける

ある程度は立ち直れたとはいえ、トラウマを乗り越えた事にはならない。戦いはフェンリルの方が優勢というのは変わらない、未だにナガレの体の震えは小刻みとだが止まらない。そのせいで狙いが定まらず、矢が彼方此方に飛んで全く命中しない。反対にフェンリルの攻撃を受けやすくなり、現時点でもフェンリルの電撃弾を喰らっ



「グガアアアアア！」

『発射、発射、発射！！』

恐らくエリカは起動してから初めて苦戦しているのだろう、生きている左手で撃ち始めているが、殆どの銃弾が照準した敵を外しており、ノイズプラントは平然とミサイル針を放ち始めた。エリカは避けるものの、銃撃しても外れるばかりだ。恐らくエリカの利き手は右手であろう、利き手をやられたが為に慣れない左手での戦いを余儀無くされ、更に武器も剣状態よりは銃状態に切り替えた方が良いと判断したようである。

苦戦している状態のエリカを気にかけたのは、超人同士が戦う某人氣漫画のメジャーな必殺技のように両手を突き出し、長槍6本を突いたセイギだった。

「無茶しないでエリカ、利き手をやられてたら戦えないでしょ！？」

『……誤射率90%、右アーム損傷率100%、全機体損傷率15%、戦闘続行可能』

「エリカ！！」

「なにやってんだセイギ！？下手したら死ぬぞ！！」

セイギの呼びかけにも全く応じずに戦うエリカに対して、とうとう

堪忍袋の尾でも切れたのか、セイギは唐突にエリカの銃に手をかけた。ノイズプラントに炎を纏わせた拳で殴っているゲンタは、突然の行動を取ったセイギに罵声を浴びせた。

『離シテ下サイセイギサン、貴方マデ撃チ抜イテシマイマス!!』

「…………嫌だ」

『離シテ「嫌だ!!」!?!』

セイギはそのまま、突然エリカに抱き付いた。それにはゲンタやノイズプラントはともかく、アンドロイドのエリカすら驚いた。セイギは周りの目を気にせず、抱き付いたままエリカに囁くように話した。

此処から暫くはとんでも無い事になるので苦手な方は飛ばして下さい

「…………君を殺させはしない。例えこの小さな炎が燃え尽きようとも、君は僕が守ってみせる!!だから…………」

『…………』

「決して結ばれないことは分かっている。君が永遠に死ななくて僕

は死ぬ事も分かっている。だからっ！！もつともつと、僕は君を知りたいんだ……。10年でも100年でも何年経ったって構わない、電池が無くなったらいくらでも充電させてあげる、だから！！

……もつと君の事を教えてくれるかい……？」

「「「！！！！？」」「」」

「……おっ、おおおっ、おまつ！？TPO考えろ！！」

『……！！』

「うわっ！？」

「なっ！？」

全く場違いな空気の中で、セイギは空気を読まないのか唐突にエリカに告白した。エリカはともかくノイズプラントまでたいそう驚き、ゲンタに関しては意味不明すぎて言葉が詰まった。

しかしその瞬間、エリカの体が光り輝き始めた。セイギを始めとし



た周囲の生物は驚き、エリカの背中ではガコンと音を立てながらカブトムシが羽を羽ばたかせる前の状態に展開した。

『Gウエポン発射準備完了。セイギサン、申し訳アリマセンガ背中ノ手形二手ヲ嵌メテ貰エマセンカ？』

「えっ！？こっ、こっ……かな？ってうわっ！？」

エリカの背中には右平手1つが嵌められる程度の手形があり、彼女の頼み通りにセイギはそこに右平手を嵌めた。すると手形は光り輝き、エリカは宙を舞い始めた。そして背中では完全に展開し、放出されたエネルギー波が天使の翼を形成した。

「ナッ、ナンデイスカアレハーツ！？」

「……！！！？」

『Gウエポン”RD”、発射！！』

驚きのあまりオンドウルったセイギとゲンタをよそに、エリカは翼から色とりどりの光弾が勢い良く発射され、彼等の気持ちの整理が付く前にノイズプラントを一体残らず全て一掃した。

「……スゲエ」

『……眠クナリマシタ』

最終兵器”<sup>ギガント</sup>Gウェポン”を使用し終え、背中を元に戻したエリカはすぐに電池切れになったようで、そのまま倒れ込むように眠りについていた。

「……告白したかいがあったのかな？」

「……だからTPO考えろっつの！！もう行くぞ！！」

ゲンタはぶつきらぼうに、TPOを考えてないセイギの頭を叩いた。

気がついたら草原は雨雲に覆われ、今にも雨が振り出しそうな天気になっていた。そんな中でも、ナガレとフェンリルの戦いは終わらなかった。ナガレはどういう訳か、武器を捨てて肉弾戦で挑む事を選んだようで、現時点でもフェンリルの顔に回し蹴りを喰らわせていた。

「グラアアアアアア！！」

「グッ！！」

フェンリルは顔を振ってナガレを払い、ナガレを宙に放り投げた。

続いてフェンリルは跳躍し、口を開いてナガレに食いかかった。

「なめてんじゃ……ねえよ!!」

「アガア!!」

ナガレはフェンリルの大きく開いた口を両手で押さえ、そのままフェンリルの顎を外して地面に投げ飛ばした。フェンリルの顎は大きな音を立てながら外れ、巨体は地面に叩きつけられた。ナガレは空中で一回転して着地し、両拳を握り締めて睨み付けた。

「どうだフェンリル……、もう今までの俺じゃないぞ!!」

「アガッ、アガッ!!」

先程までの戦況は何処に行ったのか、現在はナガレの方が優勢。それどころかフェンリルはナガレに対して恐怖感を抱いた。フェンリルは何か言おうとするも、顎が外れて上手く言葉を発せれない。しかしナガレには通じたらしく、彼は構えを解いて言い放った。

「……ああ怖いさ、未だに震えがとまらねえよ」

「アガッ……」

「俺には大切な人がいたんだよ、今はテメエ等のせいで影も形も無

いけどな。でも、も……と大切な奴が出来た、熱血バカで力任せな奴でな……」

「……」

「ただ不思議な事に、一緒にいても全然退屈にならねんだよ。ソイツに借りがあるってのにテメエは喰おうとした、だから許す事はできねえ！」

「……アガッ」

「良い事教えてやるよ。俺は、仲間の為ならトラウマなんかキレイさっぱり忘れる事がきんだよ」

ナガレは再び構え、フェンリルも構え、草原中に雨が降り出した。

「テメエを倒せるんだったら、俺は頭脳だろうが何だろうが、仲間以外なら何でも捨ててやるよ……！」

「アガアアアアアアアアアアアアア……！」

雨が激しく降り始めた頃、ナガレとフェンリルはぶつかりあった。そんな中ナガレの脳裏には、ある会話が過去の映像（パスト・リフレクション）として流れた。

『ナガレ、お前がデバツカーになるのなら、まずは父さんを倒してからだ』

『どうして？』

『幾ら敵とされているバグとはいえ、生物に変わりはない。お前は殺せるか？』

『それは……』

『今のお前では到底無理だ。それでもデバツカーになるんだったら、父さんに言え。幾らでも相手してやるからな』

『でももし父さんがバグに食べられた……？』

『その時はだな……、バグを父さんに見立ててくれ。いいな？』

親父、分かったよ。コレは俺への試練なんだろ？俺がどうしようも無くなった時の為に、親父が俺のために……  
「だああー!!」

「アガッ!!」

なら俺は、やってやるよ!!

「親父iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

「アギヤアアアアアアアア!!」

フェンリルを背負い投げの要領で引っくり返したナガレは、弓矢を拾ってフェンリルの上に乗し、矢を引いて構えていた。今のナガレにとって、何故かフェンリルが自分の父親、橘ヤクモの面影も見えていた。ヤクモの面影は、矢を引いているナガレに向かって告げた。

『良いデバツカーになれよ、ナガレ』

「……………」

ナガレは静かに涙を流しながら、フェンリルに向かってこう呟いた。

「………… Good - by Forever and Ever My  
Father 【訳：永遠にまたな、親父】……………」

そして弓から放たれた矢は、フェンリルの体を貫いた。フェンリルの体は孢子となって消え去り、そこから二筋の光が雨雲を貫き、天に昇っていった。

「ナガレ……………」

「セイギ」

エリカを担いで充電をしているセイギはナガレに向かって行こうと

するが、ゲンタに止められた。





## EP34：ライトニング・バースデイ（前書き）

今回は一部御見苦しい（？）ところがありますので、閲覧にはご注意下さい

## EP34：ライトニング・パースデイ

トワイライト支部

「セイギ」

「うわっ！！……どうしたの？って、ナガレは大丈夫？」

「ああ、お陰様でなんとかなった」

ナガレとゲンタの2人は、エリカ（右腕修理完了）を連れてセイギの前に現れた。セイギは右腕の包帯を取っていて、彼は急いで右腕に包帯を巻き直して接した。ナガレ達は気が付かなかったのか、その事を口にしないで、何故か顔がにやけていた。それにはセイギが気がつき、とりあえず訊ねた。

「……どうしたの？」

「セイギ、エリカに告ったってゲンタから聞いたぞ」

「えっ！？……あつ、ああ。なんかノリで……」

「そこでさセイギ、こうなったら荒療治だけだよ……」

にやけている2人の話を聞いていく内に、セイギには何か嫌な予感を感じていた。そして彼等に釣られて発したエリカの次の発言で、予感的中した。

『セイギサン、　　して下さい』

「ナツ、ナンダッテー!？」

まさかの　懇願にセイギはオンドウルほど動揺せざるを得なかった。因みに　に入る２文字は各自で御想像下さい。

ナガレとゲンタの２人に関しては、やはりにやけ顔で話していた。正直言つて、不気味に光りだす彼等の  
両目が怖い、作者も怖すぎるといふ感情を持っている。

「告つたんだからよ、次は　だろ普通」

「いやいやいや!!--普通どうこの前に、僕まだ未成年だよ!!--」

「何言つてんだ、某魔法ファンタジー映画では主人公１５歳でして  
ただろ!!--」

「いやいやいや!!--映画は映画だからどう考えたって!!--」

「さあ、振り切れ！」

必死に拒否するもやはり強請つて来る2人に対し、セイギの顔は絶望と興ざめたような表情になり、

「…………絶望が僕のゴールだ」

そう言うとも目散に逃げて行った。これにナガレとゲンタはたいそう驚き、エリカに関しては首をかしげていた。まあ無理もないか

「おつ、おい！逃げたぞ！！」

『ナニカ、失礼ナ事ヲシマシタカ？』

「したっちゃしたけど、とにかく追わないと……」

「あら、どうしたの？エリカと一緒にで」

3人が（自分達のせい）でセイギが大変な事に対し、とにかく焦っている時だった。ヒバリが彼等の元にやって来て、3人に話しかけた。ヒバリに気づいたその時、何を考えたのか、ゲンタは徐にヒバリの眼鏡を外した。

トワイライト支部 訓練場

「何なんだよ3人共……。そりゃ、エリ力を止める為とはいえ告白した僕も僕だし……」

訓練場に逃げ込んだセイギは、息を切らせながら汗を拭いて休憩していた。珍しい事に今日は誰も使用しておらず、誰の目にも見られずにベンチに横になろうとしていた……。のだが、突然重火器の音がしたのに気が付いた。音がした方向に目を向けると、

「……」

「ヒバリ……さん？ナンデイスカウシロノソレ？」

重火器を大量に装備しているヒバリが、背後に（荒ぶる）千手観音のオーラを纏いながら降臨していた。何が何だか理解出来ずにオンドウるセイギだったが、ただ一つだけ分かっている事があった。

”こりや逃げなきや死ぬな”と。そしてこの日、チハルが受付カウ  
ンターから見た光景には、本能のままに逃げるセイギと、本能のま  
まに重火器を発砲して追いかけるヒバリの姿があったとか。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ  
！！」

「うわああああああああああああああああ！！世紀末覇者あああ  
ああああああああああ！！」

「あはははは……、見なかった事にしよ」

見なかった事にした

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！！……疲れた」

セイギは息を切らしていた。なんとかヒバリを振り払ったものの、  
彼の体力は限界に近い。このままでは、バグになる前に過労死する  
気がしたようだ。そんな中、

「…………」黒崎セイギは入れ”？怪しいけど贅沢は言えないな…………」

彼の右手側に、”黒崎セイギは入れ”と書いてある紙が貼られた扉があった。彼は怪しく思いながらも、意を決して扉を開けた。すると

パン！パン！

「…………へ？」

「………… Happy Birthday セイギ（君・さん・サン）！！」…………」

入っていきなり、クラッカーの音と紙テープ・紙吹雪がセイギを出迎えた。そして、ナガレ・ゲンタ・ヒバリ（勿論眼鏡着用）・エリカ・チハル・支部長が、彼に向かって祝うように同じ言葉を発した。

「…………何？」

セイギ本人には理解が難しかった。

「あいつ等から聞いたぞセイギ、今日が誕生日だってよ」

「あつ、はあ……。スッカリ忘れてしまいました…………」

「（今時誕生日を忘れている子がいるとは……）」

「とっ、とにかくお祝いしましょうよ」

セイギは完全に忘れていたらしい、今日が誕生日であるということ  
をだ。彼が照れながら支部長達と話している時、ナガレとゲンタは  
楽しそうにカラオケ機械を弄っていた。

「しっかしまあ、カラオケだなんて久々だな」

「こういう時にしか出来ないもんな」

『……誕生日ッテ何デスカ？』

「誕生日っていうのは、そのヒトが産まれた記念の日って事です。  
エリカさんで例えるなら、貴方が初起動した日です」

「そうそう、そういう感じ……ってかツカサさん、貴方何時の間に  
居たんですか？」

「だってこのままでは空気ですし……」

”誕生日”の意味を知らないエリカの質問に、いつの間にか居たツ  
カサが答えた。勿論ゲンタはフォローしながらツカサに質問した。



「セイギ、お前は本当に良い仲間を持ったな」

「……はい」

「……決して失くすなよ、私みたいにな」

「はい？」

『『じゃあカラオケで盛り上がりましょうよ皆さん！！トップバッターは俺達で！！』』

セイギが主役の誕生日会だというのに、会場はナガレとゲンタのこの一声で、もはや誕生日会からカラオケ大会に変わった。しかし誰も構わず、その気になっていた。トップバッターと名乗り出たナガレとゲンタの2人は、音楽と共に歌い始めた。以外にも上手かったらしい。

「上手いじゃない！！」

「以外だな、評価しておくか」

「凄いです！」

「……」

支部長達はナガレとゲンタのカラオケに熱中している中、セイギは彼等の歌を気にせず、ただただエリ力を見ていた。

今まで仲間を気にかけないような事は無かった。でも、彼女を見ていると何故か周りが目に入らない。なんでだろう？こんな事、初めてだ……

「……エリカ」

『パフ？』

5 t h D e b a c k 初めてのアンドロイドカール E N D

異世界

「……っ。あれっ、此处は一体……？」

頭に青いゴーグルを付けて首に青いスカーフを巻き、腰に聖剣のよ  
うな剣を下げた、風変わりなりザードンが目を覚ましたのは、辺り  
一面何もない白い部屋だった。リザードンは辺りを見回し、警戒し

ていた。すると、

『……随分とお待たせしましたね、ディセNDERさん』

「……だっ、誰だ！？何故俺がディセNDERだという事を知っている！？隠れてないで出てこい！！」

『言われなくても出てきますから剣を収めて下さい』

リザードンに話しかけるように謎の声が辺りに響いた。リザードンは更に警戒して腰から剣を抜き、戦闘体勢に入って謎の声に向かって叫んだ。謎の声はリザードンを宥め、彼が剣を収めるのを確認すると姿を表した。声の持ち主はゾロアークの姿をして、リザードンに話しかけた。

「こういう形で会うのは初めてですよ？結構考えた結果、コレで話す形になりましたよ。まあ本当の姿ではないのであまり気にしないで下さい」

「……あんた誰だよ？」

「怪しい者では……って在り来たりか。どうせ怪しい者ではないとか言っただって、相手には怪しいとしか思われませんし。例えば言うなら……、魔法を忘れた魔法使いですよ」

「マジか？」

「嘘ですよ」

「おい!!」

ゾロアークは冗談交じりに接していたが、リザードンとしては怒りを感じていた。するとゾロアークは急に冷静な口調に変わり、リザードンに質問した。

「さて…… 此处に来たってことは、行かれるんですね？」

「…… ああ。アイツは俺の仲間を傷つけたんだ、絶対に許せるわけがない」

「…… 分かりました。今から案内します」

ゾロアークはそう言うと、右手を水平に伸ばした場所に銀色のオーラを出した。リザードンは一瞬驚くも、覚悟を決めたような顔をしてオーラに向かって歩き始めた。

「ではお気をつけて、ディセンダーさん」

「俺はディセンダーだけどディセンダーって名前じゃないぞ？」

「ええ、承知です」

「…… 行ってくる」

リザードンはそう言うと、オーロラの中に入って行った。オーロラが消えたのを確認すると、ゾロアークは水色の髪をして眼鏡をかけた、海を模したデザインの学生服を着ている青年の姿になった。

「さて……、次の授業は実習か。着替えなきゃ」

青年はそう呟くと、部屋から出て行った。

T o B e C o u n t e d

#### EP34：ライトニング・バーズデイ（後書き）

セイギ「今回の僕、だいぶ一皮剥けたよね？」

作者「大丈夫、次回はちゃんとしているから。恋愛なんて初めてだから分からなかったし……」

セイギ「まあいいや。因みに次章にはある方が来て下さりました、大変お待たせしてすみません」

カラオケの部分はカットします、何を歌っているのか各自ご想像下さい

## 設定集？

### 『キャラ設定』

名前：エリカ（正式名称：イヴニング・ハンター0号、仮名称：手塚エリカ）

種族：ドレディア型アンドロイド

性別：型

性格：幼い

所属：デバツカー

ランク：ノービス

武器：多段変形型（ロングブレード×アサルトライフル）

技：無し

レインボー・デストラクション

最終兵器：RD

2062年8月10日初起動

2062年10月15日D・ADVENTトワイライト支部に入隊

2062年10月31日教育課程終了

### 『地区設定』

#### ・ウイガルドの草原

全デバツカー支部に一番近い所にある草原、一説ではこの草原を中心に支部が設立してあるとか。2050年までは一般人の親子連れで溢れていたが、現在はバグのせいでデバツカー以外近寄らなくなり、バグ汚染率が高い地区。ドングやカラドリオといった大型バグに遭遇しやすい

### 『バグ設定』

#### ・ノイズプラント

カンドの森やウィガルドの草原といった自然豊かな地区に存命する、植物型小型バグ。地に根を張っているために移動は一切しないが、遠距離から狙うように攻撃してくる。彼等の親玉と思われる大型バグがいる。亜種情報あり

#### ・フェンリル

正式名称”Conqueror in Forest”。現存する大型バグの中では最強の分類に属する、ガブリの親玉に価するバグ。戦い慣れた動きで獲物に襲い掛かり、影も形も残さず食い殺す。このバグに単独で挑み勝ったデバッカーは、一人前と認められる程。亜種情報あり



## EP35：老化（前書き）

最初に言っておく、タイトル詐欺だ！！

セイギ（闇落ち）「黙れ！！」

## EP35：老化

某所

「イザヴェルの遺跡”及び”ラグーン海岸”共に手筈の通り、感染率が上昇している。完全汚染も時間次第、以上が俺の報告だ」

『く苦労……』

『マサトちゃんはイケメンだけじゃなくてお仕事もこなせるなんて、嫌いじゃないわー！』

『お前、ジジイもいけるのか……？』

『……どう　？私が選んだ手駒は？』

『上出来とまでではないが、他の雑魚よりはマシだ』

「おっと、俺をそこいらの雑魚と一緒にされるとは心外だなあ、ハッ……ッカーのリーダーさんよお？」

マサトは立ち上げているコンピュータを通して、恐らくハッカーの中枢人物と思われる人物とネット会話をしていた。モニターには会話をしている人物の姿が映されなければシルエットすら映されておらず、”E”と描かれた白い背景・”L”と描かれた黄色い背景・”M”と描かれた銀色の背景・”H”と描かれた赤い背景と、話す人物が替わる度に様々な画面に切り替わっていた。

『調子に乗るな、我々にも劣る屑が。貴様が生前のままでいられるのも時間の問題なんだから?』

「……鋭いねえあんた、俺にも老化が始まったのかなあ?」

『フン! 相変わらず馴れ馴れしい奴だぜ!』

『、煩い』

中枢人物と話しているというのに、マサトは敬語を使おうとはせず、馴れ馴れしく話していた。見た目に反して年上だからか、それとも正式ではないのか、とにかく彼は敬語なんて使う様子は無かった。そんな中、マサトはふと思いついたかのように報告した。

「そういえば、不完全だがバグ化している政府の犬を見かけたな」

『バグ化している政府の犬だと……?』

『男? イケメン?』

「ああ。種族は色違いのレントラー、長槍を2本武器として所持、支部は恐らくトワイライトだ」

『政府の犬の分際で、バグ持ちのデバッカーなんているのね』

『、確か俺達の記憶の中でレントラーと言えば……』

『……黒崎の生き残りか、どうりで奴が最後の最後まで、しらばっ

くれていた訳だな』

『黒崎の生き残りならきつとイケメン…… ああんもう!! 私会ってくる!!』

『止めときなさい、アンタ馬鹿ね』

『……』

「……で、要望があれば連れてくるがどうする?」

『……保留だな。不完全という事は、まだバグ化はおろか侵食すらしていない。下手に手を出さない方が良いだろう』

「りょーかい。じゃあ切断するぞ。……面白くなってきたじゃねえか」

マサトはそう言ってコンピュータの電源を落とし、不適な笑みを浮かべながらその場を後にした。通信は終わったものの、中枢人物同士の会話は続いていた。

『……まさか、黒崎の生き残りの体内にあるバグって……』

『……可能性は高い。もっとも、どちらにせよ調べる必要がある。奴の体内のバグがただのザコか、それとも終末を齎す神か……』

「『太陽の神』天照大神<sup>アマテラス</sup>が一声鳴けば、この世界に陽の光が降り注ぐ。月の神<sup>ツクヨミ</sup>月人壮士<sup>ツクヨミ</sup>が一声鳴けば、この世界は闇に包まれ月の光が差し込む」

「……なんだそれ？」

「御伽噺だ御伽噺、<sup>おとぎばなし</sup>太陽と月の神<sup>おとぎばなし</sup>っていうな……」

「そんな御伽噺あつたっけ？」

「ある訳ないだろ？この世界にしか無い御伽噺だ。……まあ、アマテラスとツクヨミは実在する太陽と月の神だけだな」

「整理券を発行しますので一列に並んでくださーい！ー！」

セイギ達はロビーに設置してあるソファーに腰を下ろし、受付待ちをしていた。任務に出ようとしても、今日に限って受付は長蛇の列になり、受付嬢<sup>チハル</sup>が整理券を渡している程だった。

暫くして

『次は1974番の方ー！！』

「1974番……あつ、俺達じゃん」

「グカーケケケ……」

「起きてゲンタ」

「イダダダダダダダダダダ！」

「（セイギが純情を失いつつある……！？）」

セイギ達と呼ばれた。セイギは鼾を掻きながら寝ているゲンタを（虚目で秒速100mの速度の往復ビンタで）起し、ナガレはもはや純情を失ってしまったセイギを一瞬怖がった。因みにセイギの手には炎タイプでもないのに空気摩擦のせいで発火しており、ゲンタの頬に関して言えばプックリ腫れており、煙も出ていた。一体誰のせいであんなった？ お前のせいだろ！？

気を取り直して、セイギ達は受付にいるチハルと話した。

「ケルベロスさんの任務ですけど、無いです」

「「ハイ！？」「」」

「いえっ、あるんですけど無いです。実は……」

「僕が指名したので、今回はそれを御願ひできませんか？」

チハルと口論している内に、突然ツカサが彼等の元に現れた。

「”神の聖域”……ですか？」

「そのとおり。今回の任務地はかなり重大な場所ですね、そこを完全汚染されると確実にこの世界は崩壊しますから」

「で、その内容は？」

「内容？普通どおりバグの殲滅ですが？因みに小型しかいないので気休め程度で大丈夫です」

「（ほっぺまだ痛い……）」

今回の任務に関してツカサから告げられ、セイギ達は聞いていた：エアボードに乗りながらだが。因みにまだゲンタは頬を押さえていた。

「でも何で気休め程度で？ていうか何処に行くんですか？」

「気休め程度という理由に関しては、今回のバグが小物だから。そして場所は、<sup>ヘウンス・ロード</sup>天国への途”です」

「<sup>ヘウンス・ロード</sup>天国への途？」

「あそこには、ある御伽噺で有名な神様が住んでいるっていう噂があります」

ツカサのこの発言に、一番反応したのはナガレだった。その発言を聞いた彼は、咄嗟にツカサに質問した。

「それって、”太陽と月の神”ですか？」

「……正解。その神の名前は

太陽の神”天照大神”と、月の神”月人壮士”です」

ヘウンス・ロード  
天国への途

天国への途とは、簡単に言えばただの山。しかしこの山は太陽の神”天照大神”と月の神”月人壮士”が住んでいる事もあり、更にはそれらを祀る祠もある神聖な山なのである。

「……面白そうな奴2人とクズ2匹、後は……厄介な奴だけか」

マサトは静かにそう呟き、コートのフードを被って山の中に入ってしまった。その後、マサトを追うように1人のポケモンが足を踏み入れた。



## EP36：この世界に無き存在

ヘヴンズ・ロード  
天国への途

「……此処ですか、これまた未だかつてない豪勢な」

「だって神が住んでいる場所ですからね」

支部を出発してから1時間半が過ぎ、セイギ達は天国への途の入口  
（と言うよりは登山口の方が妥当か）にいた。全員エアボードから  
武器を取り出し、今にも任務を開始しようとしていた。

そんな中、ツカサがふと思い出したかのように、セイギ達に話し始  
めた。

「所で皆さん、シルバーランクにまで昇格したようですね？」

「ああはい……」

「このままでは僕も貴方達に追い抜かれそうで、実は若干嫉妬して  
いるんですよ。不思議な事に」

「はっ、はあ……」

「……しかし、果たしてそのままで宜しいのでしょうか？」

「えっ………？」

「敢えて言いますが、この世界は競争社会です。誰もが皆、上を目指す・夢を叶える為に勝ち続けなければならず、たった一度負けただけで二度と上を目指そうとせず、夢なんか見ないように欲望を拒絶し、自然に”その場で充分”と言い聞かせ、良い環境に行ける可能性があるのに劣った場所に留まり続ける……」

『グガアアアアアア！！』

ツカサはそう言うのと黒刀をセイギ達に向け、怪物を解放した。怪物は暴れ始め、今にもセイギ達に襲いかかろうとしていた。殺人鬼のような顔になっているが、ツカサは相変わらず冷静に忠告した。

「少なくとも、貴方達はそうならないで下さいよ？」

「「「……」」」

「……さてと、そろそろ行きますよ」

黒刀の怪物を元に戻し、ツカサは登山口に足を進め始めた。空気が話の重圧のせいで重い中、セイギが思い切って質問した。

「じゃ、じゃあツカサさん！一体どうすれば良いんですか！？」

「……決まっているでしょう？競争社会に勝ち続け、高見を目指す心を忘れないで下さい。特にセイギさん、貴方に何か不慮な事でもあったら僕が困りますから」

「……はい」

「……じゃあ行きましょう。貴方達が仰っていたハッカーがいるかもしれませんから」

セイギ達はツカサの言っていた言葉に胸を突き刺され、痛みを感じたまま登山口に入ってしまった。

〈ヴンス・ロード〉  
天国への途 山頂

「……ああ！！どうなってやがるんだアマテラス！？異常なまでにバグが増えてやがる！！」

「落ち着きなさいツクヨミ、そうイライラしていてもどうにもならないわ」

巨大な鳥居が4つの山路の出入り口に取り付けてある山頂では、太陽の神らしい風貌のホウオウ”アマテラス”と背中に大きな月輪を掲げたルギア”ツクヨミ”、2体の伝説ポケモンがいた。ツクヨミは声を荒げながら怒り狂い、アマテラスはツクヨミを静めていた。しかしツクヨミはアマテラスの話を聞かず、怒りをぶつけていた。

『この山に3つの影が出来上がっているわ。1つはバグを撒き散らす屑、1つは愚かなポケモン共の集まり、大体4匹つて所よ。もう1つはよく分からないけど異端。てか、愚か共の中にも屑と同じような異端が2つ、期待はしない方が宜しいわね』

『愚か共の中に屑が？まあ良いとして、最後の1つはどういう意味だ？』

『恐らくこの世界の者では無い奴って事。バグに対して初めてみるような立ち振る舞い、更に奴の中にある陽の色が黒いから、異世界からの流れ者で確定ね。まあ陽すら存在しない屑よりは十分ましよ』

『……月の形が真月、真月は”この世界に無き存在”。確かに確定で良いだろうな』

『どうツクヨミ、見てみない？』

『……暇つぶしにはなるだろうな』

目を瞑ったアマテラスと怒りを静めたツクヨミの2人は、”この世界に無き存在”を見始めた。

「グガアアアア！！」

「なんだコイツ等は！？」

ヘヴンズ・ロード  
天国への途にやって来たリザードンは、バグに疑問を抱きながらも武器である聖剣を振るい、バグを斬っていくのだった。この世界ではバグは誰もが知る常識的な事であり、バグを知らないという事は、このリザードンはこの世界の住人ではない。アマテラスが呟いていた”この世界に無き存在”で合っているだろう。

「……クツ、オリ技が使えないなんて！！”ドラゴンクロー”！！」

「グギヤー！！」

「なんなんだ、この世界はっ……！！」

リザードンは必死でバグと戦い、マサトの後を追いかけてゆくのだ。  
った。

「あゝあ、この歳で老化だなんて洒落にならないな……。……79だ  
けど」

マサトは退屈そうに登っていた。彼は4章にて支部長が言っていた  
とおり、この時代まで生きていれば79の老人。しかも彼は52年  
前に既に他界している。何故、死んだ彼が生きているのか。そう思  
っていた矢先、

「……まだくたばる訳にはいかない、俺の野望の為にもな……！！」

マサトは突然そう言い、コートを脱いだ。そのコートの下には、白  
骨化した太古の翼が隠されてあった……

「……」

「どうかされましたか？」

「……いえ」

ツカサは突然手を止め、空を見上げていた。突然のツカサの行動にセイギは疑問に持ち、尋ねてみた。ツカサは何事も無かったかのよう  
に答え、再び手を動かした。

「ゲンター!!」

「りょーかい、火炎車!!」

「!!!」

「……漸く馴染んできたぞ、正直疲れた……」

ノイズプラントの顔に矢を放ったナガレはゲンタにバトンタッチを  
し、ゲンタは火炎車でノイズプラントを焼き払った。前に貰ったペ  
ンダントの効果が漸く彼等に馴染み、今では無傷で戦える程になっ  
たのだった。

「どうやら片付いたみたいですね皆さん」

「ええまあ……」

「この調子で次も行きましょう!」

「……ええ」

「よっしゃあ!」

先程までのテンションの低さは何処にやら、セイギ達は完全復活していた。その代わりに、一体何のために助言したのか、ツカサは若干キレていたとか。その中で、

「（……ひと嵐が吹きそうだな）」

ツカサはそう思いながら、セイギ達に付いて行った。

「……待っているよあの野郎、俺が料理してやるからな」

右拳を震わせながら、リザードンはそう呟いて先に進んで行った。

「……来るなら来いよ、相手してやるぜ、正義の犬が……」

マサトはにやけながらそう呟き、再びコートを着た。



## EP36：この世界に無き存在（後書き）

今回のゲストに関しては、次回紹介します

## EP37：赤・龍・避・逅

＜ウンス・ロード＞  
天国への途 中腹【中間地点】

「……アイツ等は此処には来れないみたいだな、休憩には丁度良い」

中間地点にあるキャンプエリアにバグが近付けられない事を知ったリザードンは、身を休ませていた。とはいえ、天国への途の＜ウンス・ロード＞のような伝説ポケモン管轄のエリアにキャンプエリアがある事は滅多に無い。伝説ポケモン達、みんなバグなんて楽勝と思っているからねえ……  
…おっと、失礼しました

＜ウンス・ロード＞  
上記のような事を言っているのだが、実いうと天国への途みたいな世界に影響を及ぼす地区にの場合、何かあった時の為の保険という事で設立しているパターンが多い。お陰で、そこに住んでいる伝説ポケモンが、某コブラを模した仮面の紫色の戦士並にイライラしている。特にツクヨミが、あとツクヨミが、くどいようだがツクヨミが。大事なので3回言いましたよ

「……しかし、俺のオリ技が使えないとはな。これは長い戦いになりそうだな……とにかく、奴を追わないと……」

リザードンはそう言うと、キャンプ場を後にして山を登って行った。その様子を、変態の如く岩の影から小型のバグが覗いていた。全身紫色のようなスーッ姿で道芸師のような風貌をし、尾てい骨からサソリのような赤くて鋭い尻尾が生えており、全長は10cmと、”

小人”という言葉が合うようなバグだった。

『何だあの凡人？絶対ボクチンに合わないなあ……』

本来、普通のバグは人の言語を話す事なんて大それた事は出来ないが、一部のバグは人語を理解して話す事が可能なバグがいたりする（現に一部のフェンリルが人語を話したりする）。この小型バグは言語を話せる方のようなのだ

小型バグは近くにいた、既に死んでいるガブリがそのまま消滅する前にその頭に乗し、自らの尻尾を突き刺した。すると、死んだ筈のガブリが起き上がった。

「『ヒヤヒヤヒヤヒヤ！ボクチンあの凡人が気に入ったよ！ボクチンに合わないなら、ボクチンが殺すまでもんね！』」

ガブリは生気の無い目をしたまま、小型バグが乗っている事にも気づかず、獣道を使って疾走した。

「……最終兵器は順調に育っている、このまま行けば……」

マサトはそう言い、自身の体を引き吊るように足を進めていた。その様子からして、彼の体は危機的な状況に陥っているに違いない筈しかし、彼の顔に苦しみなんて無い。寧ろ、彼は狂っているかのように笑っていた……

暫くして、何者かが彼に話しかけてきた

見苦しいわよ坊や、そんなに笑うなんて

「……どうやら知能も付いてきたようだな」

私をそこいらのバグと同じにしないで。所詮坊やは鵜で私が鵜飼  
い、私が完全になるまでの単なる商売道具よ

「鵜とは失礼だねえ。寧ろ俺の方が鵜飼いだつつの」

御託はもう聞きたくないわ。さつさとこの山も感染させなさい。  
もうこの世界に、太陽も月も必要ないんだし

「……ちつ、育て方を間違えたか。まあいい……」

マサトは謎の声に悪態をつけたものの、構わずそのまま歩いていった。彼は気付いているのか気付いていないのかは分からないが、彼の影にはマサトだけでなく、その後ろに小悪魔の姿をした何かがい  
た……

「……セイギ、これって」

「うん。誰かがいた痕跡があるよ」

「バグは入れない仕組みになっているのに、こんなに跡があるのは不自然すぎるだろ？自然発火が起きるような場所でもないしな」

「てことは、この任務は他の支部から何人か出てるのか？そうとでもしない限り、辻褄が合わない」

「……」

セイギ達は中間地点に残された痕跡を眺めていた。辺り一帯の木や岩には刀で斬られたような傷跡が残され、地面は強火の火で焦げたような跡もあった。確かにこの山には炎タイプのアマテラスがいるものの、暴君に近いツクヨミと比べて彼女は計算高い性格、下手に自分の領土を荒らすような真似はしない。寧ろそんな事をしている奴がいたら彼女が黙っていられない、ツクヨミを無理矢理引張つてまで殺戮さつりくに走るだろう

ツカサは黙りんで進行方向を眺めている中、セイギとナガレはこの現象について話し合い、彼等の会話を聞いていたゲンタは、珍しく憶測した

「単細胞の熱血バカが天才ぶるな」

「おまつ、たまには熱血バカだって頭使うわ！てか単細胞じゃねえし……」

ただ、ナガレには認めて貰えなかったが

そんな中、未だに黙り込んでいるツカサが気になったのか、セイギが彼に話しかけたのだった

「……ツカサさん？先程からどうかされましたか？」

「……いえ、何でもありません。しかし、この山に誰かがいるのは間違いありませんね」

「本当ですか！？」

「ええ。しかし残念な事に、貴方達の予想とは大幅に違います。他の支部から来ている訳でもなければ、我々の”仲間”でもありません。恐らく、貴方達が前に対立した”ハッカー”でしょうかね？」

「ハッカー……！！！」

「ま、後はちよつと強い一般人でしょうかね？それよりも、実は少しだけ過去を振り返ってたんですよ。こんな怪物にとって、禍々しいとしか言いようの無い……」

「……！！？」

そいいうツカサの顔は、セイギが体内のバグに犯されている時と同じ、悪魔の様な深紅の眼をしてその下には三角の傷が痛々しく傷つ

いている、そんな表情だった。セイギは身の毛を弥立つような恐怖心に襲われ、腰を抜かして力なく座り込んだ

「……どうかされました？」

「へっ？あつ、いや……」

「申し訳ありませんが、僕は先に先行します。貴方達は暫くしてから来て頂けませんか？」

「……分かりました」

「では」

セイギが話しかけられた時には、ツカサは普通の表情に戻っていた。セイギの意識がまだハッキリしていない中、ツカサは彼に先行すると言い、先に中間地点から出て行った。セイギは呆然と立ち竦んでいた

「”シエルブレード”……」

「グギユギヤ……」

「くっ、厄介な奴等め……幾ら弱くたって、こつ数が多いんじゃないか……あ……」

リザードンは苦戦していた。相手が強いからではない、数が多くて体が消耗しているからである

「レディアントリミット レベル2”!!」

「オギヤアアアアアアアア!!」

リザードンがそういうと、持っている大剣の形状がハンマーに替わり、そのハンマーで周囲のバグをなぎ払った。周囲のバグが居なくなった事を確認し、武器を大剣に戻したりザードンはゆっくりと地面に座り込んだ。しかし、そんな彼に誰かが話しかけてきた

「こんな所にいましたか。漸く追いつきましたよ」

「だっ、誰だ!？」

「そう警戒しないでいいですよ。前にお会いしたじゃないですか」

そう言って現れたのは、先行したツカサだった。ツカサはリザードンと会ったことがあるかのように、親しげに接してきた

「誰かと思ったら、ツカサ君か……」

「まっ、こんな御時世ですから警戒しない方がおかしいですよ」



「でも何でこんな所に……？」

「それは此方の台詞ですよ？見たところ、貴方の得意なオリジナル技も使えないみたいですし……」

「……マサトって奴を追いかけてきたんだ」

「マサト？ああ、セイギさんがおっしゃっていたハツカーの」

「アイツを追いかけたらこんな所に来てね、まあ丁度良かったけど……」

「そうですかつと。では此処で会ったのも何かの縁ですし、行きませんが、フォック・リザハートさん」

「別にフォックでいいよ」

ツカサとそのリザードン、フォックは共に山頂へと向かって行った

## EP37：赤・龍・避・逅（後書き）

後書き劇場 色々と注意

セイギ『ゲンター!!』

ゲンタ『セイギ、俺は眠れないんだ、だからヘトヘトになって眠りたいんだ!!頼む、俺を疲れさせてくれ……』

ナガレ「……何やってんだお前等あああああああ!?!」

ゲンタ「いや、今度ウチの孤児院でやる演劇会の練習」

セイギ「知らないの？」タクくん」？」

ナガレ「知っているけど、知っているけど、……それ”BL映画”だろうがあああああああああ!!んなもん子供に見せるなああああああああ!!」

ゲンタ「……やっぱ駄目か。案外いけると思ったんだがなあ……」

セイギ「仕方ない、今更だけど”仮面 イーW”でもやろうか。ゲンタは左で僕がフィリップ、ナガレは……照井でいいか」

ナガレ「俺に役付けするなああああああああ!!」

支部長「誰が教えたあ!!子供向けの演劇会でBL映画やれって!？」

チハル「（ギクッ）」 元凶

こんな後書きですみません

後、うる覚えなので絶対台詞間違ってます。……何故見たって？俺に質問するな！！（いや、知っている俳優がいたので興味本位で見たら……。BL映画だなんて知らなくて……。！！）

今回のゲストは、フォック・リザート様よりご本人が出て下さいました。暫くの間ですが、宜しく御願います

## EP38：この星に生きる者として

「ツカサさんが先行してるお陰か」

「残っているのは消滅しきってないバグの死体と、激戦の跡のみ……」

「あの人ってさ、本当に謎が多いよね」

セイギ達は、先行しているツカサを追って足を進めている……のだが、その道のりが（別の意味で）険しかったりする。バグはいないのがある意味怖い、この道のりが楽なのか苦なのか、それは神のみぞ知る……的な？いや、俄然楽かと。彼等の体力も温存できますしねえ

さておき、それぞれ個人的な感想を述べていながらもこれも仕事の一環、やらないからには何時もなら支部長の阿修羅を喰らうだけで済むが、ツカサが先行しているので下手したら彼の黒剣の怪物に喰られるから尚更怖い、だから維持でも山頂に行かないといけない、と言うわけで、消去法でやるとしても”行く”しかないのだ

ただ、こんな惨状<sup>こて</sup>を仕出かしたツカサには、流石に感服するしかない。笑って誤魔化す事に定評のあるセイギですらスルー出来ないから尚更だ

「とにかく行こうぜ。あまりツカサさん任せするのも悪いしな」

「たまたま見かけたんだがよ、ツカサさん誰かと待ち合わせしていたんだけど、相手あまりにも遅すぎたせいで、その相手が来たときにはイライラが頂点に突破していたのか（自主規制。但し、決してエロではなく殺戮事）してた……」

「（ガクガクブルブル）」

ナガレが意外なツカサの（ストレス）事情を知った所で、とうとう行く事になったのだが……

あ・・はい・・の・

「……なんだ？」

「セイギ？どうした？」

あな・・い・・るのよ

「何だこの声？なんか聞き覚えがある……」

「セイギ？」

「あつ、ゴメン。なんでも無いよ」

貴方は生きるのよ、  
……

「……貴方は生きる」

「セイギどうした!？」

「なんか怖いぞおい!!」

「……悪いけど、先に行つてくれない？」

「……分かった」

ナガレとゲンタは先行した。セイギはその場に座り込み、突然聞こえてきた謎の声を聞いていた

貴方は生きるのよ、……

「……僕の名前を知っている？」

『教授！！ハッカーと呼ぶ奴等が……！！』

『ラボの諸君、君達が実験しているガキを我々によこせ』

『貴方みたいな奴に、この子は……は渡さない！！』

『なら仕方ない……、死神のパーティータイムの始まりだ』

『教授！！このままじゃ持ちません！！』

『こつなつたら……』

『貴方は生きるのよ、……！！』

『そんな、そんなのないよ！！』

『大丈夫！！私達は、この星に生きる者として正しい事をしているの……。生きていれば、何時だって会えるわ……。この星が無くならない限りね』

『漸く見つけた……。そのガキをよこせ！！』

『貴方達に渡すなら、こうするわ！！』

『おい！！』

そして、彼は放り投げられた……

「……僕は、何か大事な事を、忘れていたのか……。！？忘れちゃいけないのに……。どうして……。どうして忘れたんだアああああああああああああ！！うわああああああああああああ！！」

セイギは頭を抱え、嘆き始めた。その悲しく思い叫びは、この山一帯に響き渡った

ヘウンス・ロード  
天国への途 山頂

「よお。太陽の神”天照大神”アマテラスさんと、月の神”月人壮士”ツクヨミさん」

『貴様かあ！？我々の領域を汚し回っているっていう屑ってのはよお！？』

山頂では、マサトが既に到着していた。マサトの登場に対してツクヨミは声を荒げ、彼に威嚇をしていた。アマテラスも冷静に、マサトに対して脅しをかけるように話しかけた

「一般人の貴方が、此处に何の用？もしかして、死に來たのかしら？」

「いやあねえ、実はアンタ等の事をぶっ潰しにきたのよ。今更さあ、アマテラス  
ツクヨミ  
天照大神と月人壮士なんて古いんだよねえ」

「貴様あ！！よっぽど死にたいみたいだなあ！！！」

「貴方の言い分は分かったわ、そんなに自分の陽を消して欲しいのならお望み通りにしてあげるわ！！！」

「生憎俺は死ねない身なんでねえ、相手になってやるよ……！！」

マサトはそう言い、コートの中から大剣を取り出して構えた。2神も戦闘態勢に入り、一番早く動いたのはツクヨミだった

「エアロブラスト」オ！！！」

「効くか、オラア！！！」

ツクヨミはエアロブラストを放つものの、マサトの大剣によって斬り裂かれた。彼は大剣のトリガーを引き、斬撃波を4発放つ。それ



をツクヨミは、背中の月輪を取り出して振り回すように防ぐ

『”火炎放射”!!』

「おっと！」

マサトがツクヨミに気を取られている間、アマテラスは火炎放射を放った。しかしマサトは、身を反るようにかわした。しかし、その隙をツクヨミは逃さない

『”サイコブースト”オ!!』

「うつ……なんてなあ!!」

『ちい!!』

ツクヨミはサイコブーストを放つ。マサトは一瞬怯んだように見えただが、それでも彼はツクヨミに向かって回し蹴りをした。ツクヨミは難なくかわしたが、少しだけ頬を切った

「……やっぱり神様は強さも格も違うねえ」

『貴様っ!!俺達を誰だと思ってるんだ!?!』

『身の程知らずが、私達に刃を向けるとはどういう事なのか分かつ

『ているのかしら!?!』

「分かっているさ、分かてなきやただの馬鹿だろ!!」

『生意気な事を言いやがて……!!』

「さてと、こつからは本気出すか……!!」

マサトがそう言つと、彼の顔に黒い複雑な紋章が表れ、彼の両目が緑から悪魔のような赤い目へと変貌した。その様子を、アマテラスとツクヨミは身の毛も弥立つような思いで恐れた

『なつ、何だ!?!』

『異常なまでに強化している!?!もう奴には陽が存在しない……!!』

「さあ〜てと、『そんじゃパーティーでも始めようぜ!!』」

『上等だ!!』

「『何つ!?!』」

彼の声が二重声になり、彼の背中に武器で構成された翼が現れた時だった。突然誰かがマサトに向かって飛び掛り、大剣を振り下ろした。突然の事にマサトは思ってもおらず、急いで大剣で防いだ

大剣を振り下ろしたのは、先程ツカサと合流したりザードンのフォックだった。追いつくようにツカサも辿り着き、マサトに対して話しかけた。マサトは元の状態に戻り、話し返した

「貴方ですか、セイギさんが言っていた”門矢マサト”というハッカーというのは？」

「……という事は、あんたデバツカーだな。それも、”化物”と罵られても仕方ない程の異端のな」

「それは貴方もでしょう？既に死に至っているというのに、ゾンビのように這いずり回っている貴方に言われたくないですよ」

「まあそうだな。俺も死んでから50年間彷徨っていたが、こんなに楽しい瞬間は初めてだぜ！！化物同士、仲良くやろうぜ！！」

「てめえ、今すぐ俺の手で降してやる！！」

フォックはマサトに向かって言い放った。しかし、彼から発せられた言葉は意外な言葉だった

「……誰だてめえ？」

「……っ、貴様！！覚えてないだ！？俺はてめえが完膚無きまでに叩きのめしやがったソル君の仲間だ！！てめえをブツ潰す為にこの世界に来たんだよ！！覚悟しろ……！！」

「ソル？……ああ、あの時の奴か。俺は案外気に入っていたんだぜ？あそこまで楽しめたのは影山以来だからな」

「全く貴方って人は、何人分の不幸を降らせるつもりですか？」

「気に入っていたとかどうでもいい！！仲間を傷つけた怒り、受けてもらうぞ！！」

『ふざけるな小童が！！ソイツを殺すのは俺達だ！！』

『遅れてきたくせにしゃあしゃあと、悪いけどコレだけは譲れないわ！！』

「でも、コイツだけは俺がやらないといけないんです！！じやなきや、仲間の仇がとれない……」

アマテラスもツクヨミも、フォックに向かって言い放った。彼は戸惑いながらも言い返した。その隙に、マサトは突然やって来たガブリに任せて逃げ出そうとしていた

「一々煩い連中だ！！ソイツの相手でもしている！！」

『逃がすか！！』

『グギャギャ！！』

「待て！！」

ツクヨミは背中の中輪でガブリを切り裂いた。ガブリは一撃で消滅したが、マサトは逃げ出していた。フォックはマサトを追い始め、たまたまやって来たナガレとゲンタとすれ違った

「つて、ナガレ君にゲンタ君じゃないか!!」

「えっ、誰ですか!？」

「あつ、ゴメン。でも後は任せたよ!!」

「ちょっと!……誰だったんだ一体？」

「さあ……」

フォックはそのままマサトを追って下山した。ナガレとゲンタの2人は、訳もわからないまま山頂に辿り着いた

「あつ、お疲れ様ですつて、セイギさんはどうかしましたか？」

「あつ、暫く休むって置いて来ました」

「多分大丈夫かと思います（貴方が殲滅しましたし……）」

『全く、とんだ茶番じゃないの』

『……』

『ツクヨミ？どうしたの？』

アマテラスが呆れる中、ツクヨミは黙っていた。疑問に思ったアマテラスが質問した。すると

「『おらぁ！！』」

『キヤア！！ちょっと、何するのツクヨミ！！』

ツクヨミが月輪でアマテラスを攻撃した。アマテラスは訳がわからないまま質問したが、ツクヨミの口調は先程と比べて変わっていた

「『ヒヤハハハハハハハハ！！皆殺しタイムの始まりだ！！』」

『つたく、何が起きているの！？』

「ツカサさん、一体何が！？」

「……どうやら今回のバグは、厄介ですね」

ツカサは呆れながら話した

## EP39：憑・依・作・戦

ヘウンズ・ロード  
天国への途 道中

山頂が大変な出来事になっているのを知らないセイギは、未だに山頂に向かっていた。その足取りは重く、1歩1歩から負の感情が剥き出しになっているのだが、セイギは歩みを止めようとはしない

「行かなきゃ……、みんなが待っている……!!」

そんな中、セイギは突然目の前に長槍の壁を張った。その壁に幾つもの衝撃が走り、セイギの体にも衝撃が浸透した。セイギが恐る恐る壁から顔を出すと、大剣の弾倉に連結しており、刃の影に隠れて普通からは見えない銃口から銃弾を放ったマサトがいた

「お前は……!!」

「よお、中途半端な感染者さんよお! どうだ? バグも中々な物だろ!?!」

「……残念だけど、気分が悪いかな? 反吐が出るくらいにね」

「強がりやがって、デバツカーがバグ感染したら簡単に修復出来な  
いのは知ってるだろ? そんな事したらデバツカーから強制追放され  
るからな」

「どうして君は、政府が嫌いなのか?」



「今の政府はクズだ、何の役にもたたない。デバツカーに守ってもらっているクセに、何の見返りもないだろ？ 鶏口牛後だっけか？ そんな奴等の言いなりになるよりは、逆らった方が特だろうよ！」

「それでも僕は、たった1%の可能性でも信じる、お前と違って絶対に諦めたりはしない！！」

そう言い放つと、マサトの表情は険しくなり、壁に蹴りを放った。たった1回の蹴りだけで壁は砕け、セイギはよろめいた

「……俺が諦めた？ 馬鹿言え！！俺には野望がある、あのハツカーのリーダーにも出来ない野望がな！！こんな所でくたばる訳にはいかない……、野望を果たす為なら何をしたらって構わない！！だが、何があっても野望を諦めたりはしない！！」

「野望……！？」

「てめえが雑魚のバグだろうが終末を齎すバグだろうが関係無い、誰だろうと俺の邪魔はさせない……！！」

マサトはそう言ってセイギを払いのける。セイギは壁に激突し、ガハツと酸素を吐き出して寄りかかった。彼の前を通るマサトは、怒りが剥き出しのまま言い放った

「肉親の記憶すら無く、ただ操り人形のように動くだけしか能がな

「い奴が、俺の障害になれると思うか？」

「肉親の記憶……、知っているの！？僕の両親が何をしていたのか！！」

「……さあな。だが、てめえはその内ヒトらしくなくなるだろう。その時、てめえの上辺だけの仲間はどうする？あつさり裏切って殺しにかかるだろうがよ。どっちにしろヒトで無くなった以上、その仲間すら喰らい尽くすだろうな」

そう言つて、マサトは立ち去つて行つた。彼の後を追いかけているように、立て続けに1人のリザードン”フォック”がやつて来た。フォックはセイギを一目見ると、すぐ彼に話しかけた

「君は……セイギ君だね。ナガレ君とゲンタ君の親友の」

「貴方は一体……？」

「俺はフォック。世界を回るフリーディセクターだ」

「ディセクター……？」

「詳しい事は後にして。それより、マサトは？」

「アイツは……」

セイギは口ごもる。普通に下山したと言えば良いのにも関わらず、

何故か口に出そうとしない。普通だったらこの時点でフォックに怪しまれるかもしれない

しかし彼はセイギを責めようとはせず、優しく接した

「大丈夫、無理に答えなくてもいいよ。何か理由があるんだろう？」

「えっ……」

「うん、何も答えなくていいよ」

「……」

フォックの言葉に、セイギは黙り込んだ。自分が思ってもいなかった言葉だから、脳内でこんがらがって何も言えなくなるのは仕方がない。だが、彼はそのまま立ち上がり、フォックに向けて笑みを浮かべ、携帯端末の”通話”をタッチし、連絡をした

「あつ、ナガレ。悪いけど僕は下山する、門矢マサトを追跡する」

「セイギ君……」

「……僕も、彼に用があります。だから、一緒に追いましょ」

「……よし」

天国への途 山頂

「『ハッハア！！』」

『クッ！！どっという考えなのよツクヨミ！！』

「いやっ、先ずは何があつたのか説明を！！」

「……成る程」

「って、もう分かつたんですか！？」

山頂では、1つの同士討ちバトルロワイヤルが起こっていた。何らかの衝撃で脳内回路でも可笑しくなったのか、ツクヨミが狂いはじめ、アマテラスやナガレ達に向かつて月輪を振り回しながら襲いかかっていたのだ。ツクヨミの行動に、他の4人は驚きを隠せない。だが、ツカサだけは何かに気付いたかのように余裕だった

「手品にタネがあるように、ツクヨミ様があなつた事にもタネがあります。しかし、タネ明かしは御自分で御願いますよ」

「タネ……ですか？」

「敢えてヒントを与えるなら、”モロい物は簡単に壊れる”……ですかね？」

『いい加減にしろ！！』

「『ガッ！！』」

「うつ！……」

「おい、どうした！？」

怒りが頂点に達したアマテラスは、とうとうツクヨミを攻撃した。その攻撃を一応月輪で防いだものの、彼女の力が強すぎたせいでツクヨミは大きく吹き飛ばされ、仰向けに倒れた

それと同時にナガレの動きが止まり、一瞬よろめいた。倒れ込む彼をゲンタが支えるが、

「『……隙ありっ！』」

「ガッ！？」

その3秒後にゲンタの体に衝撃が走り、彼は吹き飛んだ。ナガレは地面に右手を着けて着地、そのまま立ち上がった。不気味な笑みと、数十本も引いている矢と共にだ

「『ヒヤハハハハハハ！油断大敵なあこの事だなあ！！』」

「今度は相棒<sup>ナガレ</sup>か……くっ！」

『うつつ…』

『ツクヨミ!?!』

『……アマテラスか? 一体何が起きているんだ?』

『まさかあんた、覚えてないの!?!』

『ああ…』

「『随分余裕そうに話してるなあ、そんなんで良いのかな?』」

『!!?!?!?!』

「『蜂の巣になりな!! おらあ!!!』」

ナガレは数十本の矢を、アマテラスとツクヨミに向かって放った。数からして避けるのは至難、そう感づいた2体はそれぞれ羽衣と月輪で弾き返した

弾き返された矢の殆どはナガレに向かって帰ってきたが、彼は全てバックステップでかわした。その隙を狙ったのか、ナガレが気づいた頃にはゲンタが自分の懷に潜り込んでいた

「『なつ!?!』」

「借りたものは……返してやるよおらあ!!!」

「『ぐはあっ！！』」

ゲンタの殴りは強く、打たれ弱いナガレでは簡単に吹き飛んでしまう。ナガレはワイヤーアクションの如く吹き飛び、地面に着地して崩れ落ちた。しかし

「『あっはっはっ！全員纏めて燃やしてやるわ！！』」

『アマテラス！？』

「ああもう、ややこしいなったく！！」

今度はアマテラスが暴走、”聖なる炎”を無差別に暴発していた。幾つかの炎は地を這うように走り、地上にいるゲンタ達に襲いかかったのだ。ゲンタやツカサはともかく、脱力しているナガレでは避けられない。咄嗟の判断で、ゲンタはナガレを抱えて走った

「おい、起きろよムッツリスケベ！！」

「……ムッツリスケベ言うな熱血バカが！」

「ったく……」

「『はあああああ！！』」

『目を…覚ましやがれ!!』

「『キャアツ!!』……痛いじゃないのツクヨミ!」

ゲンタがナガレを起こしている一方で、ツクヨミは自身の体が一時的に燃えているのにも関わらず、アマテラスの頬を叩いて正気に戻させようとした。叩かれた衝撃で、アマテラスは正気に戻った……が

「ガハッ!!」

「『ハッ!?!死に損ないの分際で、笑わせんじゃねえよ!!』」

「ゲンタ…お前……!!」

ゲンタがナガレの胸倉を掴み、地面に激しく叩きつけていた。ナガレは吐血しながらも、血の味がする口元を噛みながらゲンタに話しかけた

「『お前も死ぬんだな!相棒さんよお!!』」

「マジ…かよ……グッ!!」

ゲンタはそう言って、大斧を振り上げた。ナガレは脱出しようにも、パワーでは自分よりも遥かに上のゲンタに抑えられたら、非力な自分ではどう頑張ろうが抗おうが逃げられない。ナガレは死を覚悟し



た……が

「『ガッ！！』」

「……えっ？」

「いい加減黙って下さい」

ゲンタが突然気絶した。背後にいたツカサが、右手をピンと伸ばして彼に向かって見下すような表情をしている事から、恐らくチョップでもしたと思われる

助かった……

そう思ったナガレだったが、ツカサが左手に持っていた黒剣を、しかも怪物を解放しながら、自分に向けている姿を見て、再び絶望した

「そんな……！！」

「『ボクチンは憑依のプロフェッショナルでね、生物なら例え死んでいようがお構い無しに憑依出来るんだよねえ』」

「憑……依……？」

「『まあ、もう死ぬんだから今更知識をため込んだって意味ないっしょ？』」

『グガアアアアア！！』

「『ヒヤーツハツハツハツ!!あばよ!!』」

ツカサはそう言い、黒剣を振り下ろした

喰われる……!!

ナガレは再び死を覚悟した。そして黒剣は振り下ろされ……

『ギャツ!?!』

「『『!?!』』」

……る事は無く地面に突き刺され、ツカサの右腕が背後にいたバグの尻尾を掴んだのだった

「……生憎、僕は憑依される程ヤワではありませんから」

『何でだ何でたーっ!!ボクチンは憑依のプロフェッショナルだぞーっ!!!』

「小さっ…………」

『コノヤロウ小さい言っな！！気にしてんだぞ！！』

「コイツは”ツクモ”と言いまして、単体での力は一切ありませんが、バグの死骸に憑依して操る力を持つているんですよ。デバツカーにも憑依するし、正直言ってフェンリルよりも厄介なバグなんですよ。衝撃に弱くてすぐ憑依解除しますがね。因みに名前の由来はつくもがみ九十九神から来ていましてねえ…………」

「だからあんなヒントを…………」

「昔からこういうのに多生の耐性がある者ですから、こうして難なく捕まえる事ができました」

『耐性…………！？』

ツカサがわざと演技をしていた事が発覚し、この小型バグ”ツクモ”についてスラスラと説明していた。ツクモは体を揺らして逃げようとするも逃げられない、それ所かナガレの発言にキレていた

「さて…………、野放しにすると流石に厄介なので…………」

『ウヒヤア！？』

そして、ツカサはツクモを真上に投げた。ツクモの小さい体は高く飛ばされ、重力によって落ち始めた

叩きつけるだけか！？

そんなので我々の怒りが収まるものか！！

ツカサさん、一体何を考えているんだ！？

……

ツカサを除いた残り全員の様々な考えが交差する中、ツクモと地面との距離が残り10mを切った時だった。ツカサの左手が、地面に刺している黒剣に向かって伸ばしているのは

『ガアアアアアアア！！』

『ギャアアアアアア！！』

「……喰ってさしあげますよ」

逆手に持った黒剣を払うように上空に向けて振り、真上にツクモを捕らえる前に怪物を解放、そのままツクモは重力に従って怪物の口の中へと入って行った

殺人鬼のような表情のツカサは、ツクモの血が滴り落ちながらそれだった物を噛み砕いている黒剣を順手に持ち替えた。本来なら直ぐに暴れる黒剣怪物だったが、今回は喰い終わると直ぐに引っ込んだ

「おや珍しい、コイツが大人しく静まるとは初めてですね。こないだのソルさんの喝が効いたのでしょうかね？」

「……はあ」

「さて……。そろそろ行きますよ、フォックさんの所に。セイギさんが来ないという事は、恐らくフォックさんと共に行動している可能性がありますしね」

「はい」

「……数多くの無礼、失礼しました。アマテラス様にツクヨミ様」

ツカサはそう言い、ゲンタを背負うナガレの支えをしながら、3人は下山した

残されたアマテラスとツクヨミは……

『……ちつ、ぬかつたぜ』

『……あのツタージャは危険よ。奴の体内に眠る神が目を覚ました時、世界を喰らいかけないわ』

『ああ。それに、奴と似たニオイの奴も危険だ。近い将来、世界を喰らいに走るだろうな……』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7017o/>

---

Pocket Monster Fantasia ケルベロスのウタ

2011年11月24日19時48分発行